

笠木地蔵遺跡

山梨県中央自動車道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1985.10

山梨県教育委員会
日本道路公団

笠木地蔵遺跡

山梨県中央自動車道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1985.10

山梨県教育委員会
日本道路公団

序

本報告書は、中央自動車道建設にさきだち、甲府盆地の東部に位置する山梨県東八代郡一宮町地内で発掘調査した笠木地蔵遺跡について、その成果をまとめたものであります。

一宮町は、原始時代から人々の生活の跡を語る埋蔵文化財が濃厚に分布する地域で、この町をほぼ東西に貫通する中央自動車道の建設地には、東端の勝沼町にかけての积迦堂の大遺跡群に始まり、西へ向って東新居遺跡、北堀遺跡、当笠木地蔵遺跡、豆塚遺跡、四ツ塚古墳群等々が存在し、その発掘調査はすべて1981年度までに終了いたしました。現在当埋蔵文化センターにおいて鋭意整理中であり、完了したものから逐次調査報告書を刊行いたしております。

笠木地蔵遺跡は、国指定史跡甲斐国分寺跡の南東約500m、金川扇状地上の一宮町大字国分字笠木地蔵・麦屋敷に位置し、1980.81両年度に約9,500m²の地が発掘調査されました。その結果、国分期以降の住居址31軒、掘立柱建物址1軒、溝13本、水溜1基のはか土塙約400基が確認され、それらの遺構から出土した土師器・土師質土器によって、本遺跡が10世紀末葉から13世紀代まで、大きく四時期にわたって存続したことが明らかとなりました。このうち、中心となる時代は、18軒の住居址が確認された第Ⅲ期ですが、その実年代について、調査者は、慎重に12世紀代とするやや幅広い期間を与えております。

この地方は、律令時代には甲斐国分寺・国分尼寺などが置かれ、甲斐の文化の中心地として繁榮し、「和名抄」記載の郷名の集中する地域ですが、本遺跡は隣接する北堀遺跡とともに「和名抄」にいう山梨郡林部郷に属したと考えられ、平安時代の末、12世紀代を中心に集落の存続した事実が確認せられた次第です。本報告書が甲府盆地東部の歴史、とくに平安時代の集落の存在形態を究明する一資料として多くの方々にご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜わった関係機関各位並びに直接調査に従事していた方々に厚く御礼申し上げます。

1985年10月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例　　言

1. 本報告書は、昭和54・55年度に日本道路公団東京第二建設局から委託されて山梨県教育委員会が実施した、東八代郡一宮町に所在する笠木地蔵遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書作成の経費は、昭和60年度の日本道路公団東京第二建設局と山梨県教育委員会の契約による。
3. 発掘調査は末木健、長沢宏昌、出月洋文が、出土品等の整理及び報告書の作成は長沢宏昌が担当した。
4. 本報告書の編集、執筆は長沢宏昌が行った。ただし第Ⅲ章第1節は保坂康夫が執筆した。
5. 写真撮影は、遺構を末木健、長沢宏昌、出月洋文が、遺物を塚原明生（日本写真家協会会員）が行った。
6. 本報告書にかかる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
7. 出土品整理参加者

宝福寿美江、遠藤映子、石田文次郎、山本治代、渡辺薰、高野俊彦、羽中田恵子、丸山孝子、広瀬千江美、坂本祐波

8. 本報告書の作成にあたって、下記の方々の協力を得た。記して謝意を表する次第である。

橋崎彰一（名古屋大学教授）

服部敬史（八王子市教育委員会）

森田 稔（神戸市立博物館）

浅野晴樹（埼玉県立歴史資料館）

服部寛喜（神奈川県立埋蔵文化財センター）

小林 真（甲斐丘陵考古学研究会会員）

平野 修（白州町教育委員会）

深山重武

目 次

第 I 章 調査状況	1
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 調査組織	1
第 II 章 遺跡概況	2
第 1 節 位 置	2
第 2 節 地理的・歴史的環境	2
第 III 章 遺構と遺物	5
第 1 節 先土器時代及び縄文時代草創期	6
第 2 節 縄文時代（早期以降）	7
第 3 節 古墳時代	8
第 4 節 平安時代	9
1. 住居址	9
2. 土塙群	48
3. 川 跡	64
第 5 節 中世・近世	65
1. 掘立柱建物址	65
2. 溝	66
3. 墓 塚	70
4. グリッド出土遺物	74
第 IV 章 ま と め	76
参考文献	87

挿図目次

第 1 図 遺跡位置図	第 34 図 10号住居址平面図
第 2 図 笠木地蔵遺跡全体図	第 35 図 10号住居址出土土器
第 3 図 グリッド概略図	第 36 図 11号住居址平面図
第 4 図 尖頭器・有舌尖頭器	第 37 図 11号住居址カマド
第 5 図 グリッド出土土器	第 38 図 11号住居址出土土器
第 6 図 土製品	第 39 図 12号住居址平面図
第 7 図 グリッド出土石器	第 40 図 13号住居址平面図
第 8 図 古墳平面図	第 41 図 13号住居址カマド
第 9 図 金環	第 42 図 13号住居址出土土器
第 10 図 1号住居址平面図	第 43 図 14号住居址平面図
第 11 図 1号住居址カマド	第 44 図 14号住居址カマド
第 12 図 1号住居址出土土器	第 45 図 14号住居址出土土器
第 13 図 2号・3号住居址平面図	第 46 図 15号住居址平面図
第 14 図 2号住居址カマド	第 47 図 15号住居址出土土器
第 15 図 2号住居址出土土器 その1	第 48 図 16号住居址平面図
第 16 図 2号住居址出土土器 その2	第 49 図 16号住居址カマド
第 17 図 4号住居址平面図	第 50 図 16号住居址出土土器
第 18 図 4号住居址カマド	第 51 図 17号住居址平面図
第 19 図 4号住居址出土土器 その1	第 52 図 18号住居址平面図
第 20 図 4号住居址出土土器 その2	第 53 図 18号住居址カマド
第 21 図 5号住居址平面図	第 54 図 19号住居址平面図
第 22 図 5号住居址カマド	第 55 図 19号住居址カマド
第 23 図 5号住居址出土土器	第 56 図 19号住居址出土土器
第 24 図 6号住居址平面図	第 57 図 20号住居址平面図
第 25 図 6号住居址カマド	第 58 図 21号住居址平面図
第 26 図 6号住居址出土土器	第 59 図 21号住居址カマド
第 27 図 7号住居址平面図	第 60 図 21号住居址出土土器
第 28 図 7号住居址カマド	第 61 国 22号住居址平面図
第 29 図 7号住居址出土土器	第 62 国 22号住居址カマド
第 30 国 8号住居址平面図	第 63 国 22号住居址出土土器
第 31 国 8号住居址カマド	第 64 国 23号住居址平面図
第 32 国 8号住居址出土土器	第 65 国 23号住居址カマド
第 33 国 9号住居址平面図	第 66 国 23号住居址出土土器

- | | | | |
|---------|------------|---------|-------------------|
| 第 67 図 | 24号住居址平面図 | 第 103 図 | 土塙群 その13 |
| 第 68 図 | 24号住居址カマド | 第 104 図 | 土塙群 その14 |
| 第 69 図 | 24号住居址出土土器 | 第 105 図 | 土塙群 その15 |
| 第 70 図 | 25号住居址平面図 | 第 106 図 | 土塙群 その16 |
| 第 71 図 | 25号住居址出土土器 | 第 107 図 | 土塙群 その17 |
| 第 72 図 | 26号住居址平面図 | 第 108 図 | 土塙群 その18 |
| 第 73 図 | 26号住居址カマド | 第 109 図 | 土塙群 その19 |
| 第 74 図 | 26号住居址出土土器 | 第 110 図 | 土塙群 その20 |
| 第 75 図 | 27号住居址平面図 | 第 111 図 | 土塙出土土器 |
| 第 76 図 | 27号住居址カマド | 第 112 図 | 川跡出土土器 |
| 第 77 図 | 27号住居址出土土器 | 第 113 図 | 掘立柱建物址平面図 |
| 第 78 図 | 28号住居址平面図 | 第 114 図 | 柱穴内出土土器 |
| 第 79 図 | 28号住居址カマド | 第 115 図 | 1号・9号・10号溝平面図 |
| 第 80 図 | 28号住居址出土土器 | 第 116 図 | 2号・3号・4号溝平面図 |
| 第 81 図 | 29号住居址平面図 | 第 117 図 | 5号・6号・7号・8号溝平面図 |
| 第 82 図 | 29号住居址カマド | 第 118 図 | 4号溝平面図 |
| 第 83 図 | 29号住居址出土土器 | 第 119 図 | 11号・12号・13号溝平面図 |
| 第 84 図 | 30号住居址平面図 | 第 120 図 | 1号～10号溝出土土器 |
| 第 85 図 | 30号住居址カマド | 第 121 図 | 1号墓塚平面図 |
| 第 86 図 | 30号住居址出土土器 | 第 122 図 | 1号墓塚出土陶器 |
| 第 87 図 | 31号住居址平面図 | 第 123 図 | 1号墓塚出土ガラス玉 |
| 第 88 図 | 31号住居址出土土器 | 第 124 図 | 1号墓塚出土古銭 |
| 第 89 図 | 住居内出土鉄製品 | 第 125 図 | 3号墓塚平面図 |
| 第 90 図 | 住居内出土石器 | 第 126 図 | 3号墓塚出土古銭 |
| 第 91 図 | 土塙群 その1 | 第 127 図 | 2号・4号・5号墓塚平面図 |
| 第 92 図 | 土塙群 その2 | 第 128 図 | 4号墓塚出土陶器 |
| 第 93 図 | 土塙群 その3 | 第 129 図 | 4号墓塚出土土製品 |
| 第 94 図 | 土塙群 その4 | 第 130 図 | 5号墓塚出土古銭 |
| 第 95 図 | 土塙群 その5 | 第 131 図 | 墓塚出土キセル |
| 第 96 図 | 土塙群 その6 | 第 132 図 | グリッド出土陶器 その1 |
| 第 97 図 | 土塙群 その7 | 第 133 図 | グリッド出土陶器 その2 |
| 第 98 図 | 土塙群 その8 | 第 134 図 | グリッド出土古銭 |
| 第 99 図 | 土塙群 その9 | 第 135 図 | 土師器・土師質土器編年図 その1 |
| 第 100 図 | 土塙群 その10 | 第 136 図 | 土師器・土師質土器編年図 その2 |
| 第 101 図 | 土塙群 その11 | 第 137 図 | 笠木地蔵Ⅰ期・Ⅲ期、皿・坏類法量図 |
| 第 102 図 | 土塙群 その12 | | |

図版目次

- 図版1 笠木地蔵遺跡全景、同上
- 図版2 調査風景、古墳
- 図版3 1号住居址遺物出土状態、2号・3号住居址
- 図版4 4号住居址、4号住居址カマド(正面)
- 図版5 4号住居址カマド(側面)、5号住居址
- 図版6 6号住居址、8号住居址
- 図版7 8号住居址カマド、9号住居址
- 図版8 10号住居址、11号住居址
- 図版9 11号住居址カマド付近遺物出土状態、13号住居址
- 図版10 14号住居址、18号住居址
- 図版11 19号住居址、20号住居址
- 図版12 22号住居址、23号住居址
- 図版13 24号住居址、26号住居址
- 図版14 27号住居址、29号住居址
- 図版15 29号住居址遺物出土状態、30号住居址
- 図版16 挖立柱建物址(南から)、同上(東から)
- 図版17 挖立柱建物穴(D-D'×G-G')、(E-E'×H-H')、(E-E'×G-G')、
(A-A'×I-I')、(B-B'×H-H'セクション)、(A-A'×I-(セクション))
- 図版18 土塙群、土塙群
- 図版19 土塙群、124号土塙工具痕
- 図版20 1号溝・土塙群、川跡
- 図版21 5号・6号溝、5号～8号溝
- 図版22 2号溝、1号墓塙遺物出土状態
- 図版23 1号墓塙遺物出土状態、3号墓塙人骨
- 図版24 尖頭器(左57号土塙、右グリッド)、グリッド出土繩文土器、グリッド他出土石器
- 図版25 グリッド他出土土製品、古墳出土金環、1号住居址出土土器
- 図版26 1号住居址出土土器・白磁、2号住居址出土土器
- 図版27 2号住居址出土土器・白磁、4号住居址出土土器
- 図版28 4号住居址出土土器、5号住居址出土土器
- 図版29 7号住居址出土土器・陶器、8号住居址出土土器
- 図版30 8号住居址出土土器、10号住居址出土土器
- 図版31 11号住居址出土土器
- 図版32 11号住居址出土土器、13号住居址出土土器、14号住居址出土土器、15号住居址出

土土器、16号住居址出土土器

- 図版33 19号住居址出土土器・炭化物、21号住居址出土土器、22号住居址出土土器、23号住居址出土土器
- 図版34 24号住居址出土土器、25号住居址出土土器・陶器
- 図版35 26号住居址出土土器、27号住居址出土土器
- 図版36 28号住居址出土土器、29号住居址出土土器
- 図版37 30号住居址出土土器、31号住居址出土土器、16号土塙・126号土塙・134号土塙・204号土塙・216号土塙・242号土塙・247号土塙・247号土塙・266号土塙・380号土塙・383号土塙内出土土器
- 図版38 川跡出土土器、溝出土土器、住居址出土石器（左から30・24、右から17・12号住居址、中央はグリッド）
- 図版39 29号住居址出土刀子、1号住居址出土刀子、15号住居址出土鉄製品、21号住居址出土刀子、30号住居址出土鉄製品、22号住居址出土鉄製品、1号墓塙出土陶器
- 図版40 1号墓塙出土ガラス玉、4号墓塙出土陶器
- 図版41 4号墓塙出土陶器（裏面）、4号墓塙出土土製品、墓塙出土キセル
- 図版42 古銭（1号墓塙、5号墓塙、グリッド）
- 図版43 グリッド出土陶器

第Ⅰ章 調査状況

第1節 調査に至る経過

- 昭和54年11月21日 文化庁に発掘通知を提出する。
昭和54年12月18日 文化庁より県教育委員会へ発掘通知の受理通知書が送付される。
昭和55年2月1日 第一次調査を開始する。
昭和55年8月15日 第一次調査を終了。
昭和56年3月1日 第二次調査を開始する。
昭和56年4月30日 第二次調査を終了。
なお、調査終了後に石和警察署へ発見通知を提出する。

第2節 調査組織

- 調査主体 山梨県教育委員会
調査担当者 末木 健（県文化財主事）
長沢宏昌（県文化財主事）
出月洋文（県文化財主事、現谷村第一小学校教諭）
調査員 井川達雄（明治大学卒、現（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）
保坂康夫（広島大学卒、現県文化財主事）
補助調査員 渡辺儀訓（明治大学学生、現下吉田第二小学校教諭）
作業員 中島保、窪寺勝則、日原喜昭、久保田典雄、早川かとり、川上勝子、中村みどり、中沢益、中川文武、武田良子、奥村澄江、小林竹子、水谷富子、小林富志江、田草川かみじ、金子美枝、田中きくの、豊角ちかの、田草川和子、
広瀬英代、雨宮照子、原田好子、深山幸子、田中仁子、小林美人、山下ちづ子、飯島昭子、榎原登紀子、豊島勝美、雨宮みよじ、小河順一、岩間まこと
降矢やす子、笠井公子、内藤和子、松岡美恵子、古屋邦治、須田君子、飯島きく子、飯島和子、袖野光、矢花克己、飯室明夫、小河いつえ、石川陽一、
山本成美、村松徳子、船田泰子、守屋真理、丸山栄子、古屋泰美、田村幸貴
古屋春人、梶原生己吉、関本剛、広瀬弘行、佐藤和子、雨宮茂、奥村一章、
古屋きく、原田かつ子、小沢幸江、飯島明子、窪田満子、稻葉みち子、雨宮
かおる、古屋一恵、須田すみ代、古屋きくえ、古屋昌千代、雨宮延子、稻葉
かめ代、日原明美、龍沢昇、雨宮久子、田草川日出子

（順不同）

第II章 遺跡概況

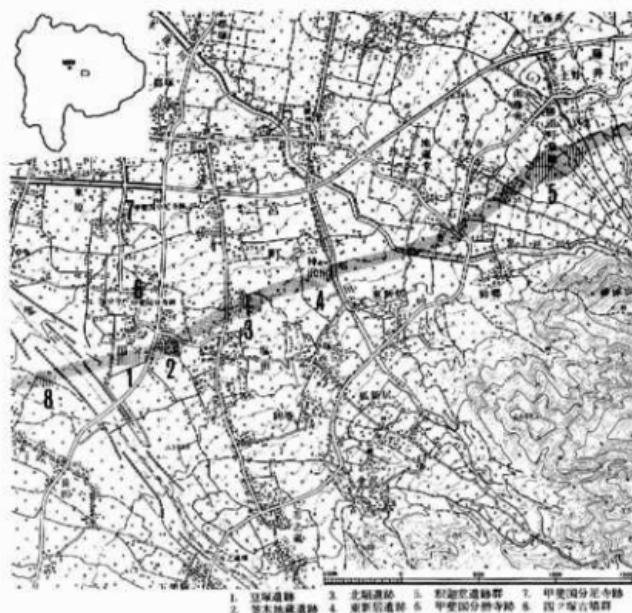
第1節 位 置

山梨県東八代郡一宮町国分字笠本地蔵・麦屋敷に所在する。

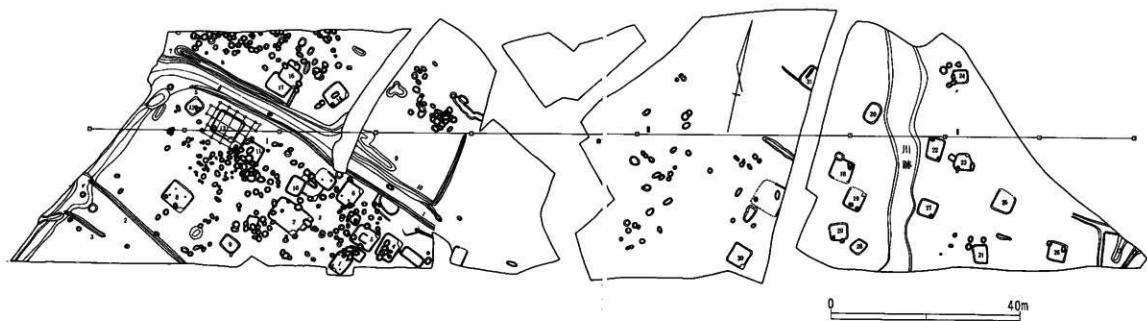
第2節 地理的・歴史的環境

本遺跡の所在する一宮町は、甲府盆地東部、県中央部を北東から南西に走る御坂山塊の北側に位置し、この地域は、笛吹川支流の金川、日川、御手洗川などによって複合扇状地が形成されている。

本遺跡は、これらの扇状地のうち、金川扇状地の扇央部に近く、発掘調査区域の標高は381m～382mを測る。当地では多くの遺跡が確認され、居住は先土器時代にまで遡ることが明らかになっており、本遺跡のほか、駿遊堂遺跡群(5)で遺物が出土している。縄文時代では、駿遊堂遺跡群が早期末と中期の集落として有名であるが、北堀遺跡(3)、豆塚遺跡(1)でも中期、晚期の住居址が調査され、また、付近での耕作中の遺物出土も多い。このように、本遺跡一帯には、縄文時代の遺跡が非常に多く分布している。弥生時代の遺構、遺物の確認された例は多くはないが、塩田地内、国分地内、豆塚遺跡などで遺物の出土がある。また、金川沿岸や千米寺地内には後期古墳が集中しており、県下でも有数の古墳群として知られている。この時期の住居址も北堀遺跡他数ヶ所で調査例がある。奈良、平安時代には、古代甲斐国の中心地として、甲斐国分僧寺、国分尼寺などを中心に多くの遺跡が存在する。隣接の北堀遺跡では、該期の住居址52軒が調査され、『和名抄』所載の郷のうち、「山梨郡林戸郷」を形成する集落の一つと推定されている。本遺跡の主体を成すのは、平安時代末期で、北堀遺跡、東新居遺跡(4)、でもこの時期の集落が確認されており、当地方が、奈良・平安時代全般を通して繁栄していたことが窺える。



第1図 遺跡位置図



第2図 笠木地蔵遺跡全体図

第III章 遺構と遺物

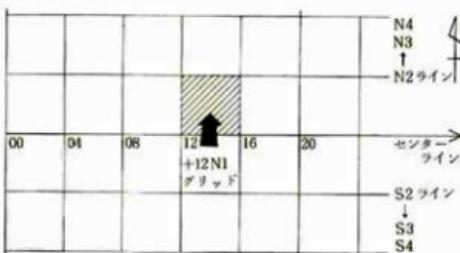
本遺跡の調査区域は、幅約50m、長さ約190m、面積約9,500m²に及ぶ。調査は、区域内のセンターライン（東西方向）を基準に、南をS、北をN、それぞれセンターラインから外に向って1.2………

と定め、西方向から工事用STANo. に従って4m×4mのグリッドを設定し、全面調査を行った。（グリッド概略図）

国分地内では、以前より、縄文土器、石器、土師器、須恵器などが、表面採集や耕作中の出土によって確認されており、縄文時代、平安時代の集落の存在が予想された。

遺跡は、金川扇状地の扇中央東縁に位置し、調査区の両端は深い谷によって制限されている。まず、遺跡西側については、西の豆塚遺跡と区切られる深い幅広の谷が存在し、これによって制限されるが、谷の東斜面は極めて緩やかな傾斜で本遺跡に続く。この間に住居址の存在も予想されたため、トレンチを数ヶ所入れたが、後述する、すでに破壊された古墳1基が確認されたにすぎない。遺跡東側も深い幅広の谷が存在し、約400m離れて北堀遺跡が存在する。金川扇状地上には、このような、幅広の深い谷が無数に形成されており、それぞれの尾根状部分に遺跡が立地している。豆塚、笠木地蔵、北堀の三遺跡は二つの深い谷に制限されて近接することになる。本遺跡立地部分の表土下には暗褐色土が堆積し、その下は黄褐色砂質土層となる。遺構は、暗褐色土層から掘り込まれ、地山である黄褐色砂質土層に至っている。

調査の結果、平安時代の住居址31軒、掘立柱建物址1棟、平安時代～中世にかけての土塙約400基、平安時代以降の溝13本、水溜め遺構1基、近世墓塚、川跡などが確認された。平安時代の住居址は、過去調査例の少ない末期を中心とするものが多く、調査区全域で確認されている。特に、住居址内から白磁の出土している例があることを記しておく。土塙群は、調査区西侧に集中してみられ、既報告の北堀遺跡同様、溝の存在する部分を中心に存在する。近世墓塚は5基を報告するが、調査区域内に寺院、墓地があり、さらに数多くの墓塚が存在したことは疑いない。



第3図 グリッド概略図

第1節 先土器時代及び縄文時代草創期

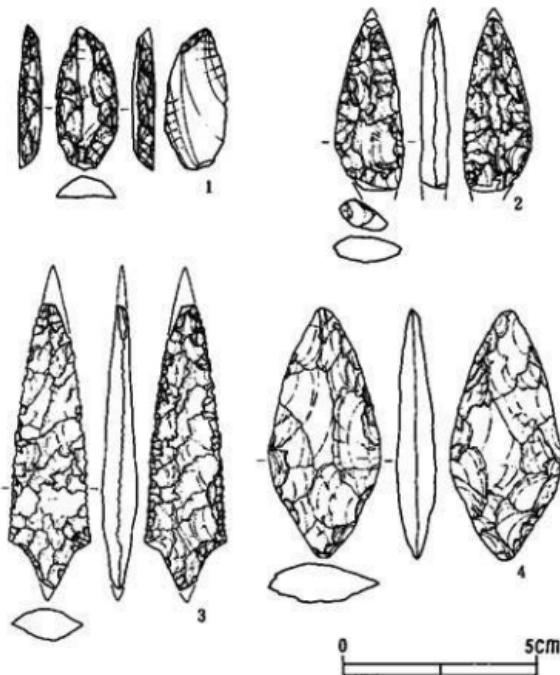
本遺跡から2点の槍先形尖頭器が出土した。第4図1は、片面周辺加工の槍先形尖頭器である。素材に横長剥片を用いている。背面には素材の剥離面が2枚見られ、1枚は非常に広く剥離方向が主剥離面と約90°食い違う。調整はかなり急角度でなされ、素材主剥離面の剥離方向に直交する方向に主軸を設定して、幅広木葉形に仕上げられている。先端部の主剥離面側に小剥離が見られるが、加撃点が一致することから事故的なものだろう。基部端に新しい欠損がある。小型幅広の片面周辺加工尖頭器は、東京都仙川遺跡などに類例を求めることができよう。石材は信州產と思われる黒曜石。58号土塙内出土。2は、両面加工の槍先形尖頭器である。基部を大きく欠損するが、片側中央や下方が張り出す形態である。欠損面は風化の度合が他の面と同程度で、加撃点が縁部にあることから、加工時に欠損した可能性がある。先端部も一部欠損している。こうした、左右非対称の小型品は、先土器時代だけでなく神奈川県寺尾遺跡のように縄文時代草創期にもみられ、限定がむずかしい。石材は信州產と思われる黒曜石。表土中出土。3・4は、深山重武氏所蔵の表採資料で、今回参考資料として提示した。3は、本遺跡に隣接する豆塚遺跡表採の有舌尖頭器である。舌部端及び先端を欠損している。舌部の付け根はくの字形に屈折するが、

かえりは形成していない。

身部下部の身部端突出部に至る部分は、両縁部がやや内彎する。舌部以外の縁部に片面側から鋸歯加工がなされている。

小瀬ヶ沢系の範疇に入る。

チャート製。4は、本遺跡内表採の木葉形槍先形尖頭器である。両面加工で、素材の剥離面は残存しない。中央や下方に最大幅があり、それより下方の基部側は厚みが増すせいか階段状剥離が顕著である。安山岩製。2同様寺尾遺跡にも類例があり、時期の限定がむずかしい。

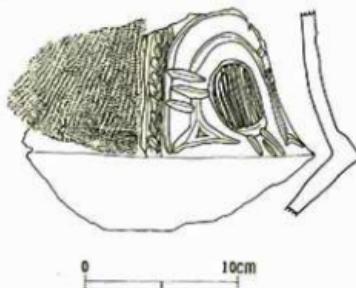


第4図 尖頭器・有舌尖頭器

第2節 繩文時代（早期以降）

本遺跡では該期の遺構は全くなく、遺構確認作業中に遺物がわずかに出土したにすぎない。ここでは状態の良好なものを示すこととした。

土器は、極くわずかで、小破片が多く、時期の明瞭なものは第5図に示した1点だけである。整形、施文、焼成とも良好な井戸尻Ⅲ式土器である。



第5図 グリッド出土土器

土製品

1. グリッド出土。块状耳飾破片と思われる。胎土に長石・石英粒を含む。全面に赤色顔料が塗布されている。前期に位置づけられよう。

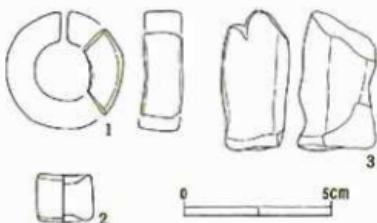
2. 4号住居址出土。滑車形耳飾。胎土には、石英・長石粒が含まれており、褐色を呈する。後期あるいは晩期に位置づけられる。

3. 4号溝出土。土偶脚部。胎土には、砂粒が多い。表面のところどころが剥離している。灰褐色を呈する。中期に位置づけられよう。

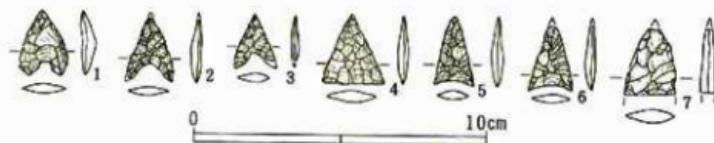
石器

石鏃7点が出土している。この他には、打製石斧の破片がわずかにみられるだけである。

打製石斧は、極くわずかで、すべてが破損しており、図は割愛した。石鏃は7点が出土しており、1～4・7が黒曜石製、5・6がチャート製である。形態は1～3が凹基無茎鏃、4～6が平基無茎鏃で、いずれも薄く丹念に整形されている。7は、これらと違い剝離が荒く整形されている。やはり薄いつくりで、尖頭器の可能性もあるが、一応、大型の石鏃としておきたい。なお重量は、1:1.1g、2:0.9g、3:0.5g、4:1.2g、5:1.0g、6:0.9g、7:1.8gである。

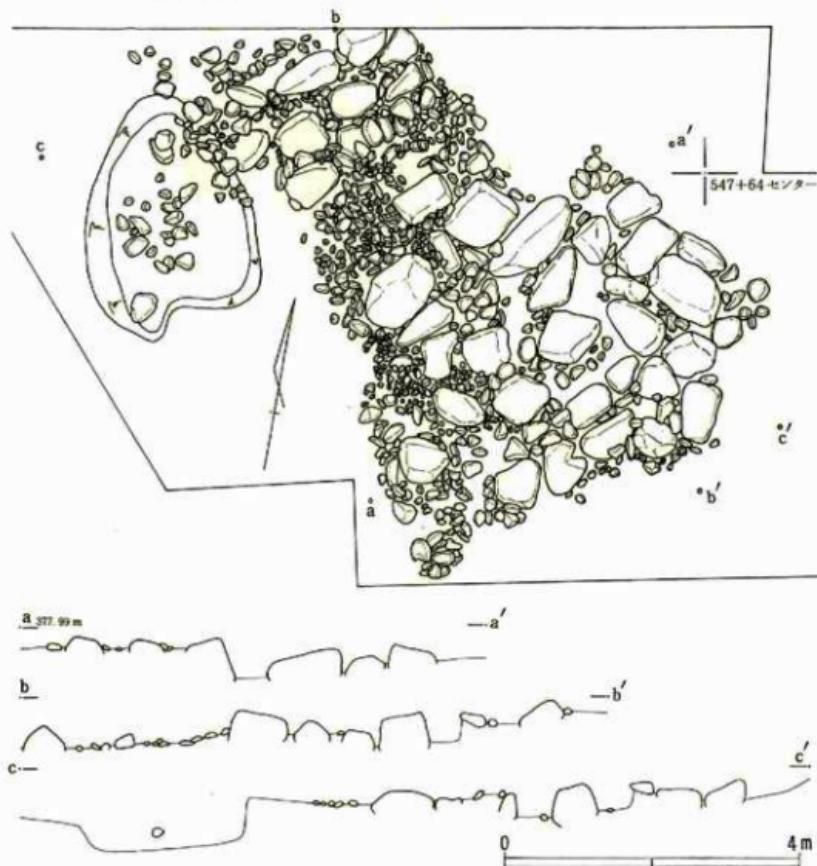


第6図 土製品



第7図 グリッド出土石器

第3節 古墳時代



第8図 古墳平面図

調査区西端 (STA 548 + 80) よりさらに西側の STA 547 + 60~64 センターライン付近のトレンチ調査で、集石が確認されたため、拡張したところ、第8図に示したような広がりとなった。これらの石は、50cm~70cm程度の石を置き、間際に拳大~人頭大の礫を詰め込んだもので、内部からは、金環が2個出土している。古墳の基底部と思われるが、石積みは全くなく、礫の詰め込み方も乱雑である。基底部の大石が周縁部だけでなく、床面と思われる部分にもみられることから、激しく擾乱が入ったと思われる。他に出土遺物はないが、この西側に浅い落ち込みが確認され、平安時代末期の土師器小片が出土している。金環は、外径1.6mm、内径0.95mm及び1.45mm、0.85mmを測り、緑青が全面を覆っているが、金の残存状態は良好である。

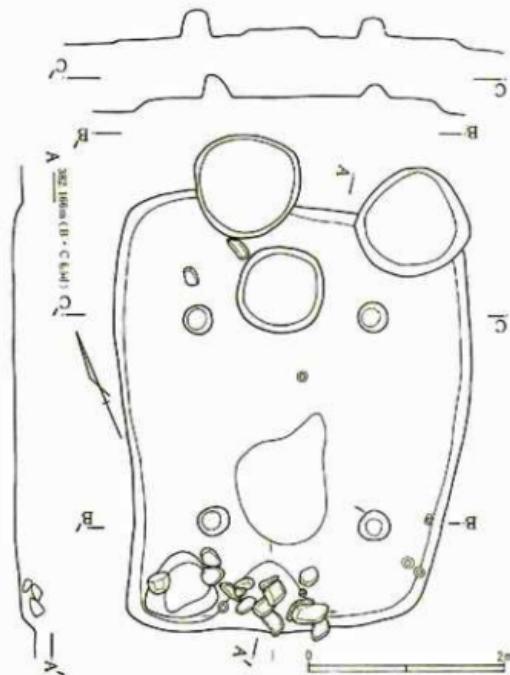


第9図 金環

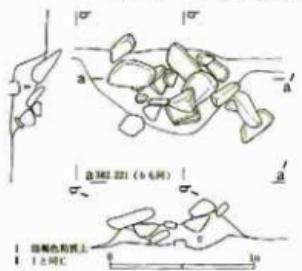
第4節 平安時代

1. 住居址

○ 1号住居址



第10図 1号住居址平面図



第11図 1号住居址カマド

549 + 28S7・S8、+32S7・S8 グリッド。隅円方形を呈し、長辺 4.1 m、短辺 3.6 m、壁高 0.1 m を測る。カマドは南壁中央に構築されるが、すでに破壊されており、袖石、天井石が散乱していた。柱穴は 4 基で、径 30 cm、深さ 10 cm～30 cm を測る。カマド脇には、径 70 cm、深さ 35 cm の浅いピット 1 基が確認された。住居址南半は、土塹によって切られている。本住居址の掘り込みは浅く、残存部での壁の立ち上がりは弱い。床は踏み固められた部分が多い。覆土は暗褐色粘質土の単一層で、わずかに焼土、カーボン粒子が混ざる。

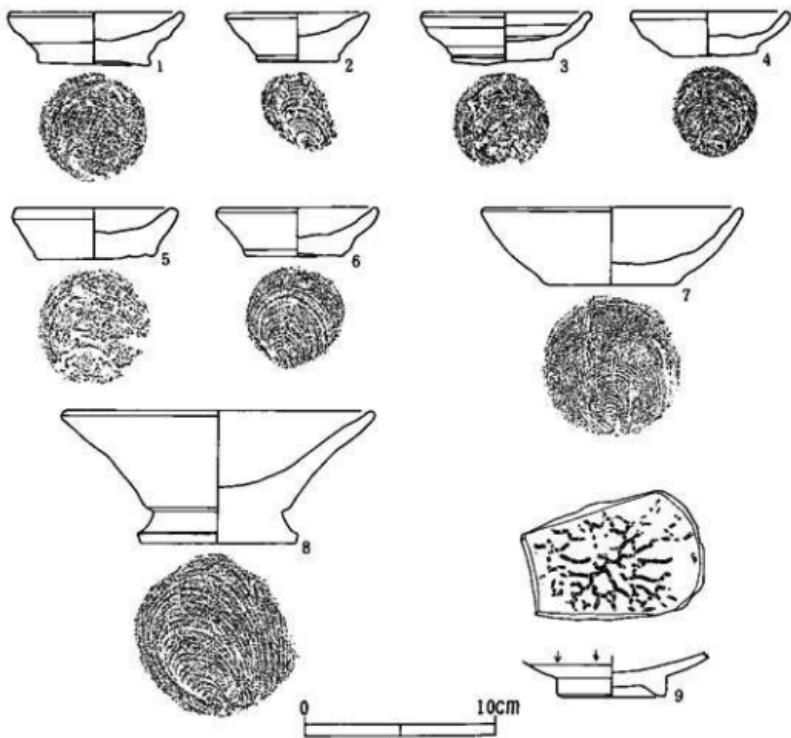
カマドは、90 cm × 60 cm の範囲に石が散乱しており、石組みカマドと思われるが、床面下への掘り込みはみられなかった。純粋な焼土の堆積層は存在せず、粒子が混ざ

る程度であった。

遺物は、土器のか白磁片が床面上より出土しており、さらに鉄器が出土しているが、鉄器及び石器については、まとめて後述する。

土器

1. 床面上出土。皿。口径 8.7 cm、器高 2.5 cm、底径 5.7 cm を測る。内外面とも横ナデ、底部は糸切りで、糸切り後の調整は認められない。胎土には小砂粒を多く含み、赤色粒子もみられる。焼成は良好で明褐色を呈する。
2. 床面上出土。皿。推定口径 7.1 cm、器高 2.5 cm、底径 4.1 cm を測る。整形は 1 に同じ。胎土は比較的精選されており、赤色粒子を含む。焼成も良好で、褐色を呈する。
3. 床面上出土。皿。口径 8.5 cm、底径 5 cm を測る。整形は 1 に同じ。胎土には砂粒を含み、赤色粒子もみられる。焼成も良好で、褐色を呈



第12図 1号住居址出土土器

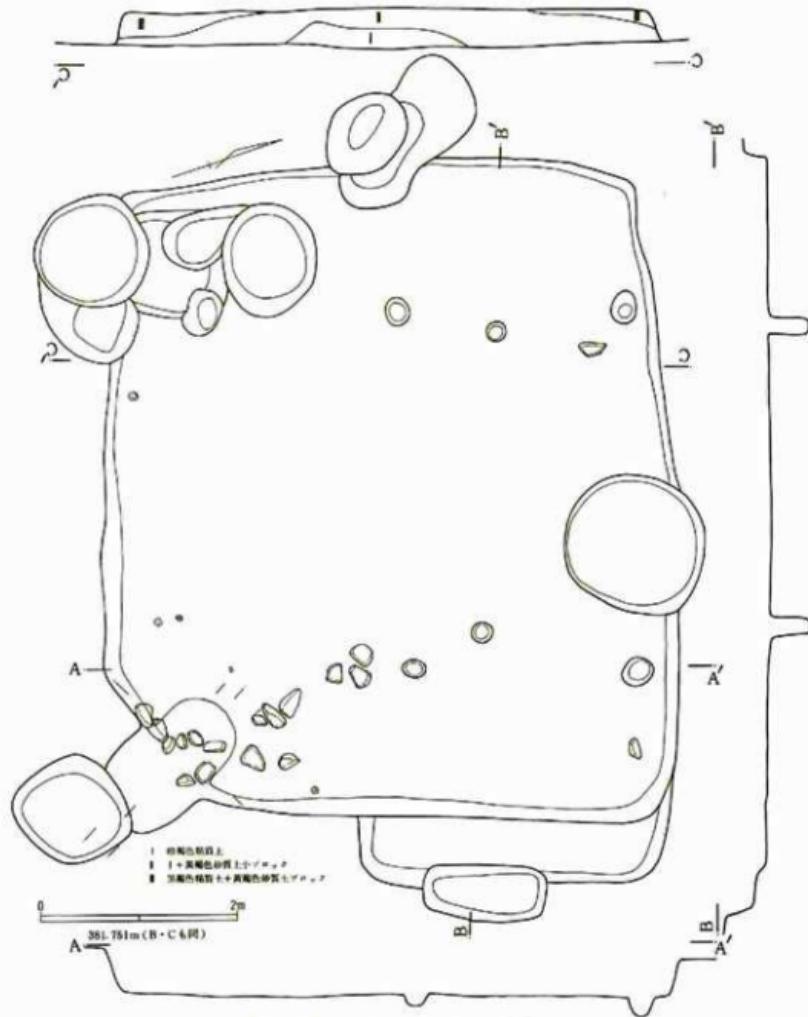
する。4. 床面直上出土。皿。口径 7.9 cm、器高 2.2 cm、底径 4.3 cm を測る。整形、胎土、色調、焼成とも 2 に同じ。5. 床面直上出土。皿。口径 7.9 cm、器高 2.6 cm、底径 6 cm を測る。本資料は、特に器肉の厚いつくりである。整形、胎土は 1 に同じであるが、糸切り後の底部には亀裂が多くみられる。褐色を呈し、焼成は良好である。6. 床面直上出土。皿。口径 8.1 cm、器高 2.5 cm、底径 5.1 cm を測る。整形、胎土、焼成は 2 に同じ。褐色を呈する。7. 床面直上出土。坏。推定口径 13 cm、器高 4 cm、底径 7.4 cm を測る。整形、胎土、焼成は 2 に同じ。赤褐色を呈する。8. 床面直上出土。台付坏。推定口径 15.7 cm、器高 6.8 cm、底径 8 cm を測る。整形、胎土、焼成は 2 に同じであるが、台部のくびれ部には、指頭による調整がみられる。褐色を呈する。9. 床面直上出土。白磁鉢底部。台部径 5.6 cm、現存高 2.4 cm。底部は削り出し高台。内面及び上部外面に施釉がみられる。台部外面は垂直に、内面は斜めに削り、台形台部をつくり出している。12世紀後半以降に位置づけられよう。

○2号・3号住居址

549 + 16S4・S5、+20S4・S5・S6、+24S5・S6 グリッド。

2号住居址は、隅円方形を呈し、長辺6.6m、短辺5.6m、壁高0.4mを測る。カマドは南東コーナーに構築される。住居内には柱穴を含め、小ピット8基が確認されている。また、南西コーナー付近には掘り込みが多くみられるが、土塙が主体であり、住居内ピットは特定できない。床は踏み固められた部分が多いが、壁際は軟弱である。壁の立ち上がりは強い。覆土は、暗褐色粘質土を主体とし、壁付近には黄褐色砂質土がブロック状に堆積している。

3号住居址は、極く一部残存しているにすぎず、残存部の一辺3.15m、壁高0.3mを測る。



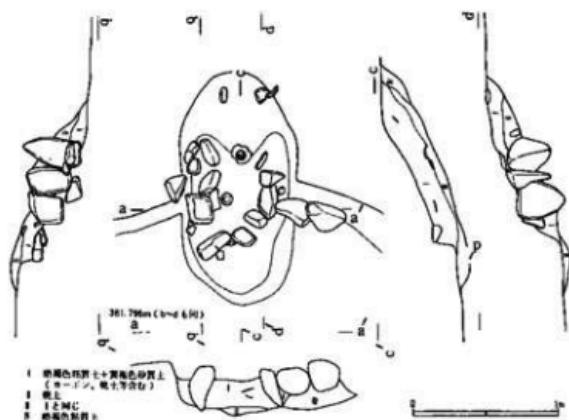
第13図 2号・3号住居址平面図

2号住居址とは床面にレベル差がみられ、3号住居址床面が高く、2号住居址覆土内に貼り床が認められなかったため、3号住居址が2号住居址に切られていることが確認された。カマド、柱穴は認められないが、2号住居内小ビットの一部が3号住居址の柱穴の可能性もある。なお、本住居址からは遺物は全く出土していない。

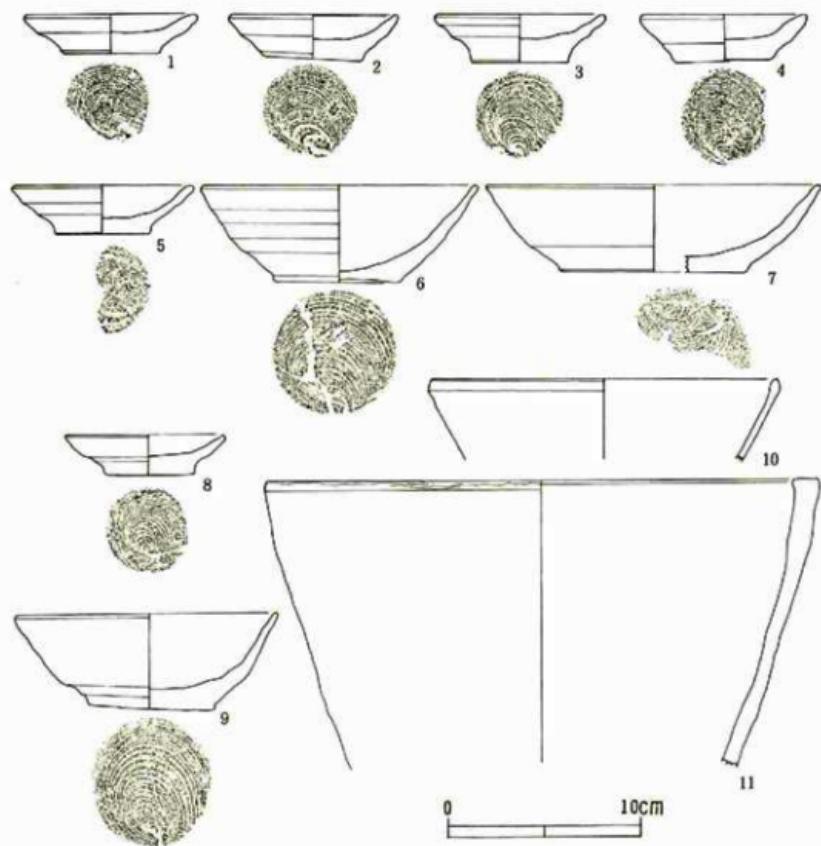
カマドは、30cm程度の平石3枚を袖石とした石組みカマドで、残存状態は良好であるが、煙道部は土塙による搅乱をうけている。160cm×80cmの掘り方をもち、袖石間は45cmを測る。カマド脇には平石を立て土留め石としている。床面下への掘り込みは浅く、5cmを測る。焼土は、燃焼部本体から煙道部にかけてみられ、最厚部で約9cmの堆積がある。

土器

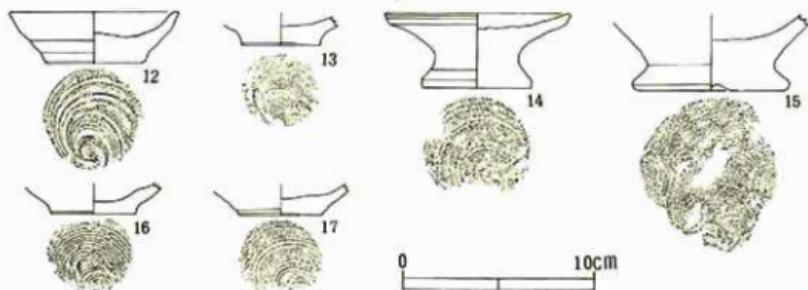
1. 床面直上出土。皿。推定口径8.6cm、器高2.1cm、底径5cmを測る。内外面とも横ナデ、底部は糸切りで、糸切り後の調整は認められない。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成は良好で赤褐色を呈する。
2. 床面直上出土。皿。口径8.5cm、器高2.2cm、底径5cmを測る。整形、胎土、焼成は1と同じ。灰褐色を呈する。
3. 床面直上出土。皿。推定口径8.3cm、器高2.5cm、底径5cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも1と同じ。
4. 覆土出土。皿。口径8.5cm、器高2.4cm、底径4.8cmを測る。整形、胎土、焼成は1と同じ。褐色を呈する。
5. 覆土出土。皿。推定口径9cm、器高2.5cm、底径4.8cmを測る。この種の皿としては薄いつくりである。整形、胎土、焼成とも1と同じ。褐色を呈する。
6. 床面直上出土。壺。口径13.9cm、器高5.1cm、底径6.4cmを測る。整形は1と同じ。胎土に雲母、長石が目立つ。焼成は良好で、暗褐色を呈する。
7. 床面直上出土。壺。推定口径17cm、器高4.5cm、推定底径9.5cmを測る。整形、胎土、焼成は1と同じ。褐色を呈する。
8. カマド内出土。皿。口径8.1cm、器高2cm、底径4.7cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも1と同じ。
9. カマド内出土。壺。口径13.1cm、器高5cm、底径6.5cmを測る。整形、胎土、焼成は6と同じ。褐色を呈する。
10. 覆土出土。白磁碗の口縁部破片と思われる。口縁に一条の線が明瞭である。13世紀～14世紀に位置づけられる。
11. カマド内出土。鉢。推定口径28.6cm。内外面横ナデ、内面上端部は指頭調整がなされる。胎土は精選され、焼成も良好である。褐色を呈する。
12. 覆土出土。皿。推定口径8.5cm、器高2.7cm、底径4.3cmを測る。整形、胎土、焼成は1と同じ。褐色を呈する。



第14図 2号住居址カマド



第15図 2号住居址出土土器 その1

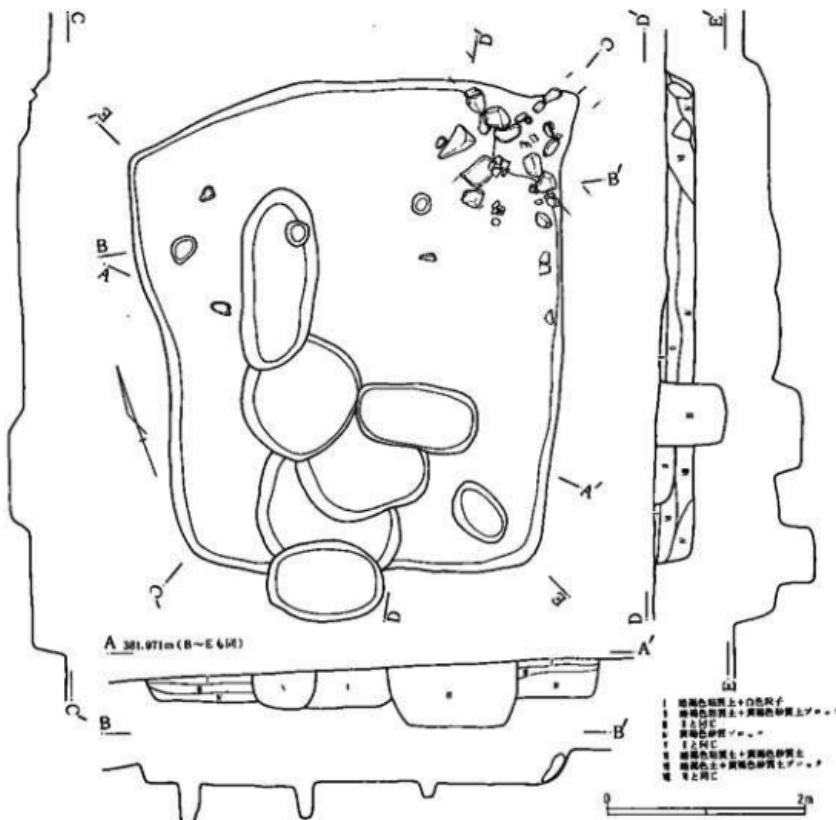


第16図 2号住居址出土土器 その2

13. 覆土出土。皿。底径 3.8 cm。整形、胎土、焼成とも 1 に同じであるが、糸切りは丁寧に行われている。明褐色を呈する。 14. 床面直上出土。台付皿。口径 9.4 cm、器高 3.8 cm、底径 5.6 cm を測る。整形、胎土、焼成、色調とも 1 に同じ。台部のくびれには指頭痕が残る。 15. 覆土出土。台付壺。底径 7.2 cm。整形、胎土、焼成、色調とも 1 に同じ。 16. 覆土出土。皿。底径 4.3 cm。整形、胎土、焼成、色調とも 1 に同じ。 17. 覆土出土。皿。底径 4.2 cm。整形は 1 に同じ。胎土は精選されているが、雲母を含み、赤色粒子はみられない。焼成は良好で、暗褐色を呈する。

○ 4 号住居址

549 + 40S6・S7, +44S6・S7 グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺 5 m、短辺 4.1 m、壁高 0.3 m ~ 0.4 m を測る。カマドは北東コーナーに構築される。住居内には小ピット 3 基が確認され、うち 2 基は柱穴と思われる。いずれも直径 20 cm 程度で、深さ 40 cm、30 cm、15 cm を測る。住居址南半には土塙が複数切り込んでいるが、南東コーナー付近の掘り込みは、住居内ピットと



第17図 4号住居址平面図

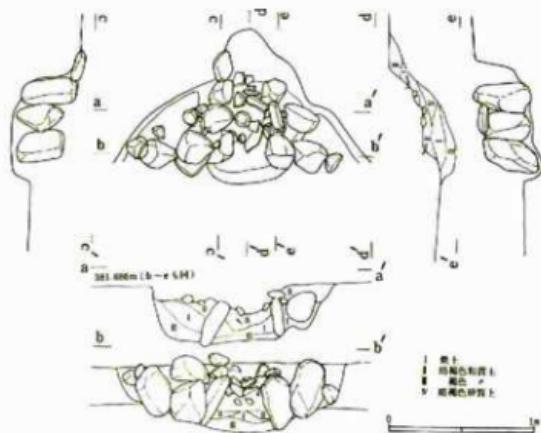
も考えられる。床面は平坦で踏み固められており、壁の立ち上がりも強い。覆土は、暗褐色粘質土を主体としたもので、黄褐色砂質土の混入がみられ、壁際にはブロック状の堆積がみられる。

カマドは残存状況がよく、両脇に土留め石を立てている。

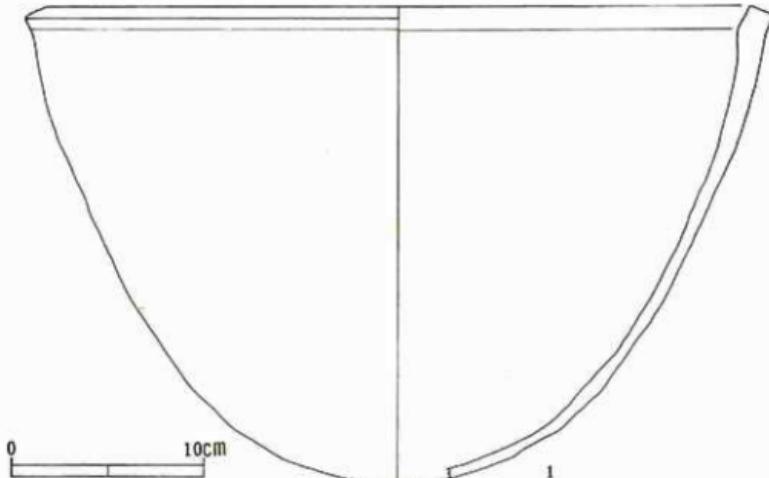
110cm×90cmの掘り方をもち、袖石間は40cmを測る。袖石は40cm程度の平石3枚を用いており、燃焼部本体は60cm程と推定される。床面下への掘り込みも深く約15cmを測る。焼土は最大15cmの堆積である。

土器

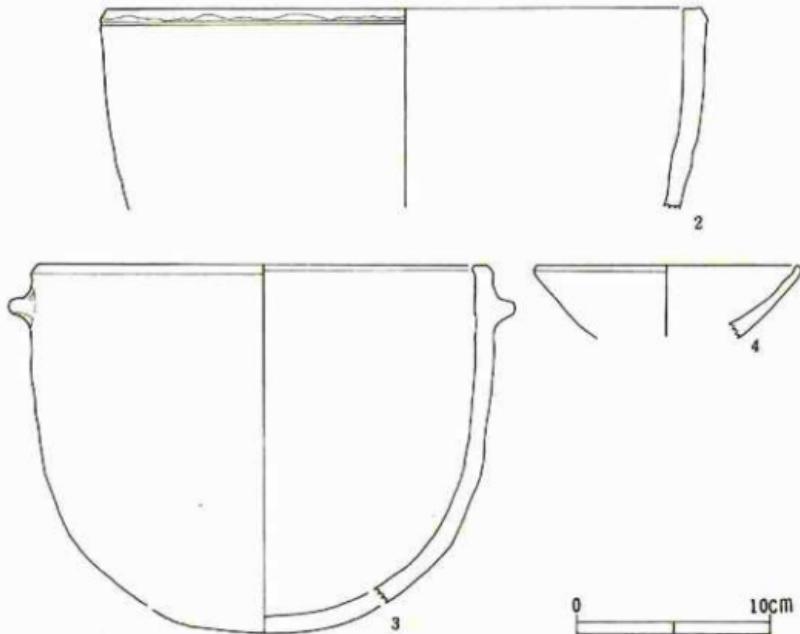
1. 床面直上出土。鉢。カマド近くから細片となって出土している。口径39.6cm、推定器高24.8cmを測る。内外面横ナデ。外面脚部には、縦方向の削りを行っているようであるが、表面が荒れしており断言できない。内面上端には指頭痕が残る。胎土は精選されており、焼成も良好である。暗褐色を呈する。 2. カマド内出土。鉢。推定口径31.4cm。図示していないが、口縁下



第18図 4号住居址カマド



第19図 4号住居址出土土器 その1



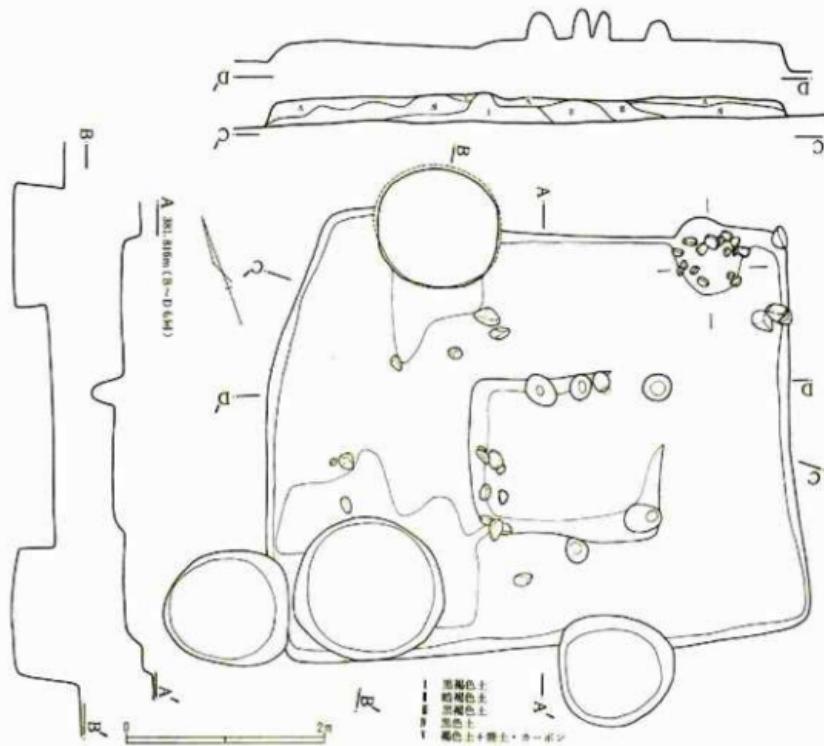
第20図 4号住居址出土土器 その2

に $5\text{cm} \times 2\text{cm}$ の剥離痕がみられ、あるいは釜の把手部剥離の破片であるかもしれない。現存部は外面横ナデ、内面には指頭痕がみられる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。外面黒色、内面明褐色を呈する。3. カマド内及び周辺部から細片となって出土している。釜。推定口径 23.2cm 、推定高 19cm 。整形は1に同じ。胎土は精選され、焼成も良好で、外面黒色、内面茶褐色を呈する。4. カマド内出土。坏。推定口径 13.2cm 。内外面横ナデ。胎土は精選されているが、雲母が目立つ。また、赤色粒子は全く含んでいない。焼成は良好で、暗褐色を呈する。

○5号住居址

549+32S6,+36S5・S6・S7,+40S6グリッド。隅円方形を呈し、長辺 5.3m 、短辺 4.2m 、壁高 $0.2\text{m} \sim 0.3\text{m}$ を測る。カマドは北壁の東コーナー寄りに構築される。本住居址中央部には $2\text{m} \times 1.5\text{m}$ の範囲で特に固く踏み締められた部分が段状に存在し、その部分には6基の小ビット(直径 $15\text{cm} \sim 30\text{cm}$ 、深さ $20\text{cm} \sim 30\text{cm}$)がある。あるいは、別の造構の重複とも考えられるが、一応住居内施設として扱うこととする。

床は全体に踏み固められており、柱穴は確認されなかった。壁の立ち上がりは比較的強い。住居西側の床面上には、焼土、カーボンが散っているが、一部であり、火災住居とは考えにくい。覆土は、暗褐色粘質土を主体としたもので、下層には焼土、カーボンの混入がみられる。



第21図 5号住居址平面図



第22圖 F 是作用於由二元

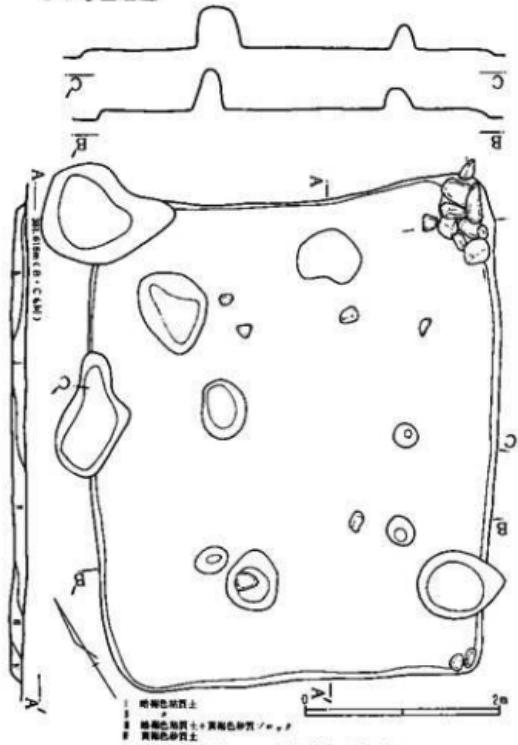
第22図 5号住居址カマド カマドは、75cm×70cmの小さな掘り方をもち、内部には20cm以下の礫が多く確認されている。また、カマド近くには30cm程度の石がみられることから、小規模な石組みカマドと思われる。床面下への掘り込みは浅く、約5cmを測る。焼土の堆積層は形成されておらず、粒子が飛散する程度であった。

土器

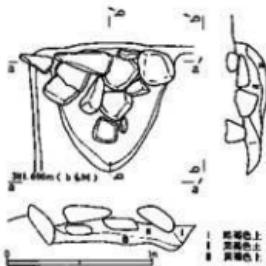
1. 覆土出土。坏。口径 13.9 cm、器高 4.5 cm、底径 6.8 cm を測る。内外面横ナデ、底部は糸切

りであるが、糸切り後の調整はなく、底面には亀裂がみられる。胎土には砂粒を含み、赤色粒子は極くわずかである。焼成は良好で、明褐色を呈する。2. 床面直上出土。皿。口径 8 cm、器高 1.9 cm、底径 4.9 cm を測る。整形は 1 と同じ。胎土には砂粒が多く、雲母が目立つ。焼成は良好で、褐色を呈する。

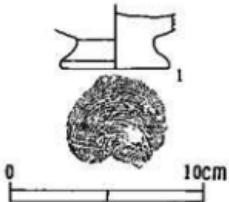
○ 6 号住居址



第24図 6号住居址平面図



第25図 6号住居址カマド



第26図 6号住居址出土土器

549+32S3・S4,+36S3・S4 グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺 4.9 m、短辺 4.2 m、壁高 0.1 m を測る。カマドは南東コーナーに構築されていたと思われる。柱穴は 3 基が確認され、直径 20 cm～

30 cm、深さ 20 cm～40 cm を測る。他に直径 60 cm～70 cm、深さ 40 cm 程度のピット 3 基が確認されているが、住居に伴うものであるとは言いきれない。床はカマド付近及び中央部が固く、他部はやや軟弱である。覆土は、暗褐色粘質土を主体としたもので、黄褐色砂質土が混入し、壁際には、ブロック状に堆積している。

カマドは、90 cm × 75 cm の掘り方をもつが、すでに破壊されている。内部には 20 cm～40 cm 程度の石が多くみられるが、立てられた状態ではない。また、内部の堆積土中には焼土粒子がみられなかった。

土器

1. 床面直上出土。台付皿。底径 5.6 cm。横ナデ後、底部を糸切り。底面には亀裂がみられ

る。胎土は精選され、赤色粒子はわずかに含む。焼成は良好で、明褐色を呈する。

○7号住居址

549+24S3・

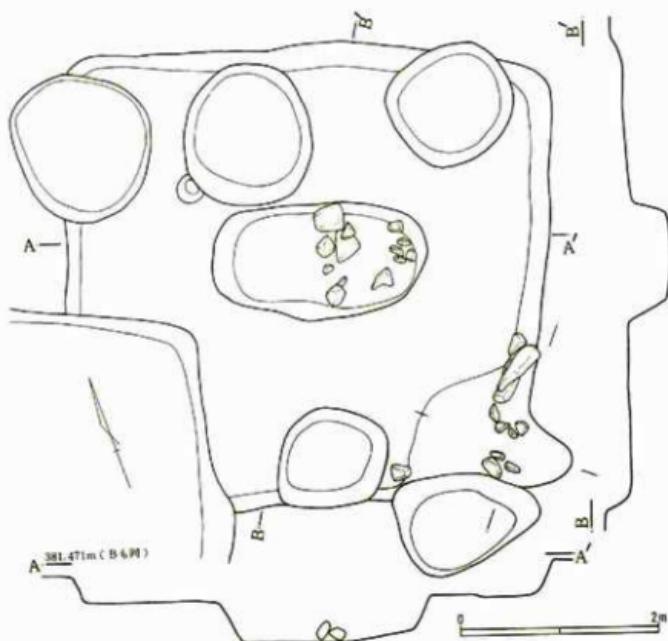
S4,+28S3・S4グ

リッド。南西を10
号住居址に切ら
れ、また、6基
の土塹による擾
乱をうけている。
隅円方形を呈す
る住居址で、長
辺4.9m、短辺
4.6m、壁高0.2
mを測る。カマ
ドは南東コーナ
ーに構築される。
柱穴は1基確認
されたにすぎな
い。直径30cm、
深さ50cmを測る。

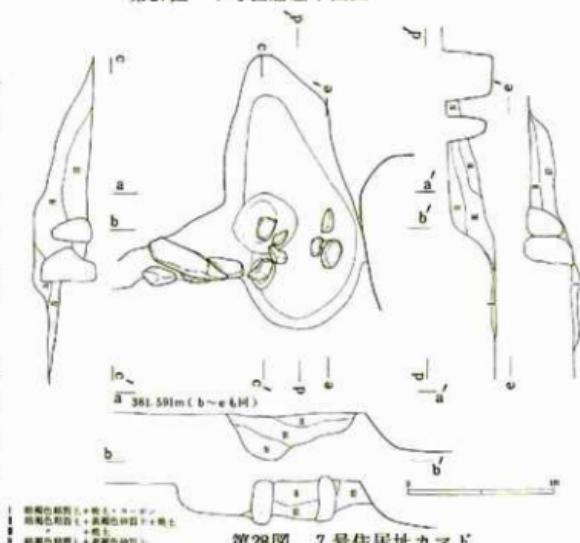
床は、カマド付

近以外はやや軟弱である。
覆土は、暗褐色粘質土を主
体としたもので、黄褐色砂
質土が混入する。

カマドは、180cm×90cm
の掘り方をもち、床面下へ
の掘り込みは約5cmと浅い。
40cm程度の平石を袖石に用
いた石組みカマドであり、
袖石は両側に2枚づつ確認
された。袖石間は40cmを測
る。純粋な焼土の堆積層は
確認されなかったが、燃焼
部本体内部には、暗褐色土
に混ざって焼土粒子が飛散



第27図 7号住居址平面図



第28図 7号住居址カマド

1 暗褐色粘質土+砂土・カーボン
2 暗褐色粘質土+黄褐色砂質土+焼土
3 暗褐色粘質土+黄褐色砂質土
4 土と同じ

していた。

土器

本住居址の土器は、すべて覆土からの出土である。

1. 盆。底径6cm。内外面横ナデ、底部は糸切り。胎土は精選され、焼成は良好である。明褐色を呈する。

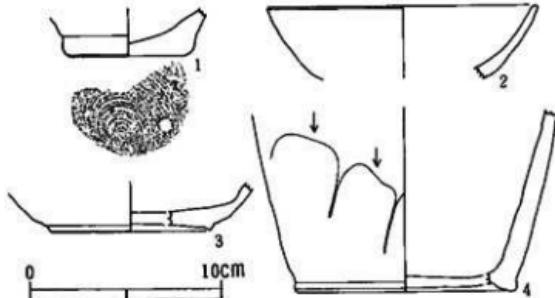
2. 壺。推定口径13.5cm。

内外面横ナデ。胎土は精選

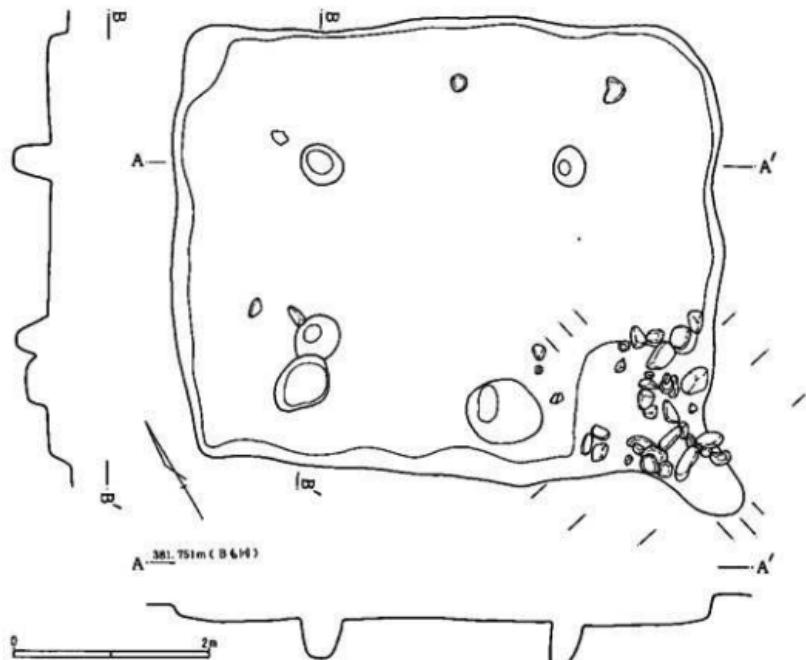
され、焼成も良好である。褐色を呈する。3. 黄蘿戸碗。胎土は極めて精選されている。薄緑色を呈する。天正美濃の系統と思われ、16世紀後半に位置づけられる。4. 灰釉陶器壺。胎土、焼成とも良好である。灰色を呈する。

○8号住居址

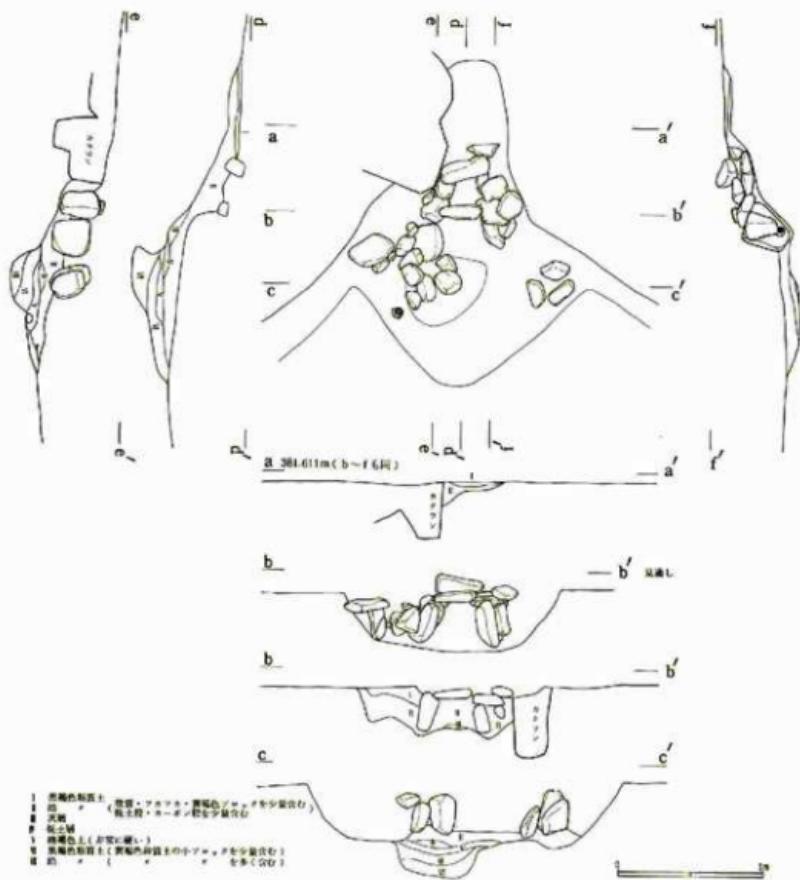
548+96S3+S4, 549+00S4グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺5.6m、短辺4.6m、壁高



第29図 7号住居址出土土器



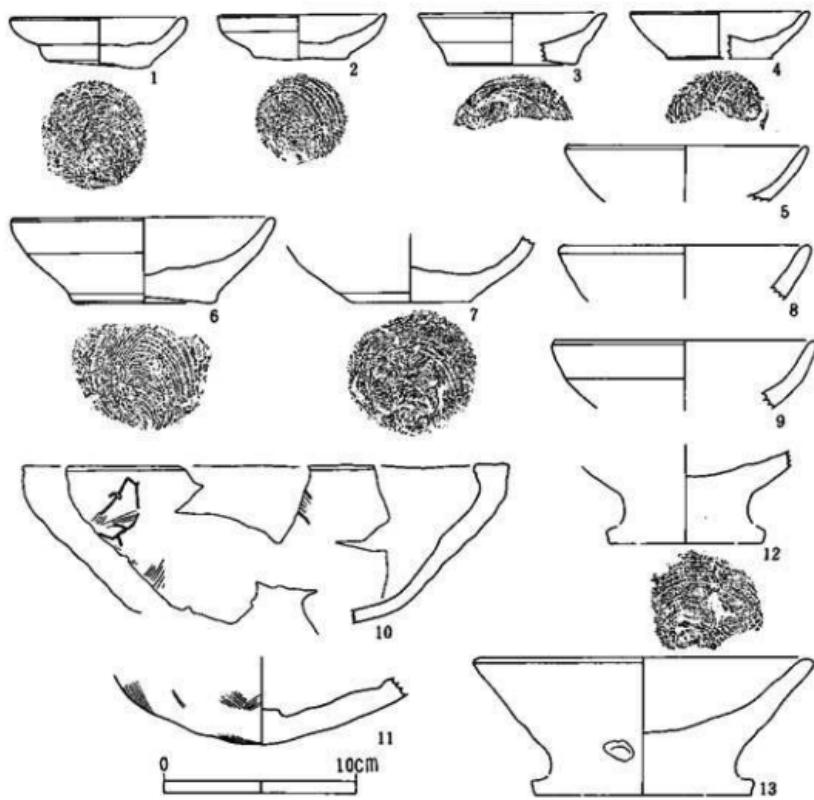
第30図 8号住居址平面図



第31図 8号住居址カマド

0.2 m～0.3 mを測る。カマドは南東コーナーに構築される。柱穴は3基確認され、いずれも直径40cm、深さ40cm程度である。他に住居内ピットは、カマド近くに1基確認され、直径60cm、深さ30cmを測る。床は壁際以外固く踏み締められている。また、中央部には、1.5m×1.5mの範囲に焼土がみられた。壁の立ち上がりは強い。覆土は、暗褐色粘質土を主体としたもので、黄褐色砂質土がブロック状に混入する。

カマドは、220cm×160cmの大きな掘り方をもつ石組みカマドで、床面下への掘り込みも深く、20cmを測る。残存状況がよく、天井石2枚が乗ったままであった。袖石は30cm程度の平石を左右に3枚づつ配しており、袖石間は約30cm、その奥行き約70cmを測る。焼土、及び灰層は5cm～10cmの堆積である。



第32図 8号住居址出土土器

土器

1. カマド内出土。皿。口径8.7cm、器高2.9cm、底径5.5cmを測る。内外面横ナデ、底部は糸切り。糸切り後の調整はみられない。胎土は精選され、焼成も良好で、明褐色を呈する。
2. 床面直上出土。皿。口径8.5cm、器高2.3cm、底径5cmを測る。整形は1に同じ。胎土は精選されているが、雲母が目立つ。また、赤色粒子は全く含んでいない。焼成は良好で、暗褐色を呈する。
3. カマド内出土。皿。推定口径9.5cm、器高2.6cm。整形は1に同じ。胎土には砂粒を含み、赤色粒子もみられる。焼成、色調は1に同じ。
4. 覆土出土。皿。器高2.4cm。整形、胎土、焼成とも1に同じ。褐色を呈する。
5. 床面直上出土。皿。整形、胎土、焼成、色調とも1に同じ。
6. 覆土出土。壺。器高4.4cm、底径7cm。整形は1に同じ。胎土は精選され、赤色粒子はみられない。焼成は良好で、暗褐色を呈する。
7. 床面直上出土。壺。底径6.2cm、整形は1に同じ。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成は良好で明褐色を呈する。
8. カマド内出土。壺。整形、胎土、焼成、色調とも1に同じ。
9. 床面直上出土。壺。整

形、胎土、焼成とも1に同じ。暗褐色を呈する。 10・11. 同一個体と思われる。床面直上出土。丸底の鉢。口径25cm、器高15cm程度と推定される。整形は極めて雑で、内外面指頭調整後、外面にはハケ状工具による調整を雑に施している。胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。内面赤褐色、外面黒色を呈する。 12. カマド内出土。台付壺。整形は1と同じであるが、底部には糸切り時の亀裂がみられる。胎土は精選され、焼成も良好である。明褐色を呈する。 13. 床面直上出土。台付壺。器高7cm。整形は1と同じであるが、断面でみると、器内に亀裂、隙間がかなりみられ、整形が雑であることが窺える。くびれ部には指頭調整がみられる。胎土は精選され、焼成も良好で、褐色を呈する。

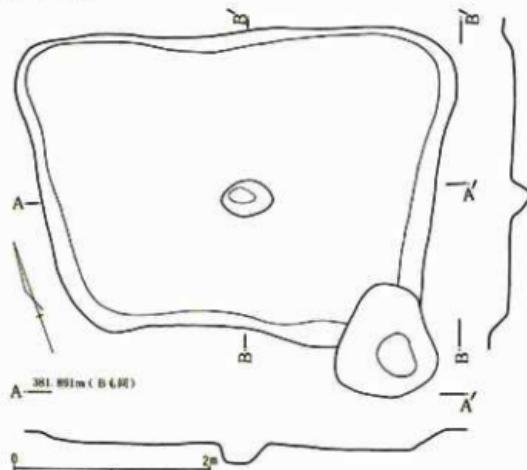
○ 9号住居址

549+08S6・S7グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺4.2m、短辺3m、壁高0.1mを測る。カマドは存在しなかった。住居址南東コーナーを土塙が切っており、あるいは、この部分に存在したかもしれない。床面は軟弱で、壁の立ち上がりも弱い。住居址中央部には、長径50cm、深さ20cmの橢円形ピット1基が確認されているが、柱穴は確認されなかった。

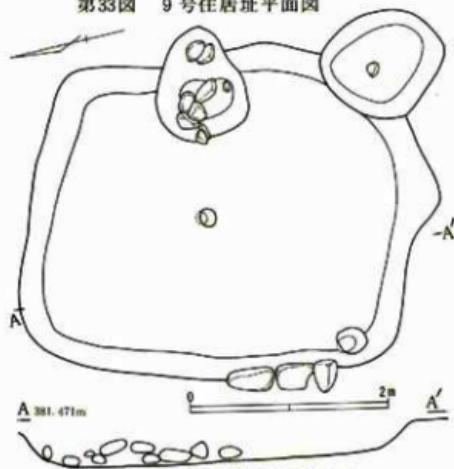
本住居址からは遺物が全く出土していない。

○ 10号住居址

549+20S3・S4、+24S3・S4グリッド。本遺構は、確認時には北側の半分に30cm大の礫がびっしりと詰まっており、図示したように壁上部にも一部石による補強が行われていたため、水溜め遺構かと思われたが、底面に鉄分堆積がみられず、入・出水路も検出されなかったため、一応住居址として報告することとする。隅円方形を呈し、長辺3.9m、短辺3m、壁高0.3mを測る。カマドは存在しない。床面は固く締まっている。住居内には小ピット2基が確



第33図 9号住居址平面図

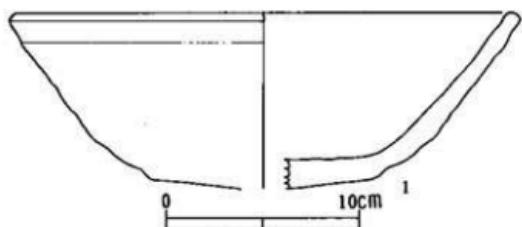


第34図 10号住居址平面図

認されている。壁際のピットは径25cm、深さ30cm、中央部ピットは径15cm、深さ45cmを測る。壁の立ち上がりは弱い。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、焼土、カーボンは全く含んでいない。

土器

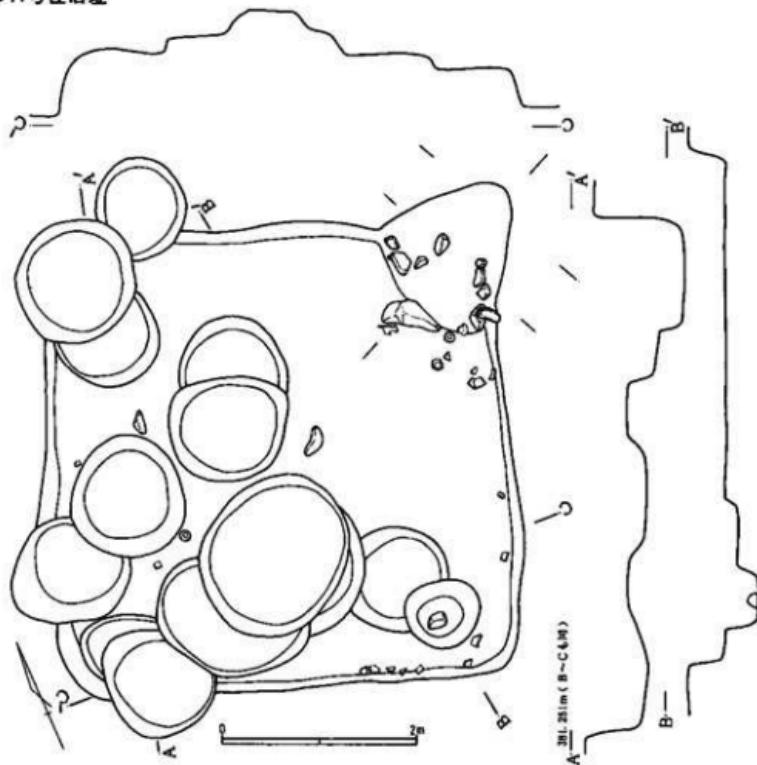
1. 詰め込まれた砾の間から出土している。鉢。推定口径25.4cm、器高7.7cm、推定底径11.5cmを測る。内外面横ナデ。底部は内外面とも平滑で、磨きが行われたと思われる。器体部外面の調整は難で、器面に凹凸が著



第35図 10号住居址出土土器

しい。胎土には砂粒が目立ち、赤色粒子は全くみられない。焼成はややあまく、断面でみると器肉中央部が灰色を呈している。内外面とも明褐色を呈する。

○11号住居址



第36図 11号住居址平面図

549+12S1・S2、+16S1・S2グリッド。隅円方形を呈する住居址で、一辺 4.7m、壁高 0.4m を測る。カマドは北東コーナーに構築される。住居址南西側の半分は14基の土塗による擾乱をうけている。床面は全面踏み固められている。この床面を掘り抜いた、124号土塗の床面部分の壁には、固い床面を掘る際のノミ様工具の使用痕が認められる。壁の立ち上がりは強い。覆土は暗褐色粘質土を主体としたもので、焼土、カーボン粒子が認められる。

カマドは、 $150\text{cm} \times 140\text{cm}$ の掘り方をもつ石組みカマドで、床面下への掘り込みは 10cm を測る。本体は $30\text{cm} \sim 40\text{cm}$ 大の平石を左右に2枚づつ配し、袖石としている。袖石間は 50cm を測る。焼土は約 5cm の堆積である。なおカマド前部には長さ 60cm ちかい平石が転がっており、天井石と思われる。

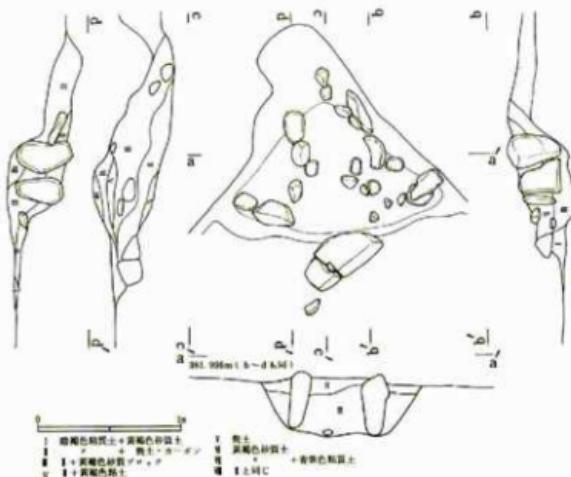
土器

1. 床面直上出土。Ⅲ。
口径 7.8 cm、器高 1.8 cm、

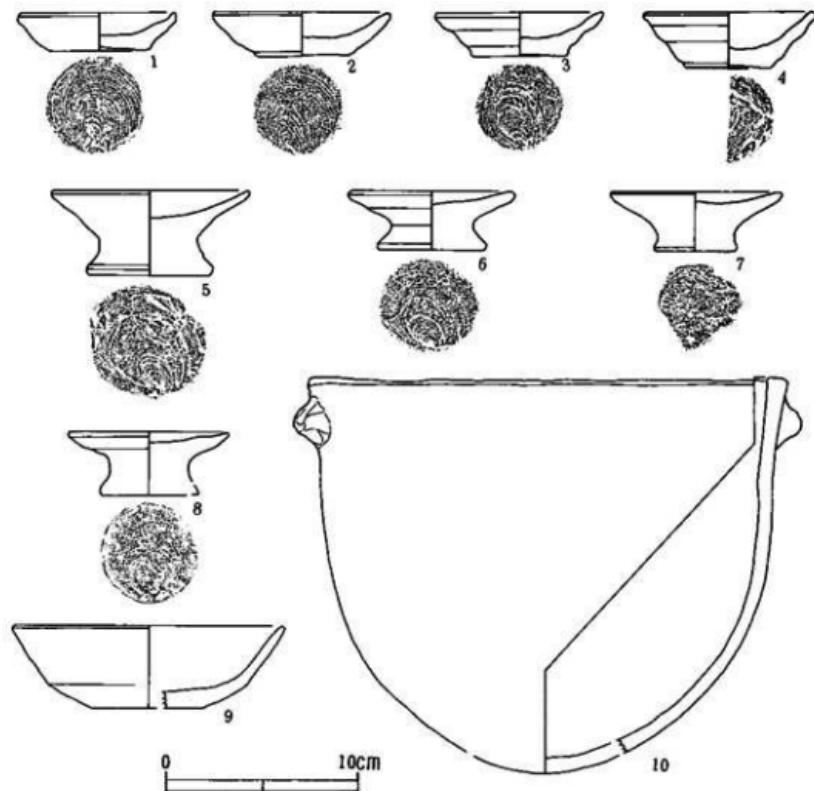
底径 5.1 cm を測る。内外面横ナデ、底部は糸切り。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。赤褐色を呈する。2. 床面直上出土。皿。口径 8.9 cm、器高 2.3 cm、底径 4.5 cm を測る。整形は 1 に同じ。胎土は精選されているが、雲母が目立つ。焼成は良好で、暗褐色を呈する。3.

床面直上出土。皿。口径 8.6 cm、器高 2.2 cm、底径 4.6 cm を測る。整形、胎土、焼成は 1 に同じ。褐色を呈する。4. 床面直上出土。皿。推定口径 8.5 cm、器高 2.9 cm。整形、胎土、焼成は 2 に同じ。褐色を呈する。5. 床面直上出土。台付皿。口径 9.9 cm、器高 4.4 cm、底径 6.2 cm を測る。整形は 1 に同じであるが、台部のくびれには指頭調整がみられる。胎土は精選されているが、雲母、赤色粒子が目立つ。焼成は良好で、褐色を呈する。6. 床面直上出土。台付皿。口径 8.2 cm、器高 3 cm、底径 5.5 cm を測る。整形、胎土、焼成、色調とも 5 に同じ。

7. 床面直上出土。台付皿。器高3cm。整形、胎土、焼成、色調とも5に同じ。8. 床面直上出土。台付皿。口径8.2cm、器高3.2cm、底径5.2cmを測る。整形は1に同じ。胎土に砂粒を含み、特に雲母が多い。焼成は良好で、褐色を呈する。9. 覆土出土。壺。器高4.2cm。整形、胎土、焼成、色調とも5に同じ。10. カマド周辺より細片となって出土。釜。推定口径25cm、推定器高20.4cm。外面横ナデ調整がなされているが、内面は雑で、輪積み痕が残る。外面の把手は貼り付け後の潰しが雑で、指頭痕が明瞭である。胎土は精選され、焼成も良好で、内面明褐色、外面黒色を呈する。



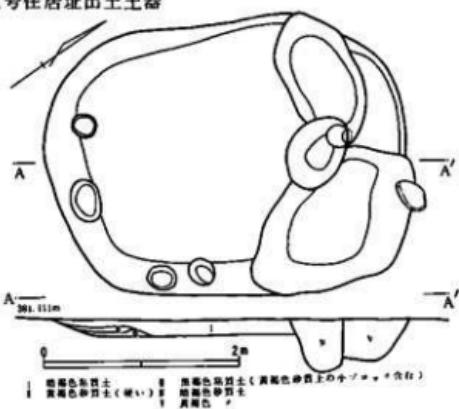
第37図 11号住居址カマド



第38図 11号住居址出土土器

○12号住居址

549+00N1・N2 グリッド。椭円形を呈する住居址で、長軸 3.7 m、短軸 2.8 m、壁高 0.1 m～0.2 m を測る。本住居址は 3 基の土塙に切られているが、カマドは存在しない。床は踏み固められている。床面にピットなどの施設は全くみられず、壁に小ピット 4 基が確認された。また、土塙内にも同様の小ピットが確認されている。これら 5 基の小ピットは、あるいは壁柱穴であるかもしれない。南端及び土塙内の小ピットは、深さ 50 cm と深く、他の 3 基はいずれも深さ 10

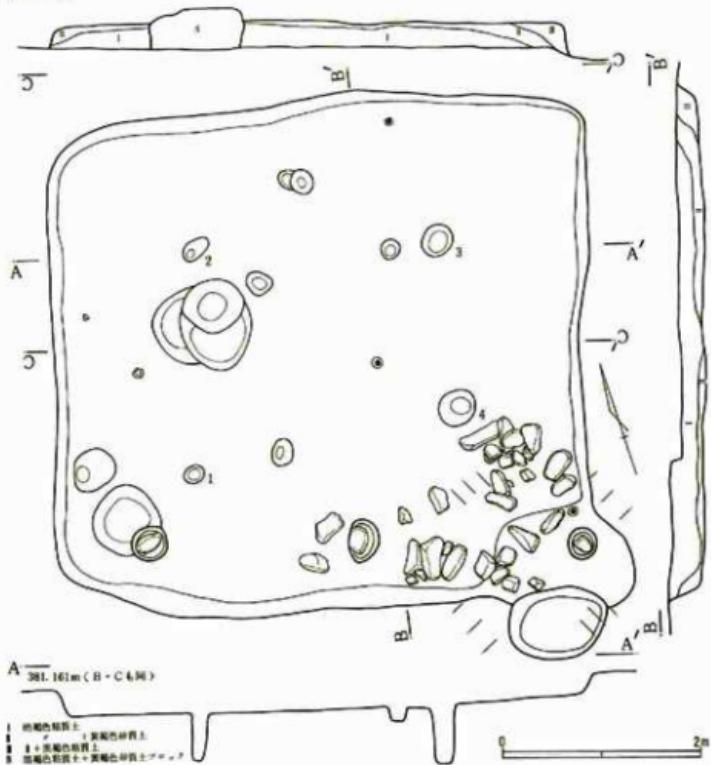


第39図 12号住居址平面図

cm程度である。覆土は、暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色砂質土の混入が認められるが、セクション図中のⅠ層は、固く緻密な黄褐色砂質土で、あるいは、住居址南側の壁に貼り付け、固めたものであるかもしれない。

本住居址からは、砥石が1点出土しているだけである。

○13号住居址



第40図 13号住居址平面図

549+08S1・NI₁、+12S1・NIグリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺5.4m、短辺5.2m、壁高0.2m～0.3mを測る。カマドは南東コーナーに構築される。本住居址は、掘立柱建物址及び土塙による擾乱をうけているが、南西コーナー近くに径70cm、深さ40cmのビットが確認され、他に小ビット10基が確認された。このうち柱穴は、図中の1～4と考えられる。3.4の2基が径35cm～40cm、深さ60cm、20cmを測り、1.2の2基は径20cm、深さ50cmを測る。他のビットは深さ30cm以内に納まるものがほとんどである。床は踏み固められた部分が多く、壁の立ち上がりも比較的強い。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色砂質土の混入が認められる。

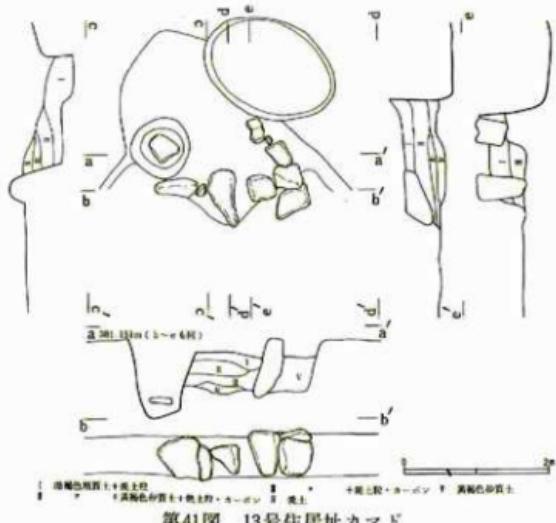
カマドは、130cm×110cmの掘り方をもつ石組みカマドで、床面下への掘り込みは浅く、約

5 cmである。前部の両脇には平石を立て、土留めとしている。袖石には30cm程度の平石を用い、袖石間は40cmと推定される。焼土の堆積は5 cm程度である。

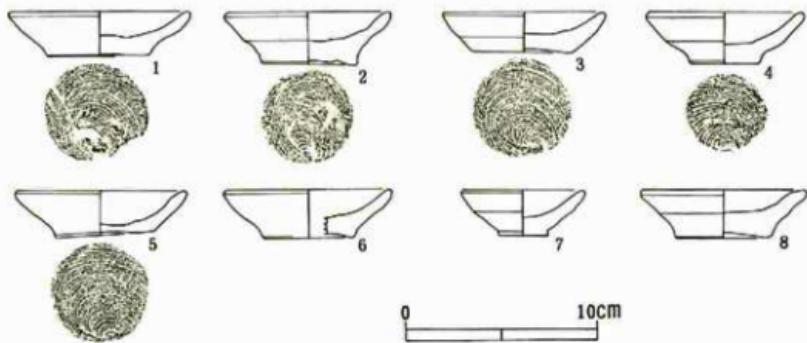
土器

1. 床面直上出土。皿。口径 9.2 cm、器高 2.2 cm、底径 5.2 cm を測る。外面横ナデ、底部は糸切り。胎土は精選されており、赤色粒子を含む。焼成も良好で、明褐色を呈する。この種の土器にしては薄く、また丁寧なつくりである。

2. 床面直上出土。皿。口径 8.4 cm、器高 2.6 cm、底径 4.8 cm を測る。整形、胎土、焼成は 1 に同じ。黄褐色を呈する。 3. 覆土出土。皿。口径 8.2 cm、器高 2.1 cm、底径 5 cm を測る。整形、胎土、焼成は 1 に同じ。褐色を呈する。本資料は口縁の極く一部を欠き、欠損部及びその付近にタール状付着物が認められる。 4. カマド内出土。皿。器高 2.5 cm、底径 3.5 cm。整形、胎土、焼成は 1 に同じ。暗褐色を呈する。 5. 覆土出土。皿。口径 8.4 cm、器高 2.2 cm、底径 5.1 cm を測る。整形、胎土、焼成、色調とも 3 に同じ。 6. 床面直上出土。皿。器高 2.5 cm。整形、胎土、焼成、色調とも 1 に同じ。 7. カマド内出土。皿。器高 2.4 cm。整形、胎土、焼成、色調とも 3 に同じ。 8. 床面直上出土。皿。器高 2.5 cm。整形、胎土、焼成、色調とも 1 に同じ。



第41図 13号住居址カマド



第42図 13号住居址出土土器

549+28 N2+N3,+32N2

・N3グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺4.1m、短辺3.6m、壁高0.1mを測る。カマドは北東コーナーに構築される。床はやや軟弱である。壁の立ち上がりも、残存部分で見る限り弱い。住居内には柱穴は確認されず、南東コーナー付近にピット（直径80cm、深さ40cm）1基と、中央部に浅い掘り込みが確認されている。この掘り込みは、長さ約2m、幅約0.8mを測る。

なお、この掘り込みに接して、小ピット2基（約10cm及び20cm、深さ20cm）が確認された。覆土は、暗褐色粘質土を主体とするが、床面近くや壁際には黄褐色砂質土ブロックがみられる。

カマドは、70cm×80cmの掘り方をもち、床

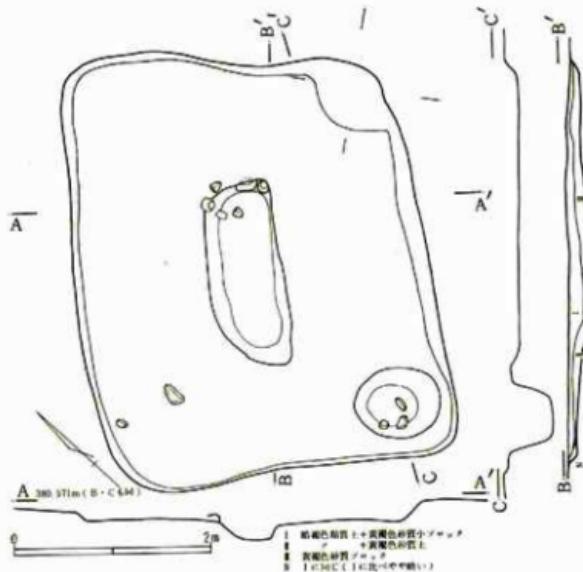
面下への掘り込みは10cmを測る。内部に袖石等は存在せず、粘土積み上げによる構築と思われる。焼土の堆積は4cmにすぎない。

土器

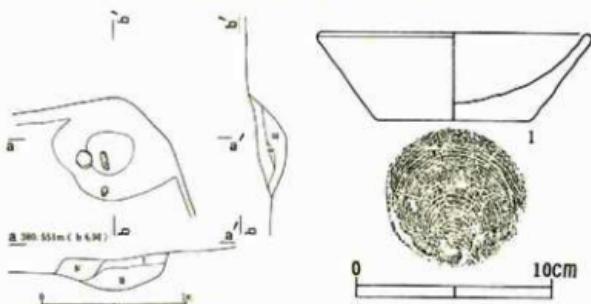
1. 床面直上出土。壺。推定口径13.6cm、器高4.5cm、底径7.6cmを測る。内外面横ナデ、底部は糸切り。胎土は精選され、赤色粒子もわずかに含む。焼成も良好で、赤褐色を呈する。

○15号住居址

549+20N4グリッド。16号住居址に南半を切られており規模は不明であるが、北辺は2.8m、壁高0.15mを測る。床は軟弱で、壁の立ち上がりも弱い。柱穴、住居内ピットなどは確認されなかった。

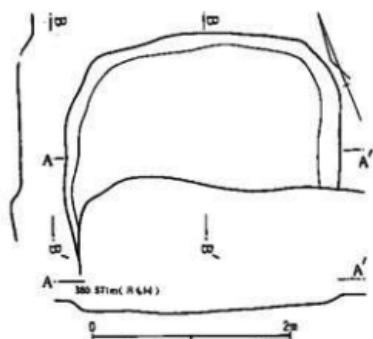


第43図 14号住居址平面図



第44図 14号住居址カマド

第45図 14号住居址出土土器



第46図 15号住居址平面図

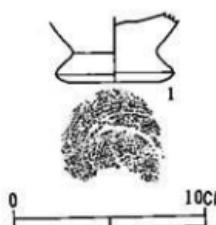
○16号住居址

549+16 N3+N4,+20 N3

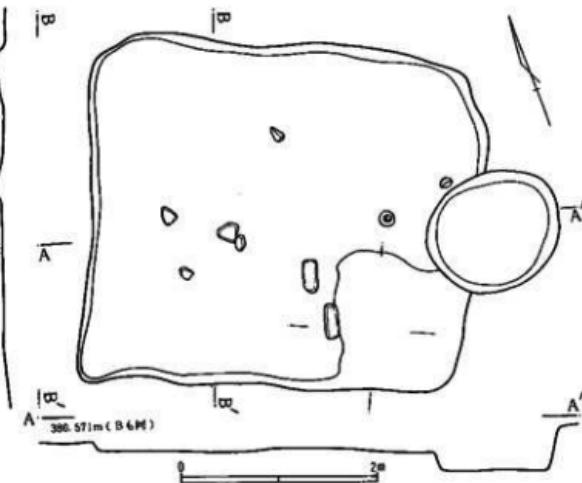
・N4グリッド。15号、17号住居址を切って存在する。隅円方形を呈する住居址で、長辺4m、短辺3.4m、壁高0.2mを測る。カマドは南東コーナーに構築される。床は軟弱な部分が多い。壁の立ち上がりも強くはない。柱穴は確認されなかった。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、下層では、焼土粒子、カーボンを多量に含んでいる。

カマドは破壊されており、内部に30cm程度の石がみられる。掘り込みは特にみられないが、120cm×80cmの範囲に黄褐色粘土がみられ、粘土積み上げによる構築と思われる。焼土層は形成されておらず、粒子が飛散する程度であった。

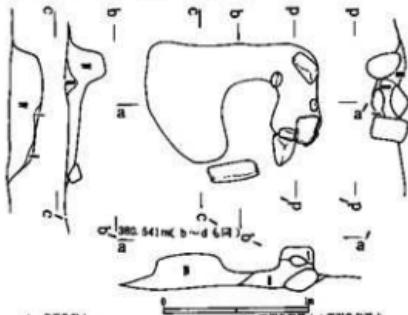
土器



第47図 15号住居址出土土器



第48図 16号住居址平面図



第49図 16号住居址カマド

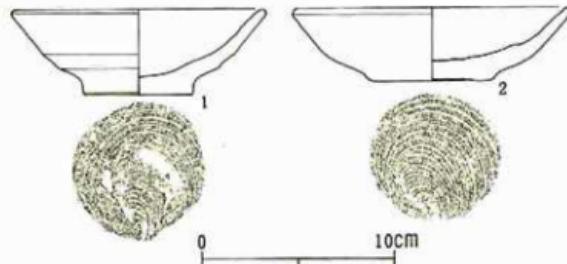
は糸切り。胎土は精選され、赤色粒子をわずかに含む。焼成はやや不良で、器内内部が灰色を呈する。なお、本資料は、内面～口唇～外表面～底部にかけて、一部にタール状の付着物が認められる。

床面直上出土。壺。推定口径 13.8 cm、器高 3.8

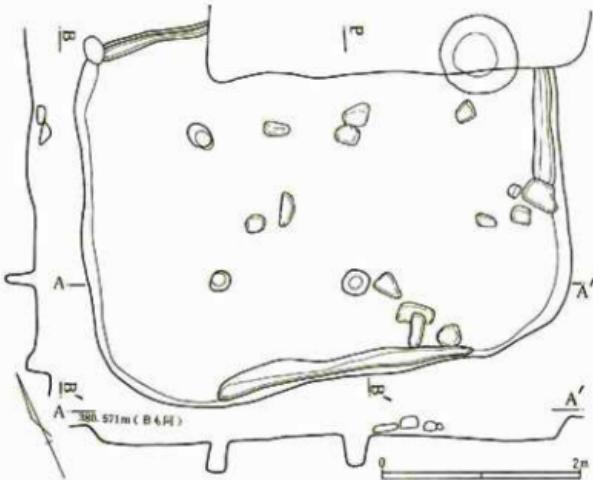
cm、底径 6.5 cm を測る。整形、胎土は 1 と同じ。焼成は良好で、褐色を呈する。

○17号住居址

549+12N3・N4,+16N3
・N4 グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺 4.8 m、短辺 3.9 m、壁高 0.1 m～0.2 m を測る。カマドは存在しなかったが、住居址南東コーナー近くに 30 cm 大の礫が転がっており、また、この部分は、後述する周溝が切れていてことからも、かつて南東コーナーに構築されていた可能性がある。床面はやや軟弱で、壁の立ち



第50図 16号住居址出土土器



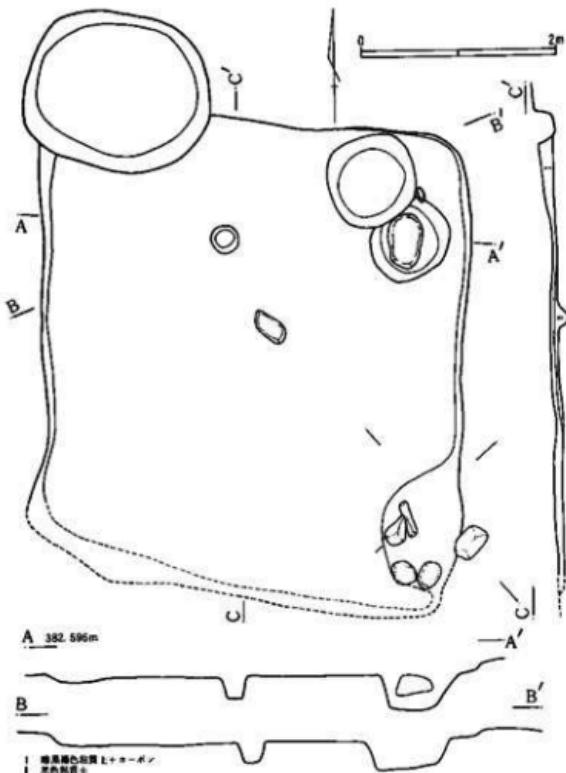
第51図 17号住居址平面図

上がりも強くはない。柱穴は 3 基が確認され、いずれも直径 20 cm、深さ 30 cm 程度である。北東側の柱穴は確認できなかった。住居内ビットは円形を呈し、直径 80 cm、深さ 45 cm を測る。覆土はやはり暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色砂質土ブロックが混入する。本住居址には、東、南、北各壁に周溝が存在する。これらは各壁ごとに分かれしており、最大幅 25 cm、最小幅 10 cm、深さ 5 cm～10 cm を測る。

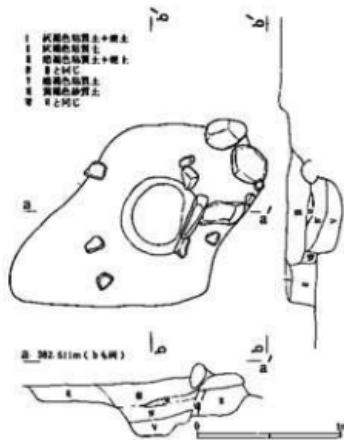
本住居址からは遺物は出土していない。

○18号住居址

550+36S2・S3,+40S2・S3 グリッド。南端に擾乱をうけているが、隅円方形を呈する住居址で、長辺推定 4.7 m、短辺 4.3 m、壁高 0.1 m～0.2 m を測る。カマドは、東壁の南壁寄りに構築される。住居内には、北東コーナー近くに 2 基の浅いビット（直径 90 cm、70 cm、深さ 25 cm、15 cm）と中



第52図 18号住居址平面図



第53図 18号住居址カマド

カマドは、 $100\text{cm} \times 90\text{cm}$ の掘り方をもち、粘土積み上げによる構築と思われる。内部には25

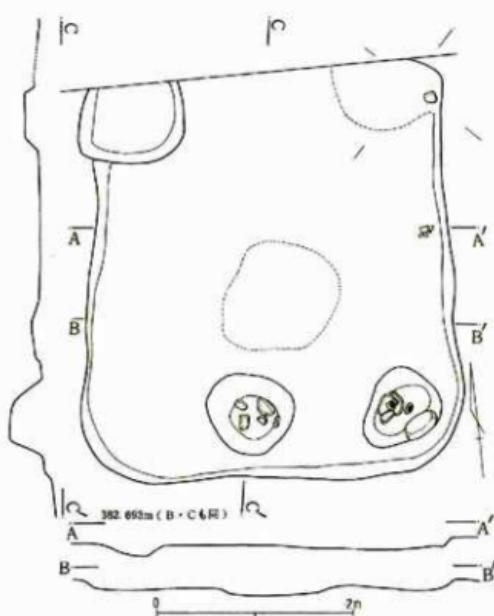
央北寄りに小ピット（径30cm、深さ20cm）が確認されたが、柱穴は存在しない。床はやや軟弱で、壁の立ち上がりも弱い。覆土は暗褐色粘質土を主体として、よく縮まっており、焼土粒子、カーボンが多く混入している。

カマドは、 $130\text{cm} \times 110\text{cm}$ の掘り方をもつ石組みカマドと思われるが、本体は破壊されており、内部には30cm程度の石が散乱していた。掘り方中央部には、径50cm、深さ15cm程度の丸い掘り込みがあり、この部分には、焼土、カーボンが多く認められることから、燃焼部本体の掘り込みと思われる。

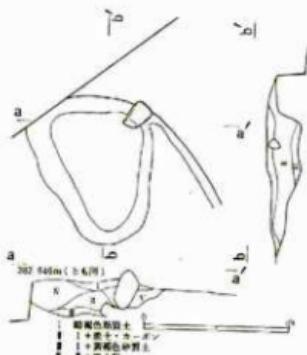
本住居址からの出土遺物は全くない。

○19号住居址

550+36S2・S4,+40S3・S4グリッド。本住居址も、カマドも含めて北端部分に攪乱をうけている。その他、数基の土塙に切られている。隅円方形を呈する住居址で、長辺推定4.2m、短辺推定3.7m、壁高0.1mを測る。カマドは北東コーナーに構築される。床は踏み固められた部分が多い。壁の立ち上がりは強くはない。柱穴は全く確認されず、住居内ピット（梢円形を呈し、長径80cm、深さ30cm）1基が南東コーナーに確認されたにすぎない。中央部分には径1.1mの円形に、床面直上に焼土が堆積しており、また、覆土下層にはほぼ全面に焼土粒子が含まれている。



第54図 19号住居址平面図



第55図 19号住居址カマド
cmの石1個が確認されている。焼土層の形成はみられないが、全体にかなりの比率で粒子が混じっている。

土器

1. ピット内出土。皿。口径 8.2 cm、器高 2.3 cm、底径 5.4 cmを測る。内外面横ナデ、底部は糸切り。胎土は精選され、赤色粒子をわずかに含む。焼成も良好で、褐色を呈する。

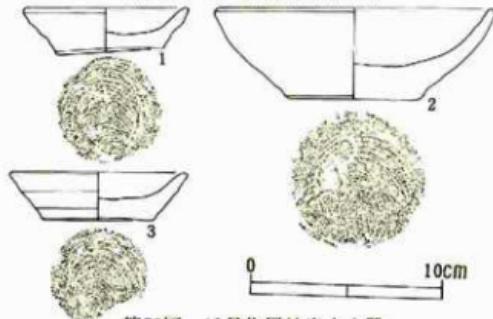
2. ピット内出土。皿。推定口径 7.8 cm、器高 2.6 cm、底径 5.6 cmを測る。整形、胎土、焼成、色調とも 1 に同じ。
3. ピット内及び床面上出土。壺。口径 14.1 cm、器高 4.7 cm、底径 6.6 cmを測る。整形、胎土、焼成は 1 に同じ。暗褐色を呈する。

炭化物

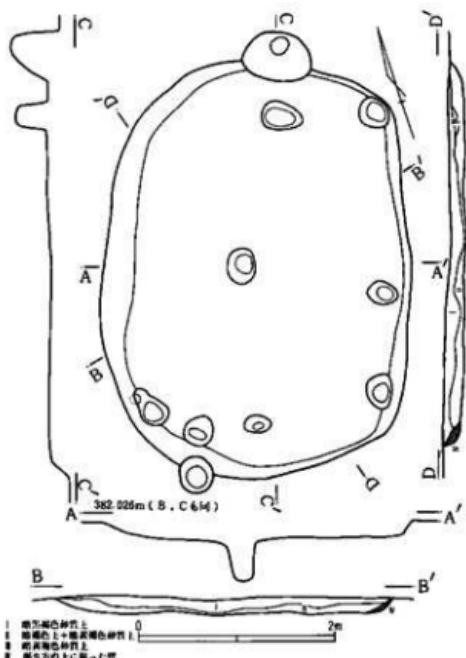
図版33に示したように、ピット内から桃の種と思われる炭化物が出土している。殻果の半片で、梢円形を呈し、現存の長径 2.54 cm、短径 1.65 cm、幅 0.6 cmを測る。表面には深いシワが認められる。

○20号住居址

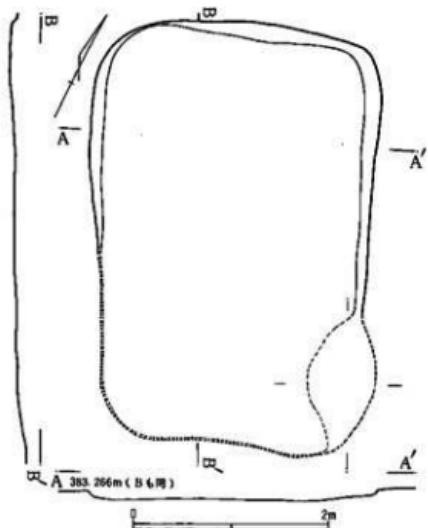
555+40 N2・N3.+44 N2・N3 グリッド。梢円形を呈する住居址で、長軸 4.3 m、短軸 3.2 m、壁高 0.1 m~0.2 mを測る。カマドは存在しない。床面は踏み固められており、また、壁も、セクション図中の斜線部は、貼り付け及び固めを行ったようで、床面と同様である。壁の立ち上がりは弱い。覆土は暗褐色粘質土を主体としてよく締まっており、部分的に黄褐色砂質土が混入



第56図 19号住居址出土土器



第57図 20号住居址平面図



第58図 21号住居址平面図

する。

本住居址も壁際に小ピットを配しており、9基確認されている。壁柱穴と思われるが、西壁沿いには確認されていない。円ないし椭円形を呈し、径10cm~30cm、深さ10cm~40cmを測る。

出土遺物は全くない。

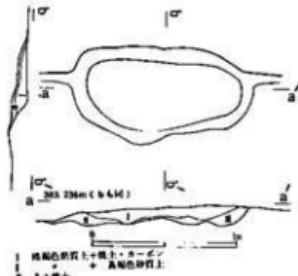
○21号住居址

560+64S6・S7,+68S6・S7グリッド。南半に擾乱をうけているが、隅円長方形を呈する住居址で、長辺推定4.3m、短辺3m、壁高0.1mを測る。カマドは東壁の南東コーナー寄りに構築される。床は軟弱で、壁の立ち上がりも弱い。柱穴、住居内ピットなどは確認されていない。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色砂質土が混入する。

カマドは、120cm×70cmの掘り方をもち、内部に石組みは全くみられず、粘土積み上げによる構築と思われる。焼土層は形成されておらず、粒子が飛散していた。

土器

1. カマド内出土。壺。器高3.7cm。内外面横ナデ、底部は糸切り。その後外面～底面にかけてヘラ削りを施す。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼



第59図 21号住居址カマド

成も良好で、暗褐色を呈する。

2. 覆土出土。壺。器高3.5cm。整形、胎土、焼成は1に同じ。褐色を呈する。

○22号住居址

550+56S1・S2グリッド。

隅円方形を呈する住居址で、長辺4.9m、短辺3.7m、壁高0.1m~0.2mを測る。カマドは北東コーナーに構築される。床はやや軟弱で、壁の立ち上がりも強くはない。住居内には、北西コーナー、南東コーナーにピット（それぞれ径90cm、80cm、深さ20cm、30cm）があり、他に小ピット4基が確認された。小ピットは柱穴と思われるが、3基は壁もしくは壁際にあり、一般的な柱穴の位置関係とは異なる。覆土は、暗褐色粘質土と黄褐色砂質土の混土である。

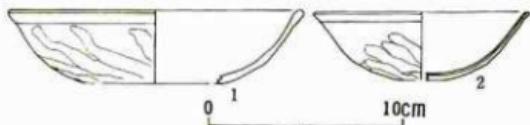
カマドは、100cm×110

cmの掘り方をもち、床面下への掘り込みは浅く、5cmを測る。内部には石組みはみられないが、袖石の掘り込みらしき小さな掘り込みがあり、あるいは石組みカマドであるかもしれない。純粋な焼土層は形成されていないが、暗褐色粘質土、焼土、灰の混土が厚く堆積していた。図示していないが、カマドの手前には、10cm程の掘り込みがみられ、焼土粒子を含んだ土が堆積しており、以下に示す土器が出土している。

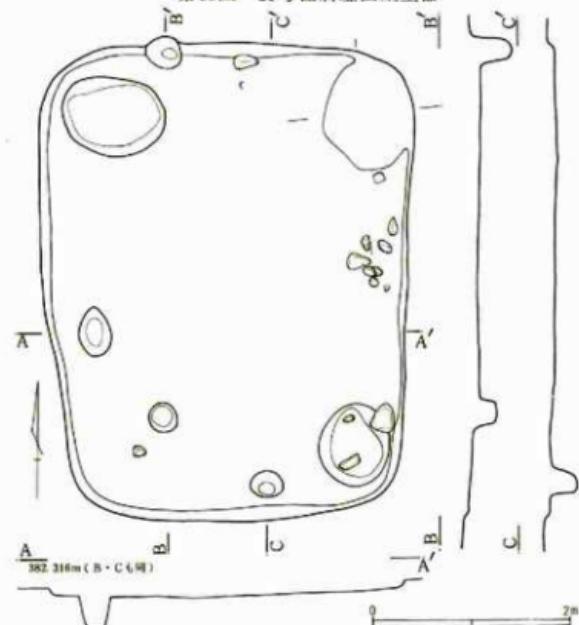
土器

1. 掘り込み内出土。壺。口径13.7cm、器高4.6cm、底径6.5cmを測る。内外面横ナゲ、底部は糸切り。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成も良好で、明褐色を呈する。

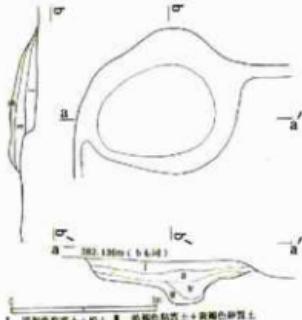
2. 掘り込み内出土。皿。推定口



第60図 21号住居址出土土器



第61図 22号住居址平面図



第62図 22号住居址カマド

径 8.2cm、器高 2.2cm。整形、胎土、焼成、色調とも 1 に同じ。3. 南東コーナー住居内ピットからの出土。壺。整形は 1 に同じ。胎土も 1 と同じであるが、赤色粒子を多く含む。焼成は良好で、赤褐色を呈する。

○23号住居址

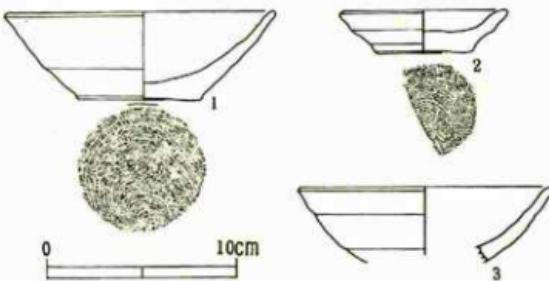
550+60S1・

S2,+64S1・S2

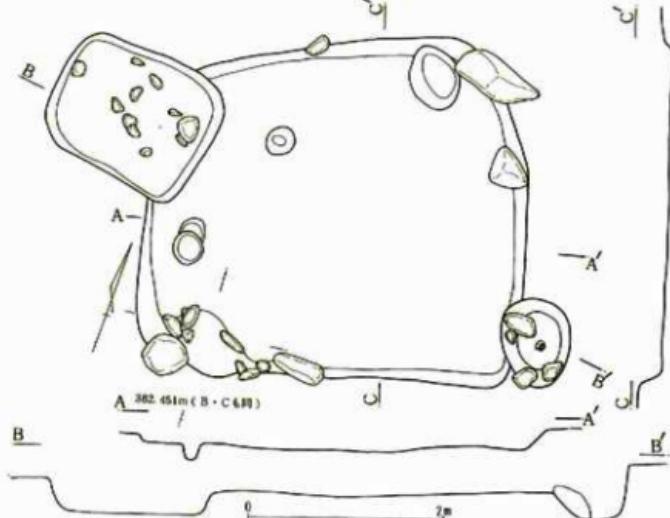
グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺 4m、短边 3.5m、壁高 0.2m を測る。床はカマド付近以外軟弱である。北東コーナーに住居内ピット (70 cm × 50cm × 30cm) が存在し、他に小ピット 3 基 (径 30cm、深さ 20cm ~ 30cm) が確認されているが、

このうち、位置から柱穴と考えられるものは 1 基だけである。4 本柱穴と思われるが、他の 3 基は確認できなかった。覆土は暗褐色粘質土を主体とし黄褐色砂質土が混入する。

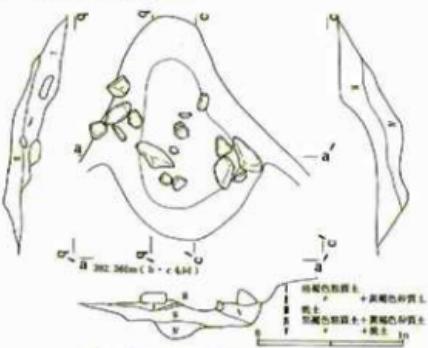
カマドは、150 cm × 110 cm の掘り方をもち、床面下への掘り込みも深く、20cm を測る。内部には 30cm 大の石がみられ、石組みカマドと思われる。ただ、袖石の掘り込みはみられなかった。焼土の堆積はカマド上部に 2 cm 程度みられるだけで、燃焼部本体と思われる部分



第63図 22号住居址出土土器



第64図 23号住居址平面図

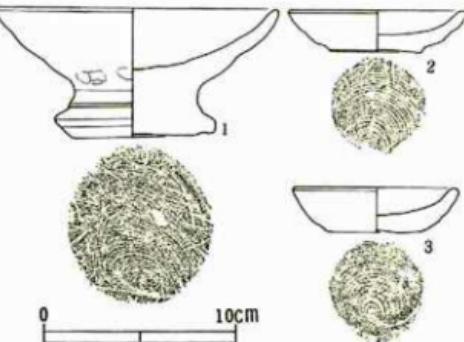


第65図 23号住居址カマド

には粒子が飛散する程度であった。

土器

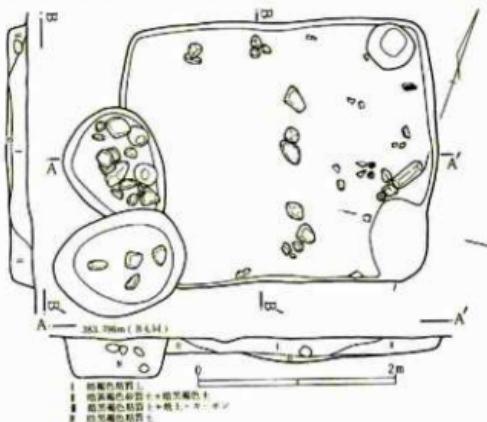
1. 覆土出土。口付壺。口径14.4cm、器高6.5cm、底径8cm。内外面横ナデ、底部は糸切り。本資料には、底部糸切り後、ヘラ状工具で部分的に調整を施した痕跡がある。また、くびれ部には指頭調整を施している。胎土は精選され、赤色粒子をわずかに含む。焼成は良好で、暗褐色を呈する。2. カマド内出土。皿。口径8.8cm、器高2.2cm、底径4.8cmを測る。内外面横ナデ、底部は糸切り。胎土は精選されているが、雲母が目立つ。また、赤色粒子は全く含んでいない。焼成、色調は1と同じ。3. 覆土出土。皿。口径8.1cm、器高2.3cm、底径4.8cmを測る。整形、胎土、焼成は2と同じ。灰褐色を呈する。



第66図 23号住居址出土土器

O24号住居址

550+60N3・N4,+64N3・N4 グリッド。隅円方形を呈する小型の住居址で、長辺3.2m、短辺2.7m、壁高0.2mを測る。カマドは南東コーナーに構築される。床は踏み固められており、壁の立ち上がりも比較的強い。北西コーナーには住居内ピットがみられる。円形を呈し、直径50cm、深さ25cmを測る。柱穴は認められなかった。覆土は、暗褐色粘質土を主体とし、下層には焼土粒子、カーボンを含んでいる。

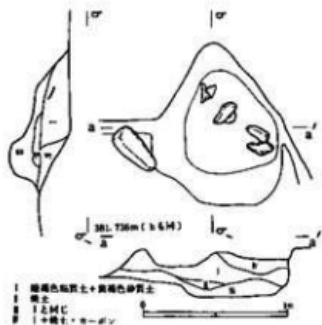


第67図 24号住居址平面図

カマドは、110cm×90cmの掘り方をもち、床面下への掘り込みは、最大20cmを測る。内部には20cm程度の石3個があり、石組みカマドと思われる。カマド脇には40cmちかい土留め石がみられる。焼土は約5cmの堆積である。

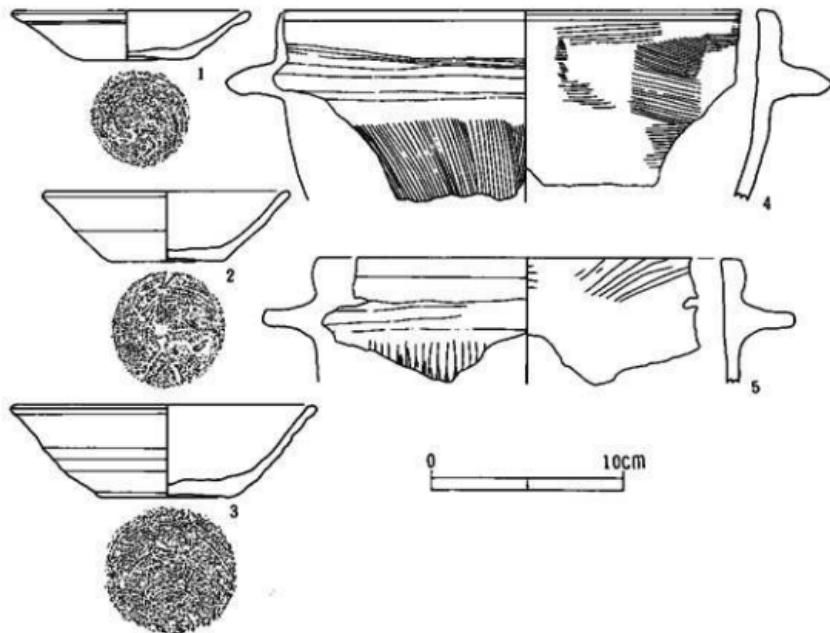
土器

1. カマド内出土。皿。口径11.7cm、器高2.5cm、底径5.1cmを測る。内外面横ナデ、底部は糸切り。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成は良好で、赤褐色を呈する。2. 覆土出土。壺。口径12.4cm、器高3.6cm、底径6cmを測る。整形、胎土、焼成は1と同じ。明褐色を呈する。3. 覆土出土。壺。口径15.7cm、器高4.7cm、底径7cmを測る。整形は1と同じ。胎土に



は砂粒を含む。焼成は良好で、暗褐色を呈する。4. カマド内及び床面直上出土。羽釜。内外面ハケ調整。鈎の貼り付けはやや難である。胎土には砂粒を含む。焼成は良好で、褐色を呈する。5. 床面直上出土。羽釜。外面ハケ調整、内面横ナデ。胎土、焼成は4に同じ。黒色を呈する。

第68図 24号住居址カマド

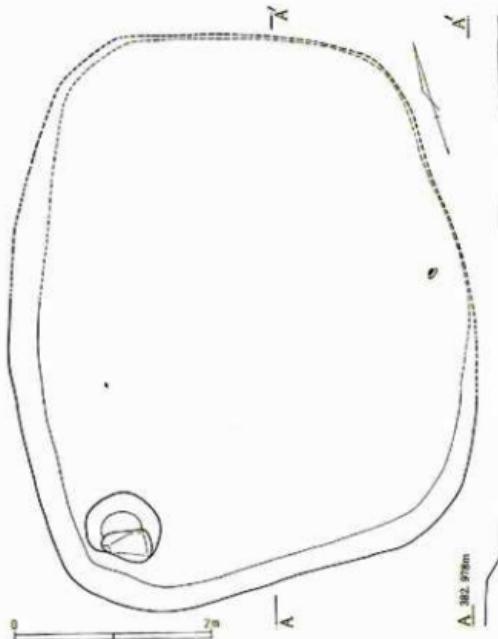


第69図 24号住居址出土土器

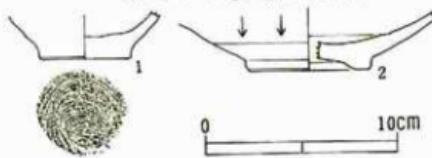
○25号住居址

550+60 S1・S2、+64 S1・S2グリッド。住居北半に擾乱をうけており、形状、規模などは不明であるが、隅円方形を呈すると思われる。また、短辺4.5m、壁高0.1m~0.2mを測る。カマドは南半には存在しない。柱穴も確認されなかったが、南西コーナーに住居内ピット（直径60cm、深さ30cm）1基が確認された。南側の床はやや軟弱である。

土器



第70図 25号住居址平面図



第71図 25号住居址出土土器

側に梢円形の小ピット1基(長径50cm、短径25cm、深さ10cm)と住居内ピットが西壁両コーナー(北側:径60cm、深さ20cm、南側:径60cm、深さ30cm)に確認された。また、住居址北東コーナー寄りには土塙が切り込んでいる。

カマドは、120cm×70cmの掘り方をもち、床面下への掘り込みは、最大10cmを測る。内部に石組みやその掘り込みなどは全くみられず、粘土積み上げによる構築と思われる。焼土は約5cmの堆積である。

土器

本住居址からは、床面直上、ピット、壁柱穴などから多くの土器が出土している。小片が多く、復元可能なものの一部を図示した。

1. 覆土出土。壺。口径12cm、器高3.5cm、底径4.7cmを測る。内外面横ナデ後、外面下半～底部にヘラ削りを施す。底面の糸切り痕は全くみられない。胎土は精選され、赤色粒子を含

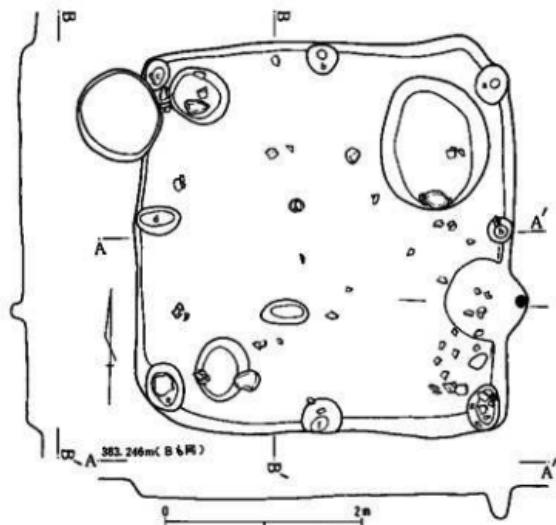
1. 床面直上出土。壺。底径4.6cm。内外面横ナデ、底部は糸切り。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成は良好で、明褐色を呈する。

2. 覆土出土。白磁碗。内面胴部下半に一条の産みがみられる。台部は削り出し高台。13世紀～14世紀に位置づけられる。

○26号住居址

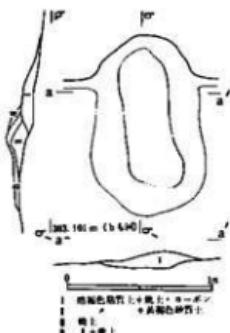
550+80S6・S7,+84S6・S7グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺4m、短辺3.9m、壁高0.1m～0.2mを測る。カマドは東壁中央やや南寄りに構築される。床はよく締まっており、壁の立ち上がりもしっかりしている。覆土は暗褐色粘質土を主体とするが、多量の焼土粒子、カーボンを含む。図示していないが、住居内の南側中央部には180cm×130cmの範囲で焼土、カーボンが散っていた。

本住居址は壁柱穴をもち、各コーナー及びその中間に8基が確認されている。円ないし梢円形を呈し、直径20cm～40cm、深さ10cm～40cmを測る。他に中央やや南

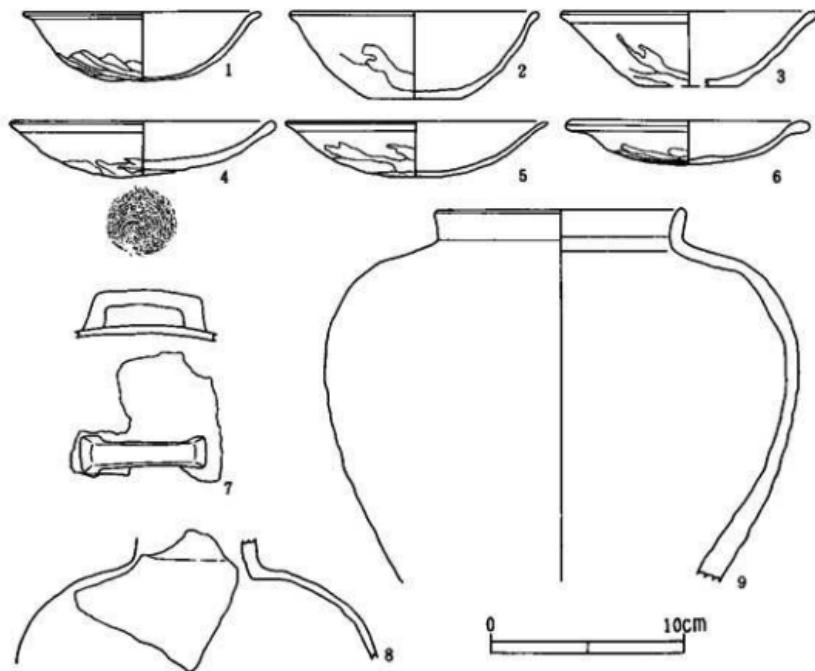


第72図 26号住居址平面図

む。焼成は良好で、茶褐色を呈する。2. 柱穴d出土。壊。器高4.5cm、底径4.4cm。整形は1と同様であるが、ヘラ削りは底部の近辺及び胴部であるため、



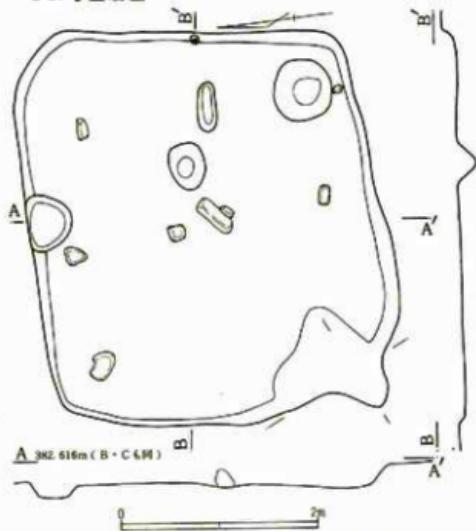
第73図 26号住居址カマド



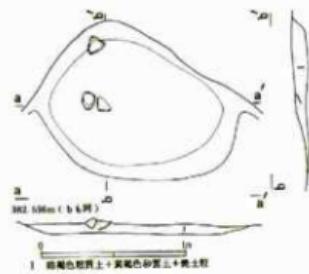
第74図 26号住居址出土土器

底面中心部に糸切り痕が残る。胎土、焼成は1と同じ。褐色を呈する。 3. 柱穴a出土。坏。器高3.8cm。整形は1と同様であるが、ヘラ削りは底面には施さない。糸切り痕が明瞭である。胎土、焼成、色調は2と同じ。 4. 柱穴d出土。皿。口径13.2cm、器高2.8cm、底径3.5cmを測る。整形、胎土、焼成とも2と同じ。暗褐色を呈する。 5. 覆土出土。皿。器高推定2.8cm。整形、胎土、焼成は1と同じ。暗褐色を呈する。 6. 床面直上出土。皿。推定口径11.9cm、器高2.3cm。整形、胎土、焼成とも1と同じ。褐色を呈する。 7. 床面直上出土。手付小瓶？。把手の貼り付けは丁寧に行われている。胎土は精選され、焼成も良好である。灰色を呈する。 8. ピット内出土。灰釉陶器壺。頸部内径推定5.6cm。ロクロ整形。胎土、焼成、色調とも7と同じ。 9. 柱穴e出土。須恵器短頸壺。口径推定12.7cm。ロクロ整形。胎土は精選され、焼成も良好である。暗灰色を呈する。なお、肩部に自然釉がみられる。

○27号住居址



第75図 27号住居址平面図



第76図 27号住居址カマド



第77図 27号住居址出土土器

550+52S4・S5,+56S4・S5 グリッ

F. 隅円方形を呈する住居址で、長辺4m、短辺3.6m、壁高0.1m～0.2mを測る。カマドは南西コーナーに構築される。床はカマド付近以外軟弱で、壁の立ち上がりも強くはない。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色砂質土が混入する。住居南東コーナーには、直径65cm、深さ20cmの円形ピット1基が存在するが、柱穴は確認されなかった。他に、円形、長楕円形のピット3基が確認されているが、いずれも深さは10cm内外であり、性格は不明である。

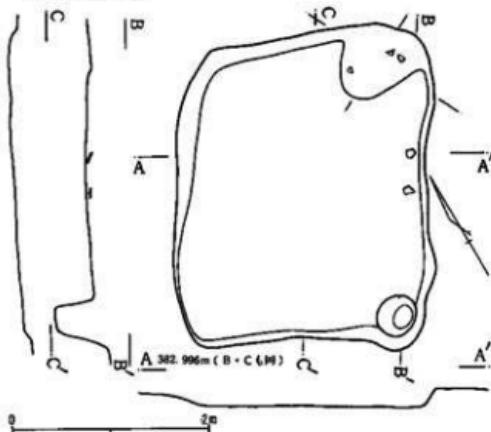
カマドは、110cm×140cmの掘り方をもつが、内部に石はほとんどみられず、粘土積み上げによる構築と思われる。焼土層は形成されておらず、粒子が飛散する程度であった。

土器

1. 床面直上出土。皿。口径8.2cm、器高2.3cm、底径4.7cmを測る。内外面横ナデ、底部は糸

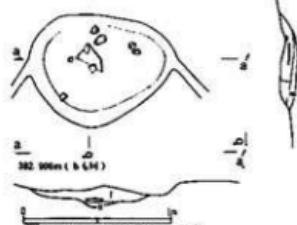
切り。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成も良好で、明褐色を呈する。

○28号住居址

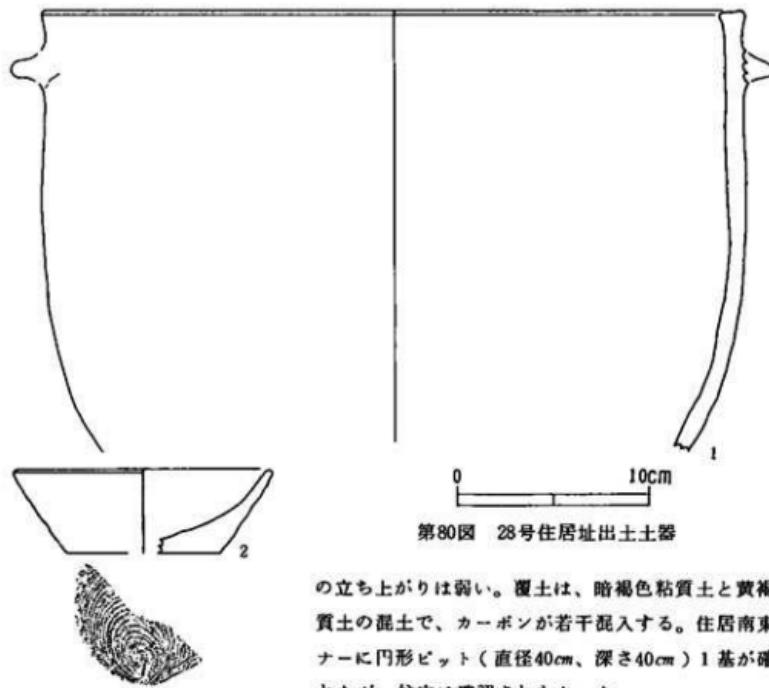


第78図 28号住居址平面図

+ 555+40S6・S7 グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺 3.1 m、短辺 2.6 m、壁高 0.1 m~0.2 m を測る。カマドは北東コーナーに構築される。床は踏み固められている。壁



第79図 28号住居址カマド



第80図 28号住居址出土土器

の立ち上がりは弱い。覆土は、暗褐色粘質土と黄褐色砂質土の混土で、カーボンが若干混入する。住居南東コーナーに円形ピット（直径40cm、深さ40cm）1基が確認されたが、柱穴は確認されなかった。

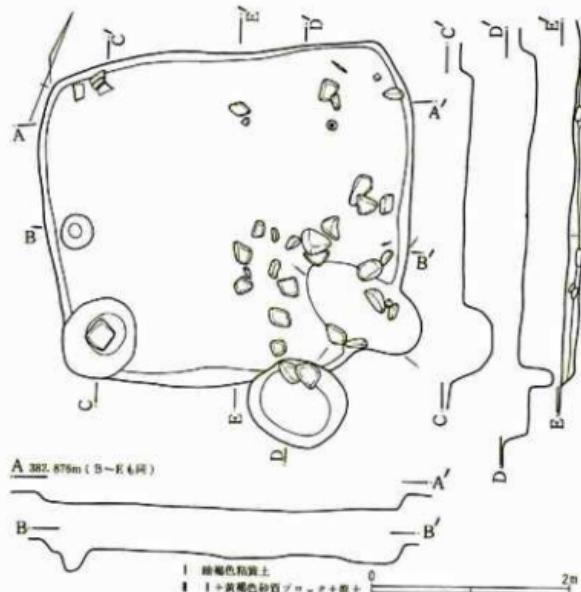
カマドは、 $100\text{ cm} \times 80\text{ cm}$ の掘り方をもち、床面下への掘り込みは浅く、 5 cm を測る。内部には拳大の礫が確認されたが、黄褐色粘土も確認されており本体は粘土積み上げによると思われる。内部に焼土層は形成されていないが、焼土粒子、カーボンを多量に含んだ混土層の堆積がみられた。

土器

1. カマド内出土。釜。推定口径 36 cm 程度と思われる大型品である。把手の貼り付けはやや難である。内外面ナデ調整。内外面とも面にやや凹凸がみられるが、潰しが丁寧に行われているため輪積み痕はほとんどみられない。胎土には小砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面暗褐色、外面黒色を呈する。2. 床面直上出土。壺。推定口径 13 cm 、器高 4.3 cm 、推定底径 7.8 cm を測る。内外面横ナデ、底部は糸切り。整形は丁寧である。胎土は精選され、焼成も良好である。暗褐色を呈する。

○29号住居址

550+36S5・S6 グリッフ。隅円方形を呈する住居址で、長辺 3.8 m 、短辺 3.4 m 、壁高 $0.1\text{ m} \sim 0.2\text{ m}$ を測る。カマドは南東コーナーに構築される。床はカマド付近以外やや軟弱である。壁の立ち上がりも強くはない。覆土は、暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色砂質土ブロック、焼土粒子などが混入している。住居南西コーナーには円形ピット（直径 80 cm 、深さ 30 cm ）1基が確認され、他には西壁沿いに小ピット（径 30 cm 、深さ 20 cm ）が確認されたにすぎない。

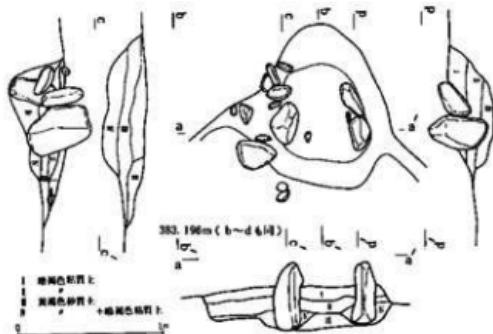


第81図 29号住居址平面図

カマドは、 $100\text{ cm} \times 110\text{ cm}$ の掘り方をもち、床面下への掘り込みは 15 cm を測る。袖石は $30\text{ cm} \sim 40\text{ cm}$ の平石を左右に2枚づつ用い、袖石間は 50 cm を測る。焼土層は形成されておらず、粒子が飛散する程度であった。

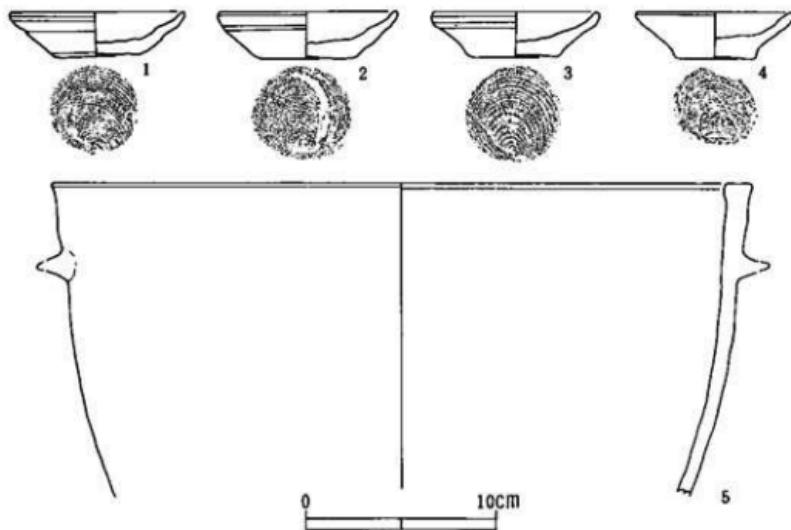
土器

1. 床面直上出土。皿。口径 8.7 cm 、器高 2.3 cm 、底径 4.6 cm を測る。内外面横ナデ、底部は



第82図 29号住居址カマド

カマド内出土。皿。口径 8 cm、器高 2.4 cm、底径 3.8 cm を測る。整形は 1 に同じであるが、やや雑である。胎土は精選されているが、赤色粒子を含む。焼成は良好で、褐色を呈する。
5. 床面直上出土。釜。口径 36 cm 程度と推定される。内外面横ナデ、輪積み後の潰しが丁寧で、輪積み痕は全くみられない。口縁下には、わずかに指頭痕がみられる。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で、内面暗褐色、外面黑色を呈する。

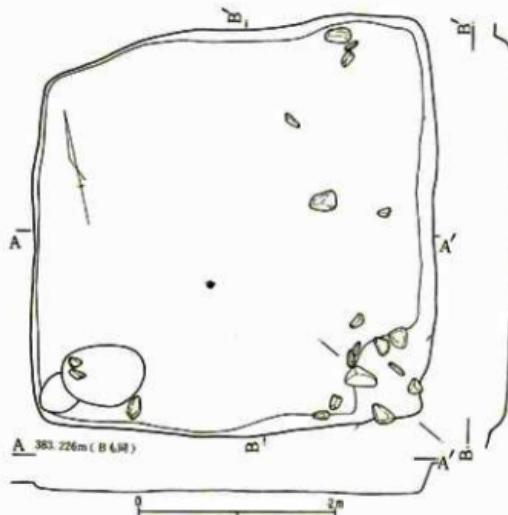


第83図 29号住居址出土土器

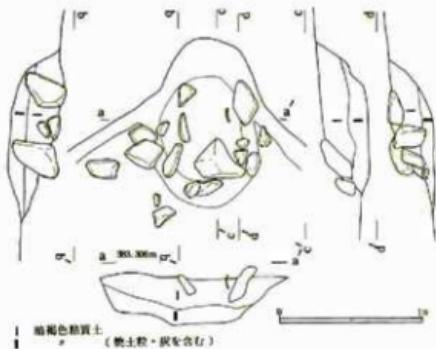
○30号住居址

549+11S7,+15S6+S7 グリッド。隅円方形を呈する住居址で、長辺 4.2 m、短辺 4.1 m、壁高 0.1 m ~ 0.2 m を測る。カマドは南東コーナーに構築される。床はカマド付近以外軟弱である。

糸切り。胎土は精選され、赤色粒子は含まない。焼成も良好で、赤褐色を呈する。2. 床面直上出土。皿。口径 9.1 cm、器高 2.5 cm、底径 5 cm を測る。整形は 1 と同じ。胎土は精選されているが、雲母を多量に含む。焼成は良好で、灰褐色を呈する。3. 覆土出土。皿。口径 8.3 cm、器高 2.4 cm、底径 5 cm を測る。整形、胎土、焼成は 1 と同じ。暗褐色を呈する。4.



第84図 30号住居址平面図



第85図 30号住居址カマド

1. 覆土出土。皿。口径 8.5 cm、器高 2.5 cm、底径 5 cm を測る。内外面横ナデ、底部は糸切り。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成も良好で、褐色を呈する。

○31号住居址

550+27N3・N4、+31N3・N4 グリッド。道路によって、住居址東半は破壊されているが、隅円方形を呈するとと思われ、西辺 4.2 m、壁高 0.1 m ~ 0.2 m を測る。カマドは残存部分には存在しない。また、残存部中央にも、幅 0.5 m、長さ 2.6 m の擾乱が入っている。柱穴、ピットは確認されなかった。床は軟弱である。

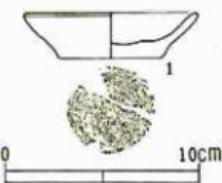
土器

1. 床面直上出土。环。口径 13.8 cm、器高 4.4 cm、底径 6.9 cm を測る。内外面横ナデ、底

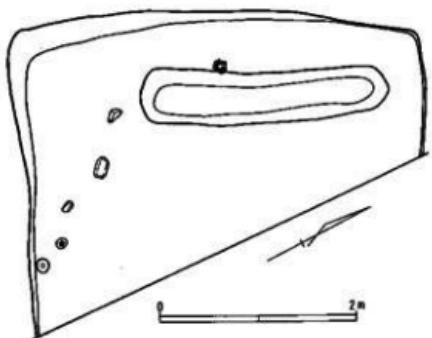
壁の立ち上がりは強い。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色砂質土が混入する。住居南西コーナーには椭円形のピット（長径 75 cm、短径 60 cm、深さ 30 cm）と、それに接して小ピット（径 40 cm、深さ 30 cm）が確認された。この小ピットは、1 基だけの確認で、他のコーナーにはみられないため、性格は不明である。

カマドは、120 cm × 80 cm の掘り方をもち、床面下への掘り込みは浅く、5 cm を測る。本体は、30 cm 程度の平石 3 枚を袖石としたものと思われる。左右の袖石間は 45 cm を測る。焼土層は形成されてはいないが、暗褐色粘質土に焼土粒子、カーボンが多量に混入していた。

土器



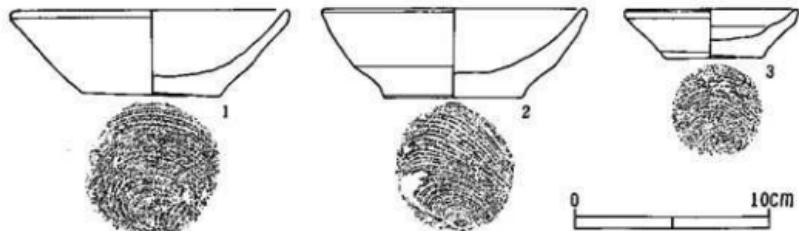
第86図 30号住居址出土土器



第87図 31号住居址平面図

部は糸切り。胎土は精選されているが、雲母を多量に含む。また赤色粒子はみられない。焼成も良好で、淡褐色を呈する。なお、本資料は、内面のところどころに剥離がみられ、口唇にはタール状付着物がみられる。

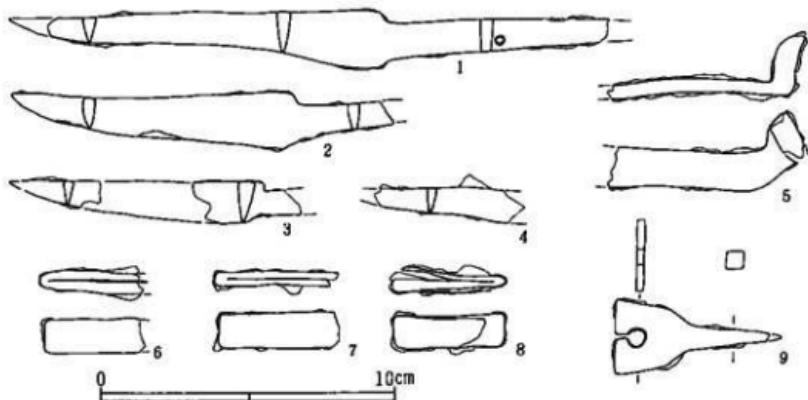
2. 覆土出土。壺。推定口径13.3cm、器高4.6cm、底径7.2cmを測る。整形、焼成は1と同じ。胎土は精選され、赤色粒子を含む。明褐色を呈する。3. 床面直上出土。皿。口径8.6cm、器高2.5cm、底径4.8cmを測る。整形、胎土、焼成とも1と同じ。本資料にも雲母が目立つ。褐色を呈する。



第88図 31号住居址出土土器

鉄製品

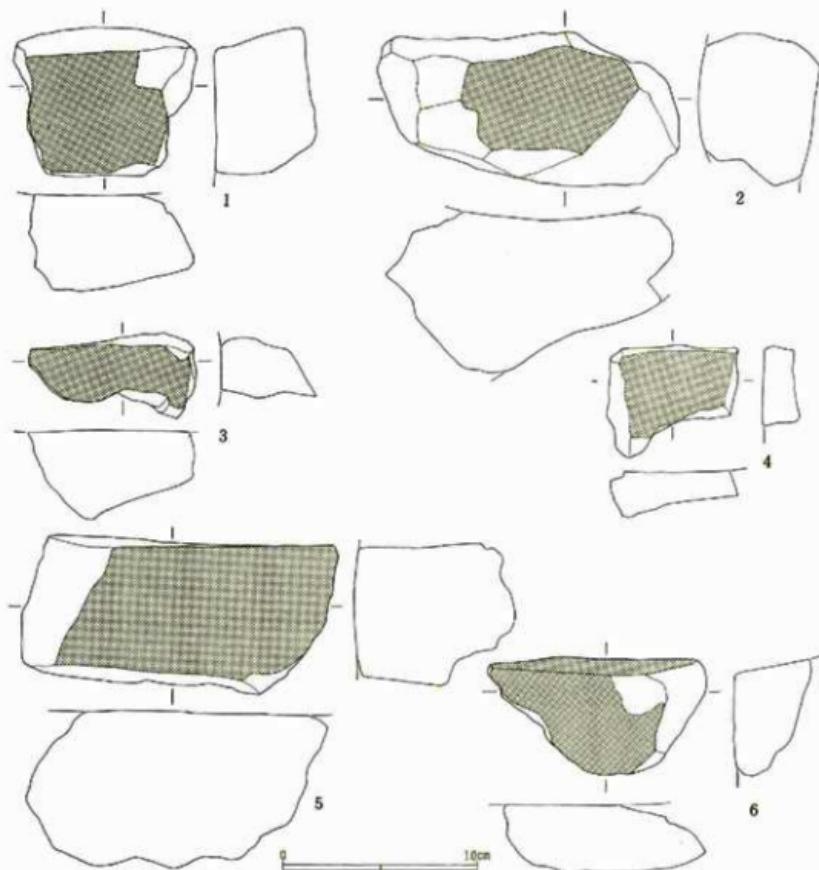
住居内からはかなり多くの鉄製品が出土しているが、いずれも腐食が激しく、復元できたも



第89図 住居内出土鉄製品

のは極くわずかである。

1. 刀子。29号住居址出土。茎部の一部及び刃部先端を欠損している。刃は楔形を呈し、関部で最も幅が広くなる。現存する茎部7.5cm、刃部11.5cmを測る。2. 刀子。1号住居址出土。1に比べやや小形で、現存する茎部3.2cm、刃部9.6cmを測る。3. 刀子。1号住居址出土。関部及び刃部先端部である。4. 刀子。15号住居址出土。刃部先端欠損。現存部5.1cmを測る。5. 不明鉄製品。30号住居址出土。幅約1.2cm程のコの字状鉄板の両端を折り曲げたものと思われる。刃はつくられておらず、木質なども残っていない。最大幅1.4cm、折り返し部までの長さ約7.3cmを測る。6～8. 不明鉄製品。いずれも22号住居址出土。22号住居址からは、これと同様の製品が少なくともあと2点出土している。厚さ約2mmの鉄板を折り返して、U字状もしくはS字状を呈している。なお、鉄板の幅は1.0cm～1.2cmである。これらに



第90図 住居内出土石器

は、いずれも刃はつくり出されていないが、一部に木質の残存するものもある。 9. 不明鉄製品。15号住居址出土。先端部を欠損している。現存長5.3cm。全体としては楔形を呈し、真ん中から細くなり、欠損した先端部は尖っていたと思われる。木などに打ち込む使用法が考えられるが、残存部分に木質はみられない。

石器

砥石が6点出土した。いずれも凝灰岩製である。 1. グリッド出土。上面のみの一面使用である。使用面には擦痕が著しい。 2. 24号住居址出土。上下の2面を使用している。下面には2条の深い擦痕がみられる。 3. 17号住居址出土。上面のみの一面使用。 4. 12号住居址出土。上面のみの一面使用。 5. 30号住居址出土。上面のみの一面使用であるが、まだ使用回数が少なかったとみえ、使用面に、素材の剥離が残り、表面が平坦になっていない。 6. グリッド出土。上、横の2面使用。横面は使用が著しく平滑である。上面は横面に比べると使用回数が少ない。また、上面には深い擦痕がみられる。

2. 土塙群

本遺跡では、389基の土塙が確認された。これらは、調査区西側に特に集中し、この部分には溝、水溜めなどもみられることから、既報告の北堀遺跡と同様な傾向といえる。その位置関係から溝と関連するものがあるとすれば、時期的にも更に下る可能性がある訳であるが、本遺跡で確認された土塙は、住居址を切っていること、わずかながらの出土遺物が住居址とはほとんど時期的に変わらないこと、さらに、溝からの出土遺物も、これらと大差のないことなどから、住居址より古くはないものの、多くが平安時代末頃に位置づけられるとしてよいであろう。また、北堀遺跡では、常滑、古錢などを出土した、明らかに、鎌倉時代に入る土塙が数基確認されているが、本遺跡においては、このような確実な例は確認されていない。

全体図から明らかなように、5号～10号溝の両側に特に多くの土塙が集中している。北堀遺跡でも構築物の可能性を否定しなかったが、本遺跡も同様である。

後述する出土土師質土器からは、13世紀代以降の可能性のあるものも、わずかながら認められ、土塙群の時間幅も長くとらえられると思われるが、いずれも覆土からの出土であり、確実なものとはいえない。逆に、多くの遺物が認められる平安時代末に、この土塙群を納めることにすれば、極めて短期間に頻繁につくり変えがなされたと考えるべきであり、構築物は考えにくくなる。いずれにしても、土塙群は、複雑に切り合っており、その配列に規則性はみられない。

さて、本遺跡で確認された土塙も、平面形が円形、底部がU字状を呈し、径1m前後、深さ0.3m～0.6m程度のものが最も多い。ただし深さについては、確認面からの深さであり、0.7m～1m程度を想像しておいた方がよいかもしれない。内部に石を伴うものが27基、小ビットの掘られているもの30基が確認されているが、何の施設ももたないものがほとんどである。また、壁の両側もしくは片側がフ拉斯コ状を呈する土塙は21基確認されたにすぎず、円筒状を呈するものがほとんどである。

個々の土塙の規模、形状、施設などについては次表に示しておく。

土塁一覧表

土塁No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	その他の	土塁No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	その他の
1号	円 形	1.2	1.15	63	プラスコ型	37号	椭 圆 形	1.2	1.0	9	
2号	長 方 形	1.2	(1.08)	22		38号	椭 圆 形	0.45	0.35	46	pit 1
3号	椭 圆 形	1.2	1.05	29		39号	椭 圆 形	(1.5)	1.25	47	
4号	椭 圆 形	0.85	0.7	32		40号	椭 圆 形	0.65	0.6	10	pit 1
5号	長 方 形	1.2	0.9	17	pit 1	41号	椭 圆 形	0.75	0.6	19	
6号	(椭 圆 形)	(1.5)	1.35	26	pit 2	42号	椭 圆 形	1.3	1.15		プラスコ型
7号	椭 圆 形	1.45	0.9	45		43号	円 形	1.15	1.1		pit 1
8号	椭 圆 形	1.2	1.0	50	プラスコ型	44号	椭 圆 形	1.25	0.95	19	プラスコ型
9号	円 形	1.25	1.15	47		45号	不整 圆 形	1.4	1.1	20.5	pit 2
10号	円 形	1.55	1.45	69		46号	円 形	0.8	0.8	31	プラスコ型
11号	円 形	1.0	0.95	11.5		47号	椭 圆 形	0.4	0.35	28	
12号	椭 圆 形	1.05	0.75	45		48号	椭 圆 形	0.7	0.45		
13号	椭 圆 形	1.2	0.95	50	プラスコ型	49号	椭 圆 形	1.9	1.35	62	石 1
14号	椭 圆 形	(1.3)	1.05	57	プラスコ型	50号	円 形	0.85	0.85	10	
15号	円 形	1.15	1.15	15		51号	(椭 圆 形)	(1.8)	(1.45)	51	
16号	円 形	1.1	1.1	52	石 1 プラスコ型	52号	椭 圆 形	(1.0)	0.8	51	pit 1
17号	円 形	1.15	1.1	51	プラスコ型	53号	円 形	1.3	1.15	75	
18号	円 形	1.35	1.3	31	pit 1	54号	椭 圆 形	1.2	0.95	47	pit 1 石 1
19号	円 形	1.15	1.15	24		55号	(椭 圆 形)	(1.1)	0.9	24	
20号	椭 圆 形	1.25	1.1	35		56号	(椭 圆 形)	(1.1)	(0.85)	40	
21号	椭 圆 形	1.2	0.8	2		57号	円 形	1.15	1.25	76	
22号	椭 圆 形	1.25	0.65	29		58号	椭 圆 形	1.2	1.0	14.5	
23号	(円 形)	1.35	1.35	20		59号	円 形	0.95	0.9	66	プラスコ型
24号	(椭 圆 形)	1.6	1.45	9		60号	椭 圆 形	1.1	1.0	18	
25号	円 形	1.2	1.2	10		61号	円 形	1.15	1.1	18	pit 1
26号	椭 圆 形	1.85	0.75	3	pit 1	62号	円 形	1.2	(1.2)	38	
27号	椭 圆 形	0.65	0.45	39		63号	円 形	1.1	1.05	25	
28号	不整 圆 形	(1.45)	0.9	20		64号	椭 圆 形	0.9	0.65	17	石 1
29号	椭 圆 形	1.2	1.0	26		65号	(椭 圆 形)	(1.3)	1.1	6	
30号	椭 圆 形	0.9	0.75	20		66号	不 整 形	(1.9)	1.65	12	pit 2
31号	不 整 形	1.5	1.25	49	pit 8	67号	円 形	1.3	1.3	50	
32号	椭 圆 形	1.05	0.8	21.5		68号	不整 圆 形	3.1	2.55	102	
33号	椭 圆 形	(1.2)	(1.05)	61		69号	椭 圆 形	2.05	1.25	82	pit 1 石 1
34号	円 形	1.1	1.05	36		70号	円 形	0.65	0.65	33	
35号	不整 圆 形	1.35	1.0	40	pit 1	71号	不整 圆 形	1.15	1.0	70	
36号	(椭 圆 形)	(1.2)	0.9	26		72号	椭 圆 形	1.35	0.9	34.5	

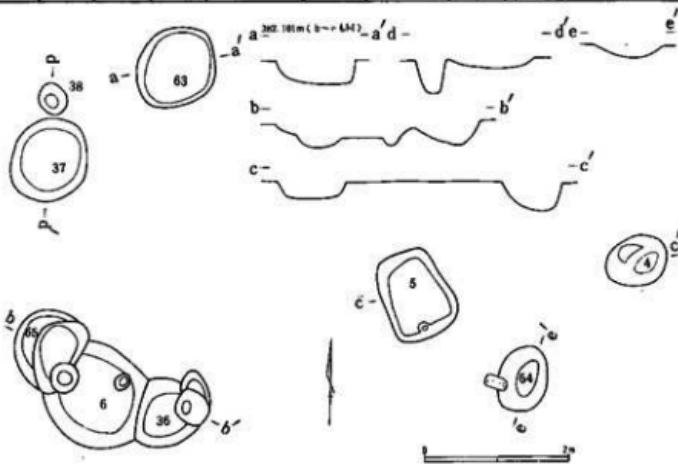
土塁No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	その 他	土塁No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	その 他
73号	椭 圆 形	1.25	0.9	51		112号	(椭圆形)	(1.3)	(1.2)	60	
74号	円 形	0.9	0.75	50	石	113号	(椭圆形)	(1.3)	(0.75)	33	
75号	(円 形)	1.3	(1.3)	77		114号	椭 圆 形	1.4	1.2	44	
76号	椭 圆 形	1.25	1.15	63		115号	円 形	1.2	1.15	64.5	
77号	(不整円形)	1.25	1.2	37		116号	椭 圆 形	1.0	0.65	60	
78号	椭 圆 形	(1.8)	(1.2)	31.5		117号	椭 圆 形	1.2	(1.05)	71	
79号	(椭圆方形)	(0.95)	(0.95)	24		118号	椭 圆 形	2.1	1.7	29	石
80号	椭 圆 形	1.45	1.25			119号	(椭圆形)	(1.4)	1.15	39	
81号	椭 圆 形	1.2	1.1	61		120号	椭 圆 形	1.05	0.8	24	
82号	椭 圆 形	1.1	1.0	31	pit 1	121号	円 形	0.95	(0.95)	20	石
83号	円 形	1.15	1.15	75		122号	(円 形)	(1.4)	(1.4)	35	
84号	(椭圆形)	(1.35)	1.2	12		123号	椭 圆 形	1.6	(1.1)	54	
85号	(円 形)	(1.0)	(1.0)			124号	椭 圆 形	1.7	1.4	51	
86号	(椭圆形)	1.55	0.9	64.5	pit 1	125号	円 形	1.05	(1.05)	14	
87号	長 方 形	1.1	0.8	20		126号	椭 圆 形	1.25	1.15	19	
88号	円 形	1.2	1.15	53		127号	椭 圆 形	1.25	1.1	58	
89号		1.15		50		128号	椭 圆 形	1.4	1.15	73.5	
90号	(円 形)	(0.55)	(0.55)	95		129号	(円 形)	1.05	(1.05)	72	
91号	(椭圆形)	1.5	(0.7)			130号	円 形	1.15	1.25	90	
92号	不 整 形	1.45	1.3		pit 5?	131号	椭 圆 形	(1.3)	(1.1)	12	
93号	椭 圆 形	1.5	1.4		石	132号	円 形	1.2	(1.2)		
94号	椭 圆 形	1.25	1.05	21.5		133号	椭 圆 形	0.85	0.65	46	
95号	不 整 形	0.75	0.75	27	pit 1	134号	円 形	1.0	1.05	69	
96号	円 形	0.45	0.45	42		135号	椭 圆 形	1.3	1.05	66	
97号	不整円形	1.65	0.95	24	pit 2	136号	椭 圆 形	1.3	0.9	53	
98号	長 方 形	1.25	0.9	4		137号	椭 圆 形	1.15	0.9	58	
99号	円 形	1.2	1.15	40		138号	不整円形	1.15	(1.15)	52	平石
100号	長 方 形	2.95	2.7	34		139号	長 方 形	2.25	2.1	35	pit 2
101号	椭 圆 形	1.1	0.9	56	石 1	140号					
102号	椭 圆 形	1.45	1.2	50		141号	不 整 形	1.6	1.2	33	
103号	円 形	1.2	1.15	59.5		142号	円 形	1.35	(1.35)	52	
104号	椭 圆 形	1.4	1.05	30	pit 1、石	143号	(椭圆形)	(1.2)	1.0	35	
105号	不整円形	1.2	1.0	41.5		144号	椭 圆 形	1.1	1.0	35	石
106号	椭 圆 形	1.05	0.8	25		145号	円 形	1.2	1.1	21.5	pit 1
107号	円 形	1.4	1.3	82.5		146号	不 整 形	1.95	0.8	32	
108号	椭 圆 形	1.75	1.2	47		147号	円 形	1.3	(1.3)	64.5	
109号	椭 圆 形	1.5	1.0	43		148号	椭 圆 形	1.2	1.05	42	
110号	椭 圆 形	(1.1)	0.9	36		149号	(椭圆形)	(1.2)	(0.8)	83	
111号	(椭圆形)			50		150号		1.1		55	

土地No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	そ の 他	土地No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	そ の 他
151号	椭円形	1.3	1.15			190号		0.7		18	
152号	椭円形	(1.25)	1.1	35		191号	円 形	1.3	1.25	41	
153号	(円 形)	1.05	(1.05)	33		192号	円 形	1.4	1.4	77	
154号	円 形	1.3	1.2	92		193号	椭円形	1.3	1.2	36	
155号	椭円形	1.05	0.9	60		194号	(椭円形)	(1.2)	(1.05)	34.5	
156号		1.05		50		195号	(円 形)	(1.25)	(1.2)	60	
157号	椭円形	(1.15)	0.9			196号	椭円形	1.4	1.15	57	
158号	長方形	1.35	0.65	24		197号	椭円形	1.4	1.1	41	
159号	椭円形	1.3	0.8	36		198号		1.25		40	
160号	椭円形	1.35	0.8	55		199号	円 形	1.25	1.2	58	
161号	椭円形	1.2	0.9	44		200号	円 形	1.05	1.0	54.5	
162号	椭円形	1.9	0.2	26	石	201号	(椭円形)	(0.95)	0.75	31	
163号	長方形	0.9	0.8	29	pit 2	202号	椭円形	1.55	1.4	46	
164号	椭円形	1.0	0.85	23		203号	円 形	1.15	1.15	100	
165号	円 形	1.35	1.3	32		204号		1.15		60	プラスコ型
166号	円 形	1.3	1.3	43		205号		1.4		40	
167号	椭円形	1.25	1.1	22.5		206号	円 形	1.4	1.3	20	
168号	不整円形	1.3	1.1	30	pit 1	207号	椭円形	(1.1)	0.95	26	
169号	椭円形	1.2	1.1	27.5		208号	円 形	1.2	1.2	57.5	
170号	椭円形	2.65	1.15	20	pit 2	209号	円 形	1.4	1.4	33.5	
171号	椭円形	1.5	1.25	46		210号	椭円形	(1.2)	1.15	46.5	
172号	円 形	1.15	(1.15)	20		211号	(円 形)	1.0	(1.0)		
173号	円 形	1.4	1.3	50	石	212号				3	
174号	椭円形	1.35	1.2	54		213号	椭円形	(1.45)	(1.15)	38	
175号	(椭円形)	(2.6)	0.95	36.5		214号	椭円形	1.6	1.15	37	
176号	円 形	0.95	0.9	64		215号	円 形	1.2	(1.2)	43	
177号	長方形	1.4	1.1	25		216号	椭円形	1.4	0.85	28	
178号	椭円形	1.0	0.7			217号	椭円形	1.4	1.25	77.5	
179号	長方形	1.8	1.2	30		218号	椭円形	1.75	1.5	27	
180号	長方形	1.7	1.5	55		219号	椭円形	(1.65)	(1.05)	20	
181号	円 形	1.1	1.1	59		220号	長方形	1.45	1.15	73	
182号	長方形	1.05	0.85	49		221号	隅門方形	0.85	1.0	37	
183号	長方形	1.1	1.0	29		222号	椭円形	1.5	(0.8)	51.5	
184号	円 形	1.25	1.25	24		223号	円 形	1.1	1.15	34	
185号	椭円形	(1.45)	1.1	42		224号	椭円形	1.2	0.7	52	
186号	椭円形	1.4	1.25	74		225号	長方形	1.2	0.7	44.5	
187号		1.1		70	プラスコ型	226号	長方形	1.45	0.9	49	
188号	円 形	1.35	1.3	47.5		227号	不整円形	1.6	1.55	40	
189号	椭円形	(1.25)	1.1	66		228号	長方形	1.65	1.05	33.5	

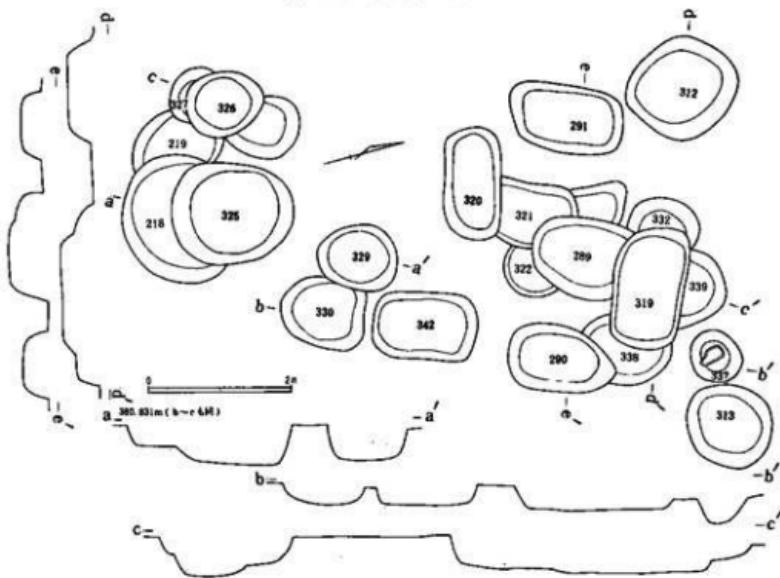
土塁No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	その 他	土塁No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	その 他
229号	円 形	1.75	1.65	41		268号	椭 圆 形	1.05	0.6	22	
230号	椭 圆 形	1.4	0.9	53		269号	椭 圆 形	(2.1)	(0.35)	7	
231号	椭 圆 形	(1.35)	(1.05)	28.5		270号	椭 圆 形	0.85	0.7	47	
232号	椭 圆 形	(1.25)	(0.8)	27		271号		1.3		60	
233号	円 形	1.25	1.25	5.5	石 1	272号	椭 圆 形	1.15	1.05	40	
234号	円 形	1.0	1.0	25		273号	椭 圆 形	1.15	0.7	30	
235号	(円 形)	1.25	(1.25)	48		274号	長 方 形	(1.2)	(0.55)	35	
236号	(円 形)	1.25	(1.25)	58.5		275号	(椭圆形)	(0.95)	0.75	25	
237号	(椭圆形)	(0.1)	(0.9)	11		276号	(椭圆形)	(0.9)	(0.7)	24	
238号	円 形	(1.05)	1.05	11		277号	(椭圆形)	(0.85)	(0.65)	57.5	
239号				35		278号	(椭圆形)	(1.0)	0.7	11	pit 1
240号		1.0		36		279号		0.85		20	
241号		1.1		37		280号	円 形	0.7	0.7	27	
242号	椭 圆 形	1.25	0.85	89.5		281号	椭 圆 形	1.75	(1.1)	38.5	
243号	(椭圆形)	(0.85)	(0.6)	27		282号	円 形	1.35	1.25	14.5	
244号	椭 圆 形	1.4	0.9	51		283号	不整圓形	1.2	(0.8)	32	
245号	椭 圆 形	1.5	0.95	44		284号	長 方 形	1.6	1.1	40	
246号	不 整 形	1.6	0.7	29		285号	長 方 形	1.25	0.95	40	
247号	椭 圆 形	1.35	0.95	52		286号	不整圓形	1.4	1.1	70	
248号	不整圓形	1.4	1.0	55		287号		1.0		80	
249号	椭 圆 形	1.0	0.8	40		288号		(1.1)	(0.6)	37.5	
250号	椭 圆 形	1.35	1.0	58		289号	椭 圆 形	(1.6)	1.15	52.5	
251号	椭 圆 形	(1.5)	(1.15)	45.5		290号	椭 圆 形	1.5	0.9	30.5	
252号	長 方 形	1.5	1.0	51		291号	長 方 形	1.55	0.9	32.5	
253号	椭 圆 形	(1.2)	0.8	30		292号	椭 圆 形	(1.4)	(0.9)	18.5	
254号	椭 圆 形	0.9	0.9	22		293号		1.2		40	
255号	円 形	1.25	1.25	81		294号	椭 圆 形	1.2	0.8	35	
256号	椭 圆 形	1.65	1.05	58.5		295号	不整圓形	(1.3)	0.75	22.5	
257号	円 形	0.75	0.8	40.5		296号	椭 圆 形	0.95	0.6	20	
258号	円 形	1.35	1.35	45		297号	椭 圆 形	0.85	(0.65)	26	
259号	円 形	1.2	1.15	29		298号	椭 圆 形	1.0	0.65	43	
260号	椭 圆 形	2.05	0.8	50		299号	椭 圆 形	(1.5)	0.85	32.5	
261号	長 方 形	1.15	0.7	30		300号	円 形	0.95	0.95	31	
262号	椭 圆 形	1.65	1.3	31		301号	椭 圆 形	1.85	(1.2)	14	pit 1
263号	(長方形)	2.0	(1.1)	27.5		302号	長 方 形	1.15	0.65	18	pit 2
264号	長 方 形	(0.10)	(0.6)	52		303号	(椭圆形)	1.0	0.55	12	
265号	椭 圆 形	1.5	1.15	24.5		304号	長 方 形	1.0	0.75	19	pit 1
266号	椭 圆 形	1.35	0.75	62		305号	円 形	0.65	0.65	38.5	石 1
267号	(椭圆形)	(0.8)	0.65	2		306号	(椭圆形)	(1.6)	0.85	15	平石

土地No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	そ の 他	土地No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	そ の 他
307号	橢円形	1.4	1.15	35		346号	円 形	1.1	1.05	52	
308号	長方形	1.7	1.1	24.5		347号	円 形	1.25	1.15	58	
309号	不整円形	(1.0)	0.9	20		348号		1.3		37	
310号	橢円形	0.85	0.6	15		349号		0.7		25	
311号	不整円形	(1.1)	(0.85)	10		350号	円 形	1.55	1.5	69.5	
312号	隅円方形	1.4	1.3	31.5		351号		(1.05)		57	
313号	円 形	1.2	1.15	37		352号	不整円形	(1.25)	1.05	48.5	
314号	橢円形	1.0	(0.65)	20		353号		1.2		37	
315号	(橢円形)	(0.75)	1.4	120		354号		0.85		42	
316号	橢円形	(1.45)	(0.95)	69		355号	橢円形	1.0	0.85	27.5	石
317号	円 形	1.05	1.1	41		356号	橢円形	1.25	0.9	28.5	
318号	橢円形	1.5	1.35	61		357号	橢円形	1.15	0.9	46	石
319号	長方形	1.7	1.0	47		358号	(橢円形)	1.05	0.85	32	石
320号	長方形	1.55	0.8	47		359号	橢円形	(1.6)	1.0	54	
321号	長方形	(1.5)	0.9	38.5		360号	(橢円形)	0.95	0.85	25	
322号	橢円形	(0.85)	(0.75)	29		361号	円 形	0.7	0.65	24	
323号		0.7		40		362号	円 形	1.1	1.15	62	
324号		1.4		30		363号	橢円形	1.8	1.55	22.5	
325号	橢円形	1.7	1.3	57.9		364号	橢円形	2.05	1.4	51	石 4
326号	橢円形	1.05	0.9	56		365号	(円 形)	1.05	1.05	27	
327号	橢円形	0.85	(0.6)	27		366号	円 形	1.45	1.35	102	
328号	橢円形	1.4	1.15	22		367号	橢円形	1.3	1.15	28.5	
329号	橢円形	1.15	0.95	42		368号	長方形	1.45	1.0	66	
330号	不整円形	(1.15)	0.95	30		369号	円 形	1.05	1.1	43	
331号	橢円形	1.5	1.3	21		370号	橢円形	1.25	1.05	56	
332号	(橢円形)	1.0	(0.8)	22		371号	橢円形	1.4	0.9	44	
333号	長方形	1.2	0.9	58		372号	円 形	1.0	1.1	26.5	
334号	長方形	1.15	0.8	34		373号	橢円形	2.25	1.5	66	石
335号	長方形	1.25	0.85	26		374号	円 形	1.3	1.3	52.5	
336号	橢円形	1.35	1.2	19.5		375号	不整形	3.3	1.95	16.5	
337号	円 形	0.7	0.7		平石	376号	長方形	1.75	1.20	62.5	
338号	橢円形	1.3	1.0	26		377号	長方形	1.15	0.85	50	
339号	(橢円形)	(1.35)	(1.1)	12		378号	長方形	1.5	1.2	35	
340号	不整円形	1.65	1.6	19		379号	橢円形	2.0	0.9	60	
341号	橢円形	1.15	0.85	29		380号	円 形	0.95	0.95	29.5	
342号	長方形	1.45	0.9	28		381号	橢円形	1.15	1.0	18	
343号		0.6		51	フジコ型	382号	橢円形	1.1	0.9	20.5	
344号		0.85		30		383号	橢円形	1.95	1.2	30.5	
345号	円 形	1.1	1.1	44		384号	橢円形	1.25	0.8	37	

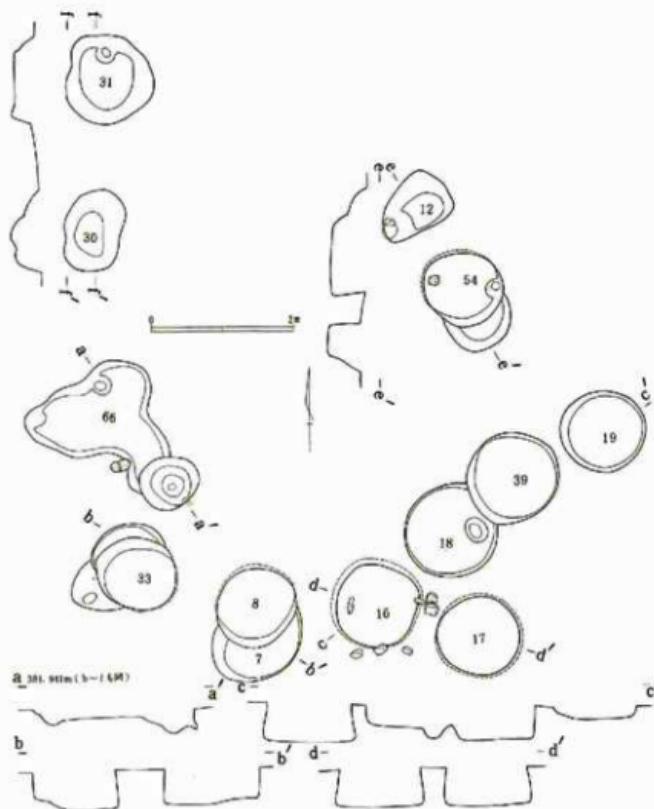
土壌No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	そ の 他	土壌No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	そ の 他
385号	不整円形	1.3	1.15	48		388号	椭 圆 形	1.7	1.1	49	
386号	円 形	1.0	0.95	20	石	389号	不整円形	1.5	1.2	92.5	
387	椭 圆 形	1.2	1.0	27.5	石						



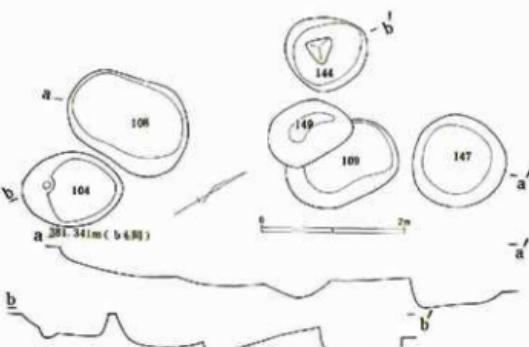
第91図 土壌群 その1



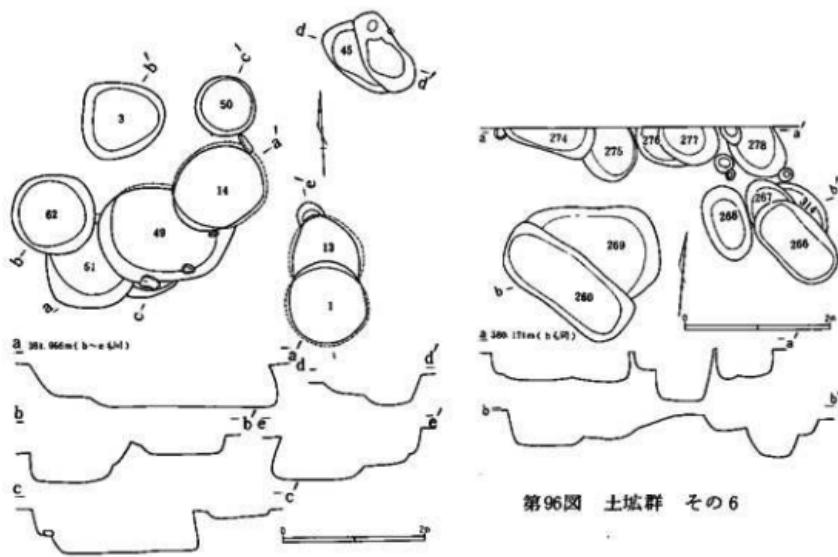
第92図 土壌群 その2



第93図 土壌群 その3

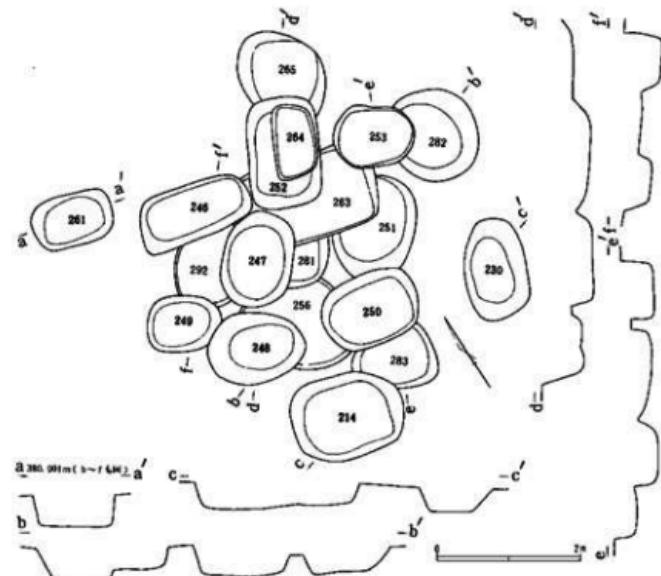


第94図 土壌群 その4

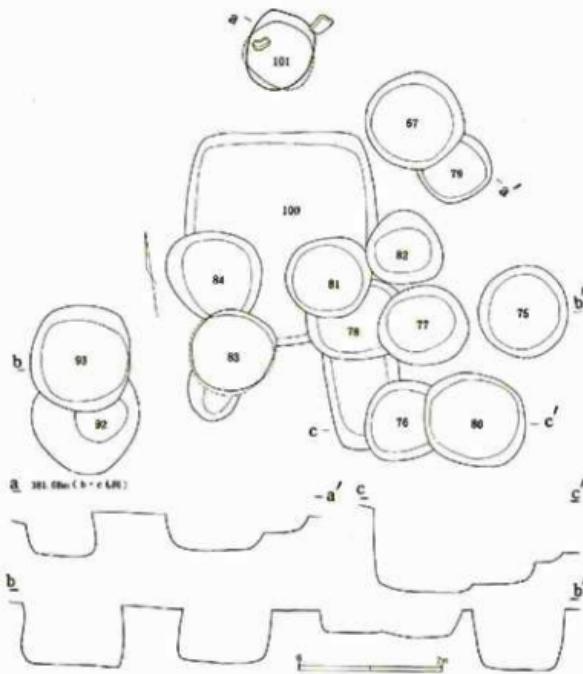


第95図 土壌群 その5

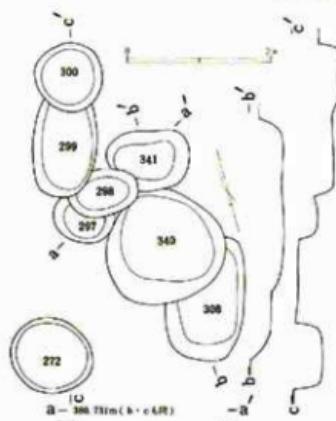
第96図 土壌群 その6



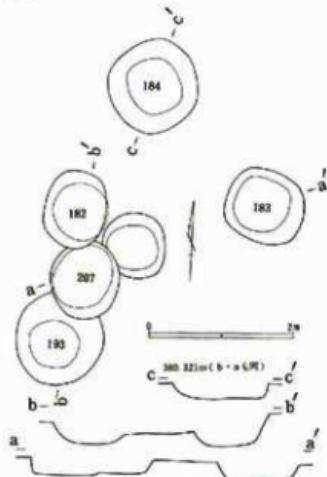
第97図 土壌群 その7



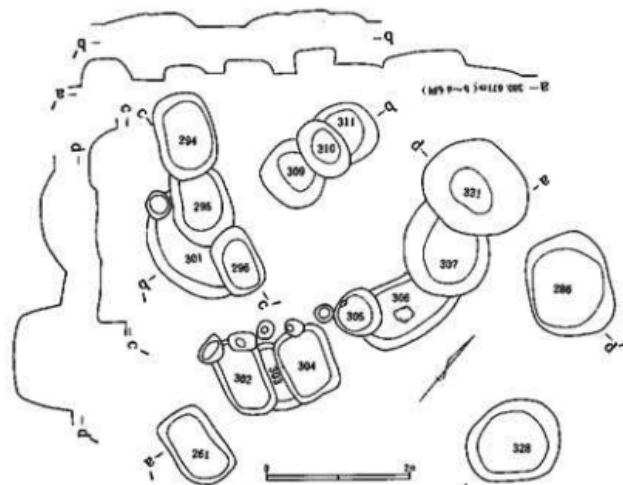
第98図 土塙群 その8



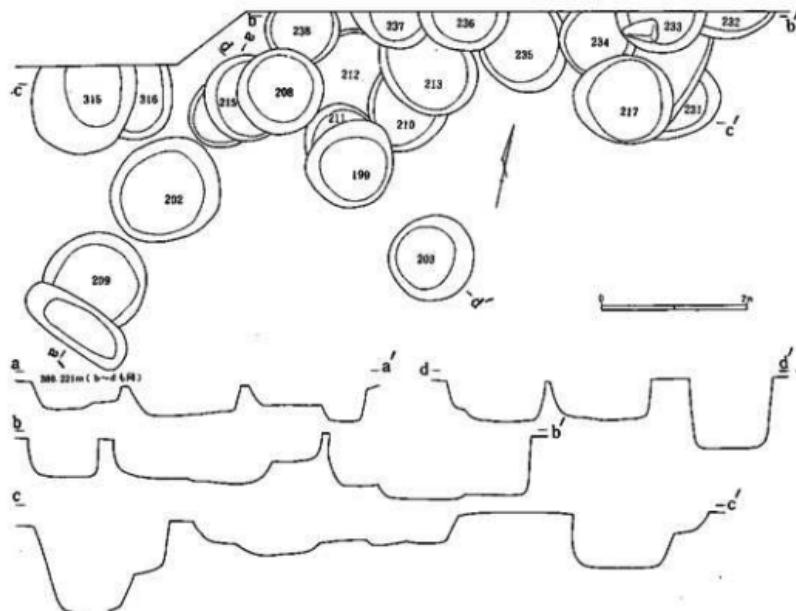
第99図 土塙群 その9



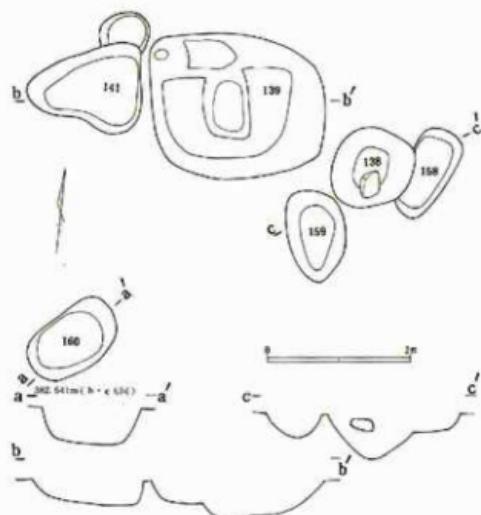
第100図 土塙群 その10



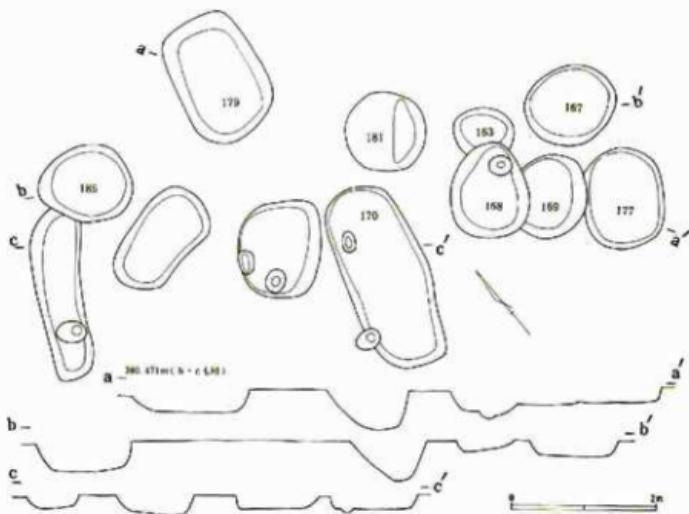
第 101 図 土域群 その11



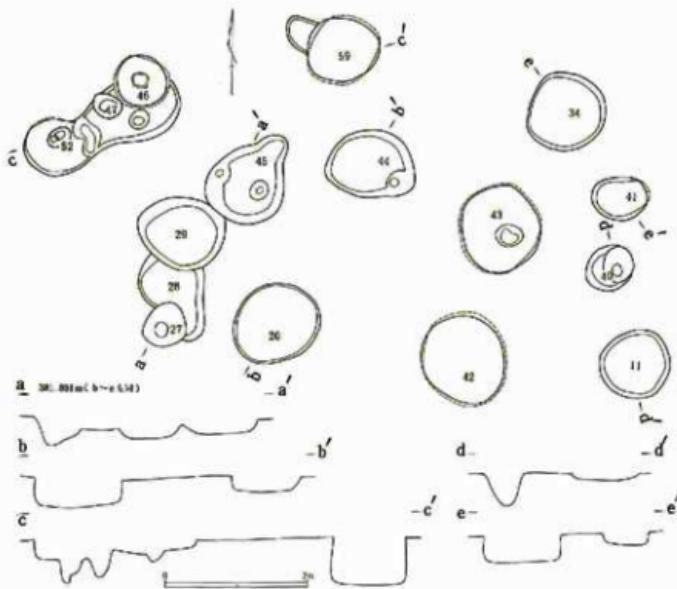
第102図 土壌群 その12



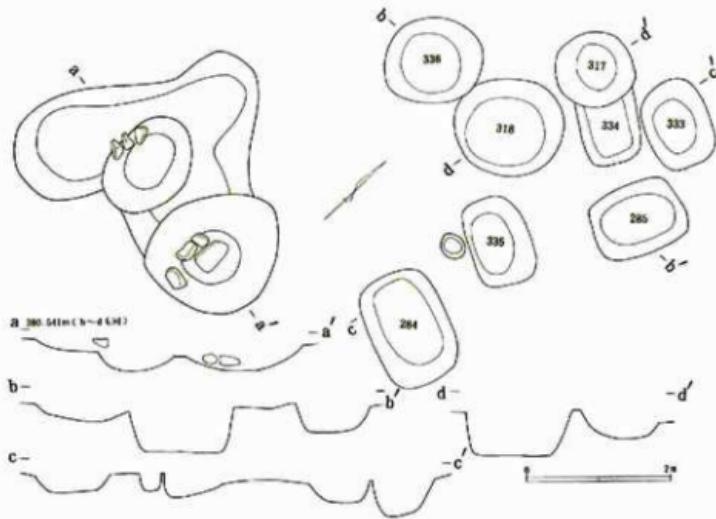
第103図 土壌群 その13



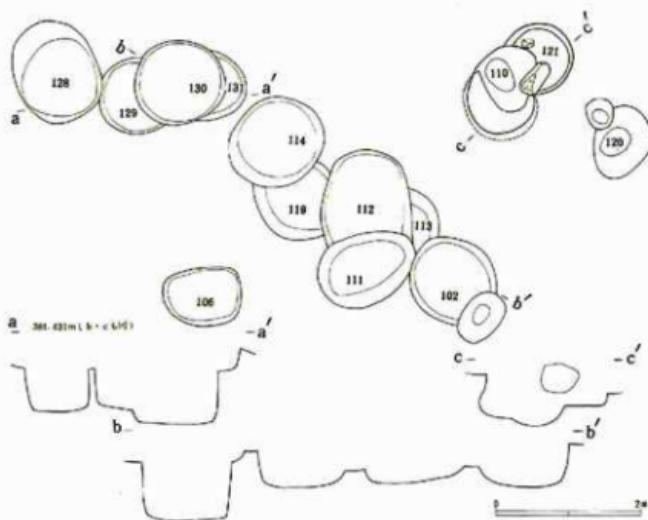
第104図 土壌群 その14



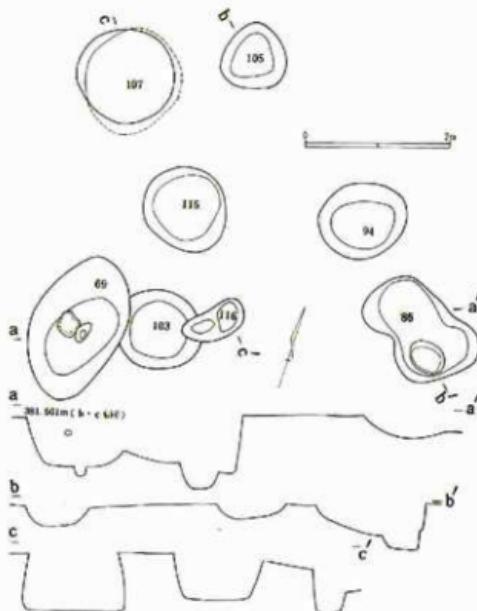
第105図 土塙群 その15



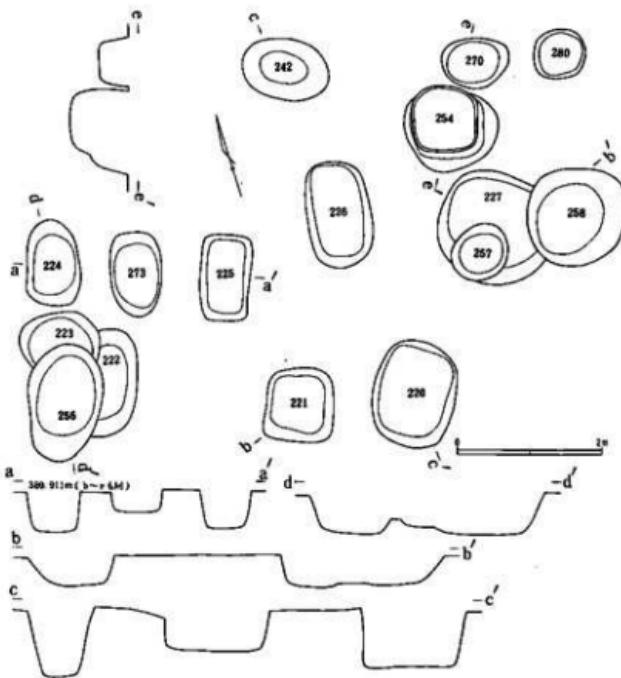
第106図 土塙群 その16



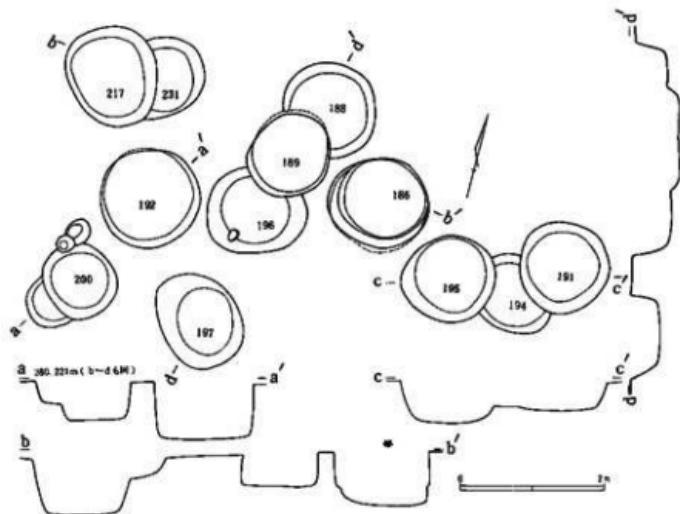
第107図 土塙群 その17



第108図 土塙群 その18



第109図 土塙群 その19

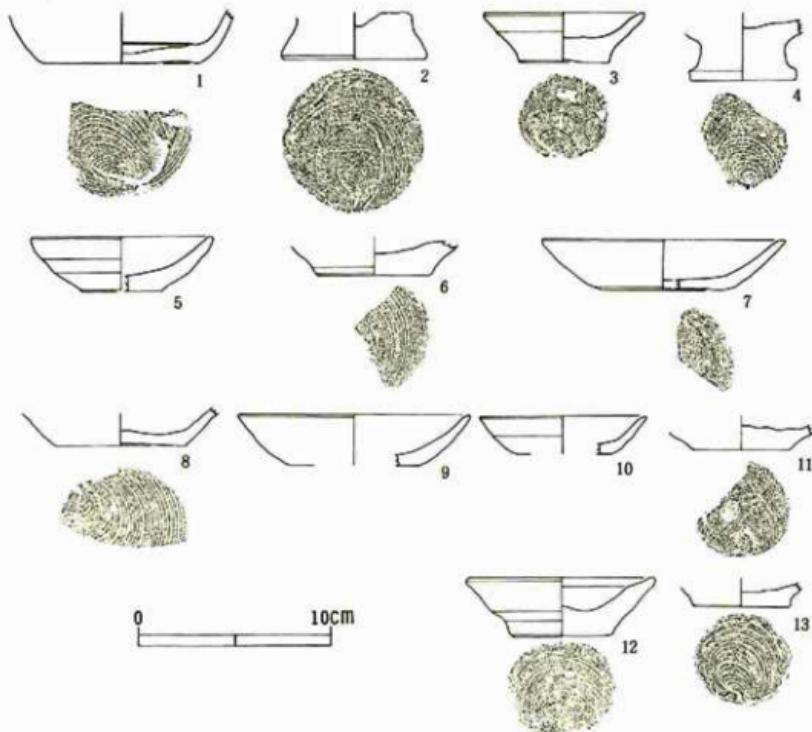


第110図 土塙群 その20

土器

ここでは、12点の土器を報告するが、これらはいずれも土塙覆土からの出土であり、土器の年代と土塙の年代とにズレが生ずる可能性が高いことを記しておく。

1. 16号土塙出土。壺。内外面横ナデ、底部は糸切り。整形は丁寧で器厚も薄い。胎土は精選されており、赤色粒子も含まない。焼成も良好で、明褐色を呈する。2. 出土土塙不明。台付壺台部。底径 7.2 cm、底部は糸切り。胎土は精選されており、赤色粒子を含む。焼成も良好で、明褐色を呈する。3. 126号土塙出土。皿。器高 2.5 cm、底径 4.6 cm。内外面横ナデ、底部は糸切り。胎土、焼成は 2 に同じ。褐色を呈する。4. 134号土塙出土。台付皿台部。整形、胎土、焼成は 2 に同じ。褐色を呈する。5. 204号土塙出土。皿。器高 2.8 cm。整形、胎土、焼成、色調とも 4 に同じ。6. 216号土塙出土。壺。整形、胎土、焼成は 2 に同じ。茶褐色を呈する。7. 242号土塙出土。壺。器高 2.8 cm。内外面横ナデ、底部は糸切り。底部屈曲部にヘラ削りを施す。極めて丁寧なつくりで、器厚も薄い。胎土は精選され、焼成も良好で、明褐色を呈する。8. 247号土塙出土。壺。整形は 1 に同じ。これも薄いつくりである。



第 111 図 土塙出土土器

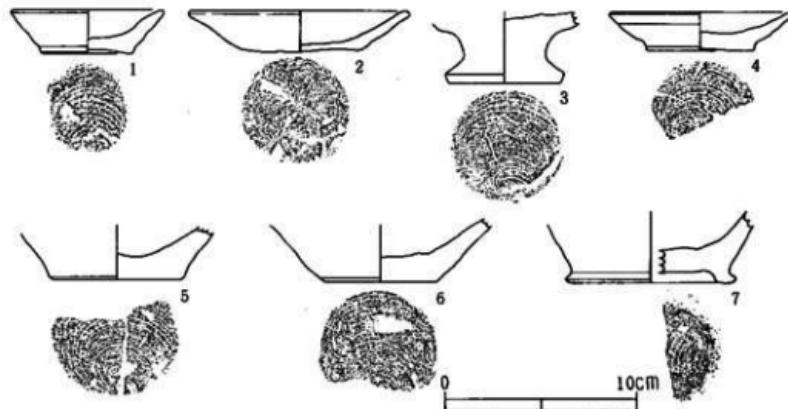
胎土には赤色粒子を含み、焼成は良好で、灰褐色を呈する。 9. 247号土塙出土。壺。器高2.6cm。薄いつくりで、丁寧に仕上げられている。胎土は精選され、赤色粒子は含まない。焼成も良好である。黄褐色を呈する。 10. 266号土塙出土。皿。器高2cm。やはり器厚が薄く、丁寧なつくりである。胎土、焼成、色調とも9と同じ。 11. 出土土塙不明。皿。整形、胎土、焼成は2と同じ。褐色を呈する。 12. 380号土塙出土。皿。口径9.4cm、器高3.1cm、底径5cmを測る。整形、胎土、焼成は2と同じ。暗褐色を呈する。 13. 383号土塙出土。皿。底径4.8cm。整形、胎土、焼成は2と同じ。褐色を呈する。

以上が土塙内出土土器であるが、このうち2～6、11～13は、本遺跡の住居址から出土する土器と同じ整形、胎土であるが、1、7～10は、これらと質感が違う。大きな特徴としては、いずれも器厚が薄いことが上げられる。また、つくりも丁寧である。掘立柱建物址柱穴内出土土器が、これに極めて類似する。中世に位置づけられる可能性がある。

3. 川 跡

調査区東側で南北方向に走る川跡と思われる砂層が確認された。（第2図全体図）幅約7m、深さ0.4mを測り、1cm～30cm大の礫が多く混じっている。傾斜から、南から北へ流れた小河川である。

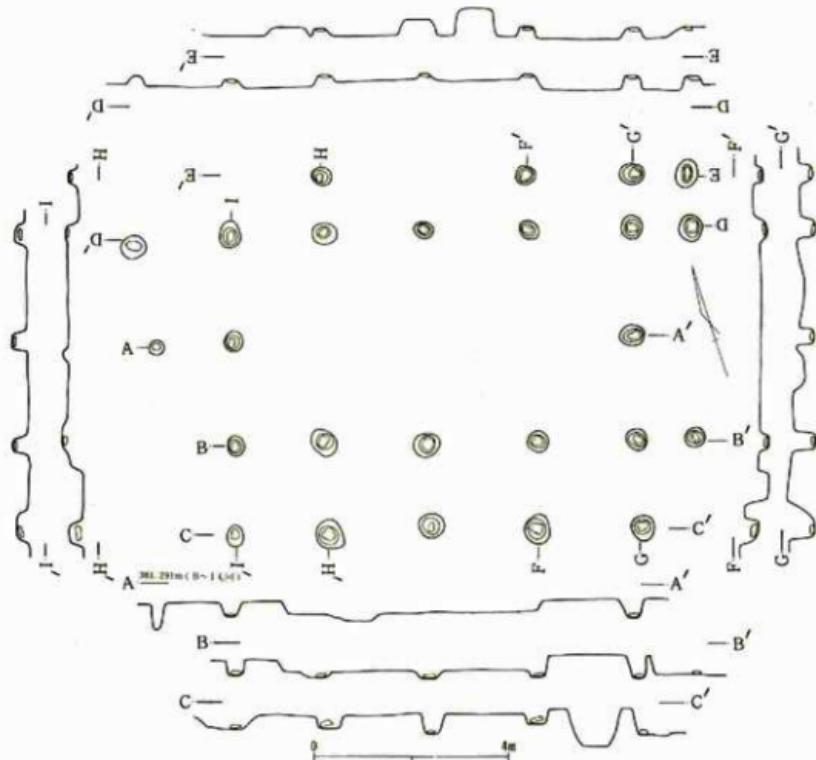
この川跡より、住居群と同時期の土器が多く出土しており、復元できたものは図に示した7点である。1～6は土師質土器で、いずれも内外面横ナデ、底部は糸切りである。8は須恵器壺で、ロクロ整形、下半は回転ヘラ削り、台部は貼り付け高台である。これらに磨滅はみられず、流されたものとは考えにくい。おそらく、集落の営まれていた時にこの小河川は存在しており、生活に密着していたものと思われる。川跡内出土の土器は、使用中に流れたものか、あるいは廃棄されたものであろう。



第112図 川跡出土土器

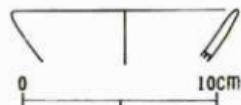
第5節 中世・近世

1. 挖立柱建物址



第113図 掘立柱建物址平面図

13号住居址の真上に構築されている。13号住居址のカマドを切っていることからも、本遺構が13号住居址より新しい時期の所産であることは疑いない。後述するように、13号住居址出土遺物の年代は12世紀代に位置づけられている。従って、本遺構の構築時期は、12世紀代以降となり、鎌倉時代あるいはそれ以後とも考えられる。柱穴からは4点の土器が出土しており、うち3点は繩文土器で、これは割愛する。残り1点は図中のH-H', E-E'ライン交点の柱穴出土で、口縁部破片である。横ナデ整形で削りはみられず、胎土にはわずかに、砂粒、赤色粒子を含んでいる。器厚は薄く、現存部で4mmを測る。焼成も良好で丁寧なつくりである。整形などから、平安時代末以降に位置づけられ、この資料が本遺構に伴うものか否か、判断に迷うところであるが、住居址の切り合いなども考慮すれば、伴出遺物とすることも可能であろう。



第114図 柱穴内出土土器

建物は、東西4間、南北3間で、柱穴内に置かれた平石の中心での柱穴間は2.0mを測る。なお、東側及び北側には約0.5間（柱穴間1m～1.1m）の廊下あるいは庇と思われる柱穴列が確認されており、やはり平石が敷かれている。

一般に建物址の場合、周縁部のみに柱穴列がみられる（図中のC-C'、G-G'、D-D'、I-I'）のが普通であるが、本遺構においては、さらに1列（B-B'）の柱穴列がみられるのが特徴である。あるいは、東西4間、南北2間の建物で、南側の柱穴列（C-C'）も付属物である可能性も考えられるが、ここでは一応、南北3間としておきたい。

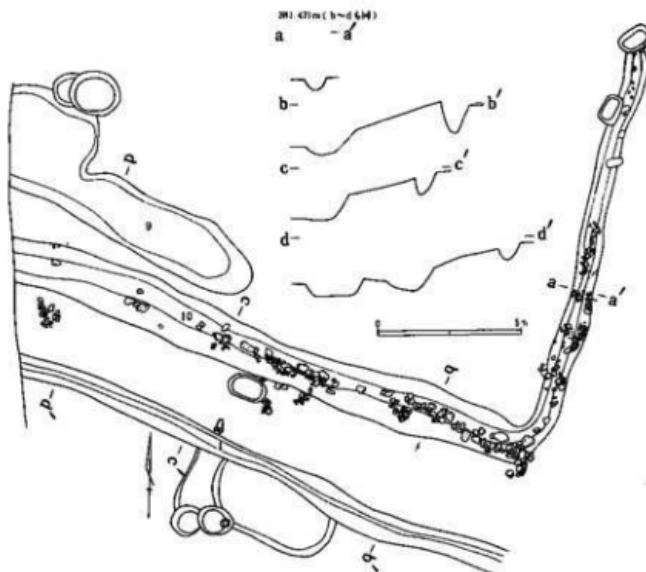
柱穴は円形を呈し、直径30cm～50cm、深さ50cm以内である。すべての柱穴に20cm程度の平石が敷かれている。

2. 溝

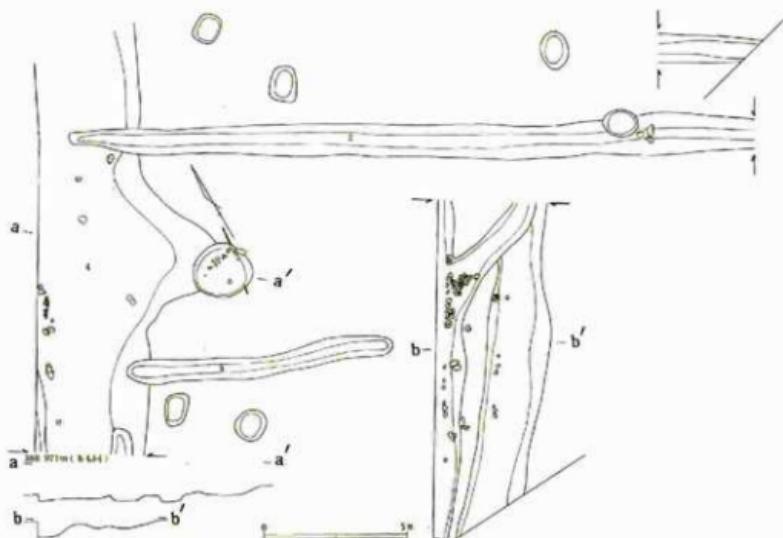
本遺跡では10本の溝が確認された。道路等により分断されているため、名称は1号溝から13号溝までとなっている。このうち、1号溝と5号溝、4号溝と6号溝、7号溝と9号溝はそれ同一の溝である。11号～13号溝が遺跡東端に位置する他は、すべて調査区西側にみられる。以下に各溝の概要を記す。

○1号溝（5号溝）

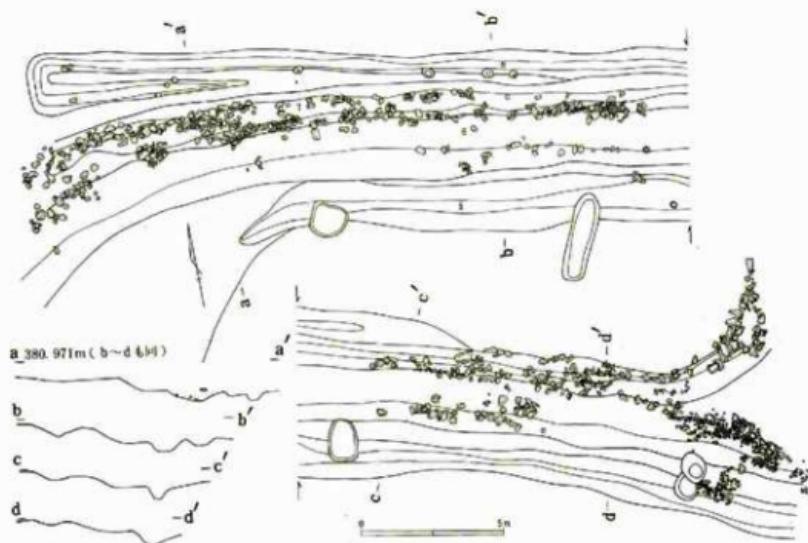
南東から北西に延びる真直ぐな溝で、溝東端は不明である。幅0.5m～1.5m、深さ0.4m～1.0mを測る。確認部分の総延長51mを測る。



第115図 1号・9号・10号溝平面図



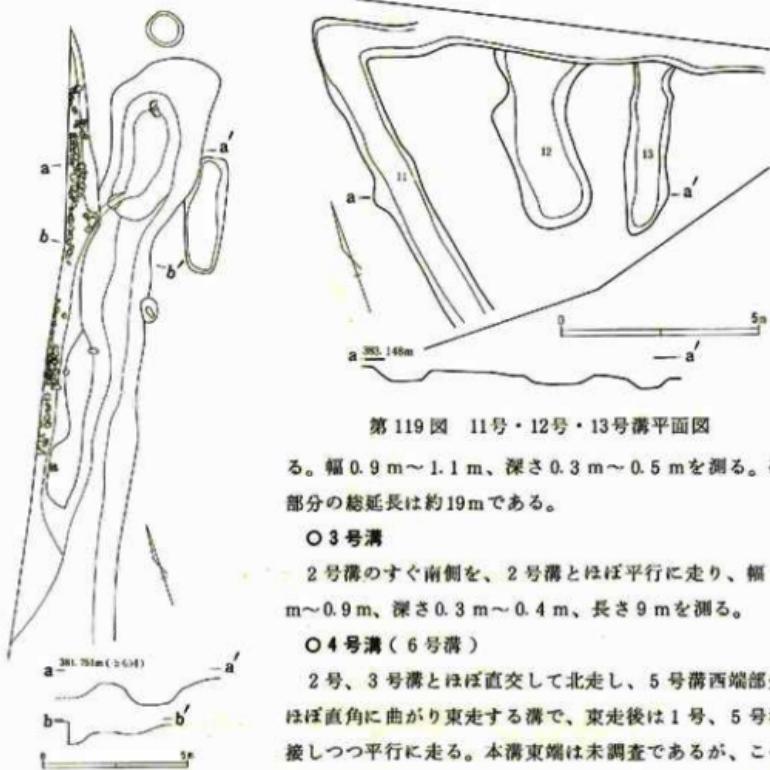
第116図 2号・3号・4号溝平面図



第117図 5号・6号・7号・8号溝平面図

○2号溝

1号溝の南側約30mを、1号溝とはほぼ平行に走る溝で、調査区域外に延びることは確実であ



第118図 4号溝平面図

は、池状の水溜め遺構が付く。第118図に示したが、本溝に接して、幅2m、長さ4.5m、深さ0.9mの橢円形を呈する掘り込みが検出された。掘り込みの壁の立ち上がりは弱く、石積みは全くみられなかった。この掘り込みと溝とは幅0.2m、長さ1mのトンネルで結ばれるが、水の出入口はこれ1ヶ所だけである。

○7号溝(9号溝)

6号溝のすぐ北側を平行して走る溝で、西端は不明、また東側では未調査部分で膨らみをもち、再び1号、10号溝と平行して走ることとなる。幅0.5m~2m、深さ0.3m~0.5m、確認部分の総延長約50mを測る。

○10号溝

1号溝のすぐ北に位置し、1号溝と平行していたものが直角に曲がり北走することになる。北に行くほど幅が狭くなっている。なお溝西端は不明。幅0.7m~1.8m、深さ0.3m~1.0m、確認部分の総延長約33mを測る。

第119図 11号・12号・13号溝平面図

る。幅0.9m~1.1m、深さ0.3m~0.5mを測る。確認部分の総延長は約19mである。

○3号溝

2号溝のすぐ南側を、2号溝とはほぼ平行に走り、幅0.6m~0.9m、深さ0.3m~0.4m、長さ9mを測る。

○4号溝(6号溝)

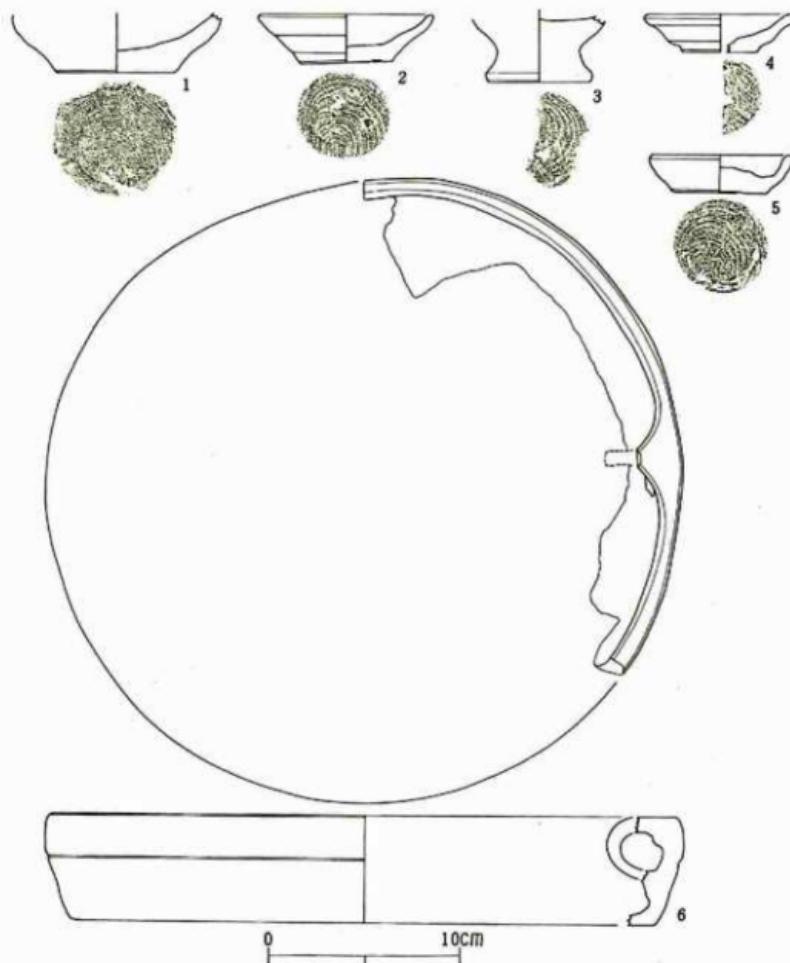
2号、3号溝とはほぼ直交して北走し、5号溝西端部分でほぼ直角に曲がり東走する溝で、東走後は1号、5号溝と接しつつ平行に走る。本溝東端は未調査であるが、この部分で終結するものと思われる。幅2m~4m、深さ0.5m~0.8m、確認部分の総延長約90mを測る。なお、本溝に

○11号～13号溝

調査区東端に確認された溝で、11号溝は北走したあと鋭角に東へ曲がっており、幅0.9m～1.1m、深さ0.3m、確認部分の長さ10mを測る。12号溝は極く一部の調査にすぎない。幅1.8m、深さ0.2m、長さ4.5mを測る。13号溝も12号溝同様極く一部の調査である。幅1m、深さ0.2m、長さ4.5mを測る。

土器

1. 2号溝出土。坏。 2. 3号溝出土。皿。口径8.8cm、器高2.5cm、底径4.8cmを測る。



第120図 1号～10号溝出土土器

3. 4号溝出土。台付皿。4. 6号溝出土。皿。器高2cm。5. 10号溝出土。皿。口径7cm、器高2cm、底径4.8cmを測る。1~5は、いずれも内外面横ナデ、底部は糸切り。1~3は本遺跡の住居址出土の土師質土器と同様の胎土であるが、4・5は薄手ではないものの、これらと質感が違い、さらに新しく位置づけられるものであろう。6. 1号溝出土。内耳鍋。推定口径32cm。器高5.6cm。内耳部欠損。内外面横ナデ、胎土は精選され、丁寧なつくりである。中世に位置づけられる。

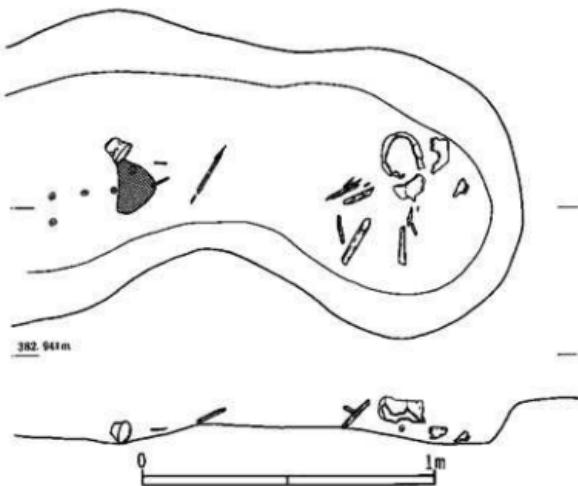
以上、出土土器の概要を示したが、平安時代末~中世にかけての土器が出土している。ただ、これらも覆土からの出土であるため、この年代が溝の年代と同一であるとは限らない。

3. 墓 塚

本調査区中央部分 549 + 60 ~ 550 + 27にかけての地域には、浄土宗の寺院である長寿院が存在しており、一部、その墓地が調査区域内にかかっていた。調査再開前に、すでに重機による墓地の移転作業が行われており、そのため、墓地部分の調査を行うことはできず、確認された近世墓塚は5基にすぎない。しかし他にも、グリッドから遺構確認作業中に多くの古銭が出土しており、さらに多くの墓塚が存在したことは確実である。

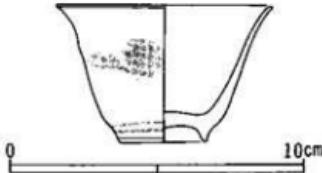
○ 1号墓塚

549 + 95 N2 グリッド。
椭円形の掘り込みをもち、
推定長径2m、短径0.7m
~ 0.9m、確認面からの
深さ0.1m~0.2mを測
る。細長い掘り込みで、
人骨は1体だけの確認で
あるため、伸展葬と考え
られるが、人骨が片寄っ
ており、2基の墓塚の可
能性もある。内部からは
人骨のはか、陶器1点、
キセル吸口1点、ガラス
玉120個、古銭12枚が出
土している。古銭はすべて

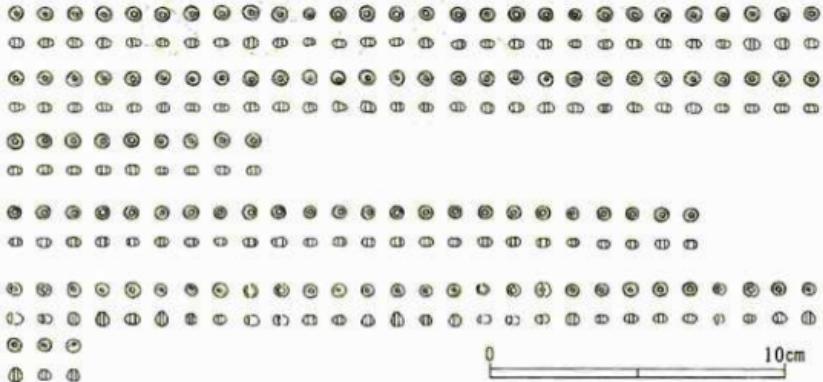


第121図 1号墓塚平面図

寛永通宝である。また、陶器は横倒しになり、その部分
にガラス玉が散乱していたことから、ガラス玉は、陶器
内に納められていたと思われる。陶器は、伊万里染付小
壺で、コンニャク判と呼ばれる印刷法で装飾されており、
1690年代~1750年代に位置づけられる。口径7.3cm、器
高4.5cm、底径2.9cmを測る。



第122図 1号墓塚出土陶器



第 123 図 1 号墓塚出土ガラス玉



第 124 図 1 号墓塚出土古銭

○ 2 号墓塚

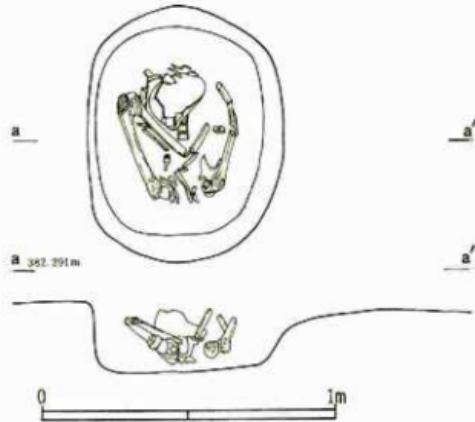
550 +03N3 グリッド。円形の掘り込みで、径 80 cm、確認面からの深さ 15 cm を測る。内部からは骨片が出土しているだけで、副葬品は一切ない。掘り込みから座棺埋葬と思われる。

○ 3 号墓塚

549+87S1 グリッド。梢円形の掘り込みで、長径 90 cm、短径 65 cm、確認面からの深さ 25 cm を測る。座棺埋葬で、遺存状態は良好であった。キセル吸口 1 点、古銭 6 枚（すべて寛永通宝）が出土している。

○ 4 号墓塚

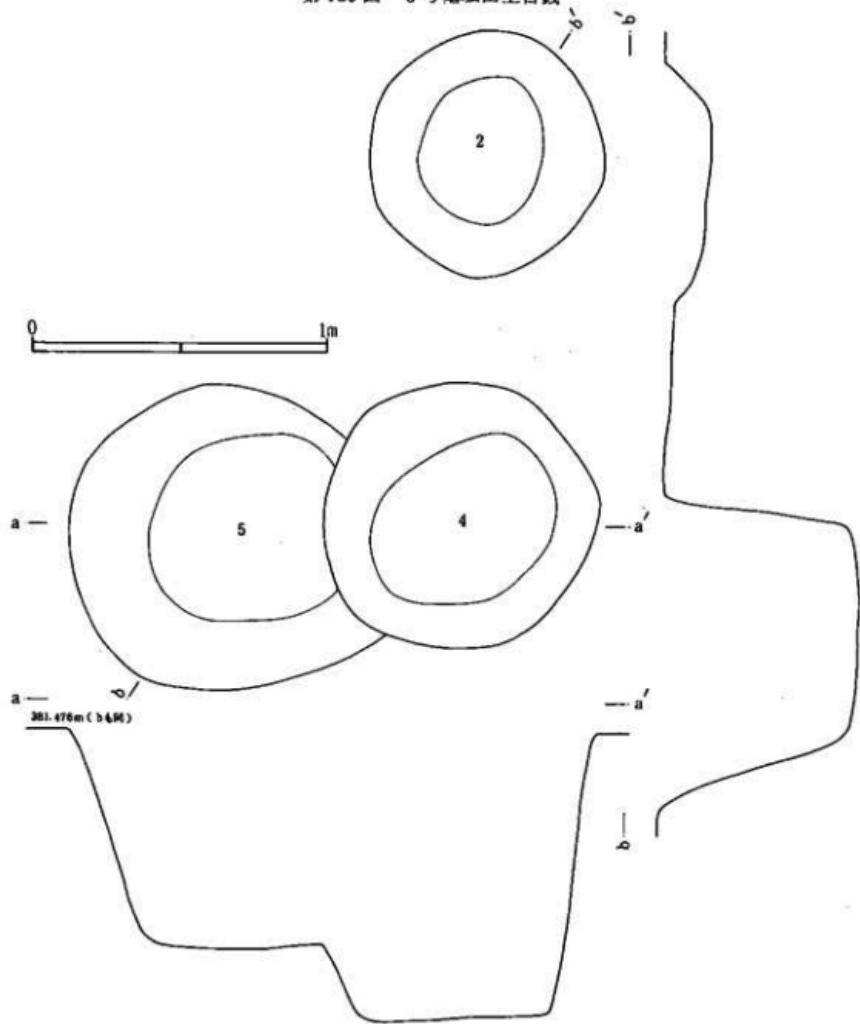
550 +03N4 グリッド。円形を呈し、径 90 cm、確認面からの掘り込みは 100



第 125 図 3 号墓塚平面図

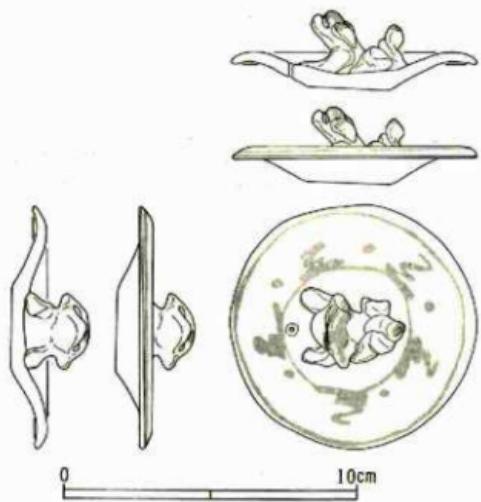


第126図 3号墓塚出土古銭

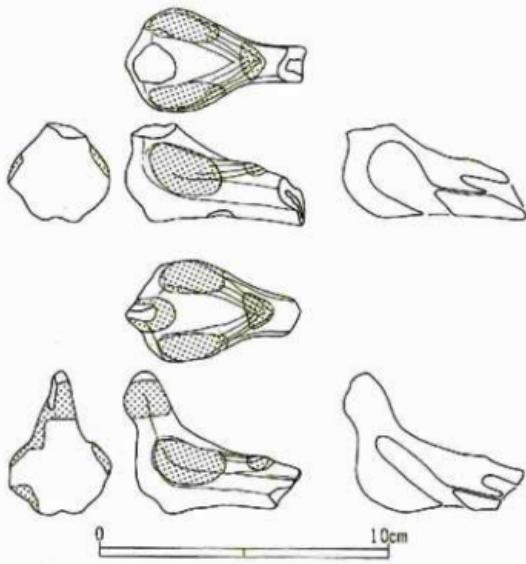


第127図 2号・4号・5号墓塚平面図

cmを測る。人骨はほとんど遺存していなかったが、副葬品が数点出土した。陶器1点、鳥形の笛2点、キセルの吸口2点、先端1点及び古銭(寛永通宝)1枚である。陶器は、瀬戸系染付



第128図 4号墓出土陶器



第129図 4号墓出土土製品

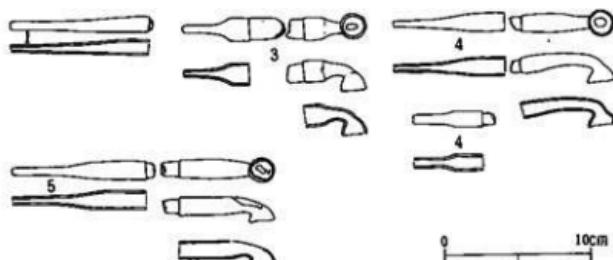
の土旗蓋で、化粧掛けがなされており、江戸時代後期以降に位置づけられる。鳥形の笛については、胎土から当地方で製作されたものと思われる。

○5号墓塚

4号墓塚に切られるかたちで存在した。梢円形を呈すると思われ、長径 110 cm、短径 100 cm、確認面からの深さ 70 cm と推定される。人骨は遺存しておらず、キセル吸口 1 点、同先端 1 点、古銭 6 枚が出土している。



第 130 図 5 号墓塚出土古銭



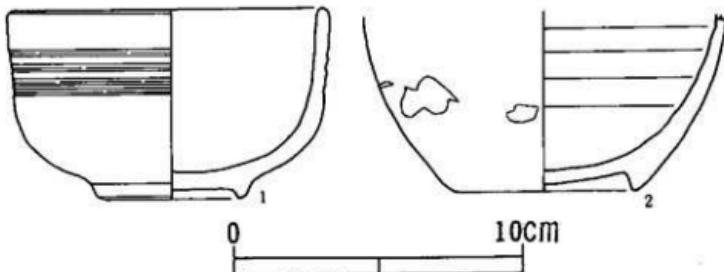
第 131 図 墓塚出土キセル

4. グリッド出土遺物

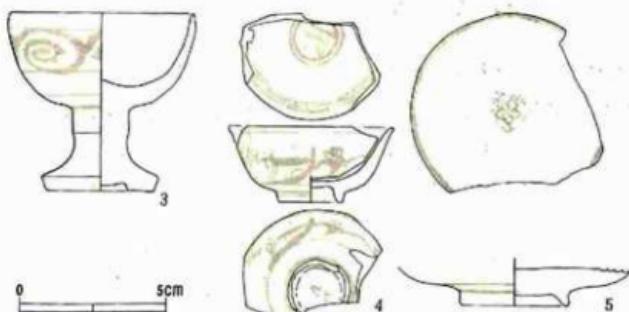
遺構確認作業中に、陶器、古銭などがまとまって出土しているが、これらは、墓塚の副葬品と思われる。

○陶器

1. 美濃碗。口径 10.5 cm、器高 6.5 cm、台部径 5 cm を測る。胴部に 4 条の沈線が巡る。ゴロ八茶碗の系統で釉薬は 2 段かけである。17世紀後半～18世紀に位置づけられる。2. 伊万



第 132 図 グリッド出土陶器 その 1



第133図 グリッド出土陶器 その2

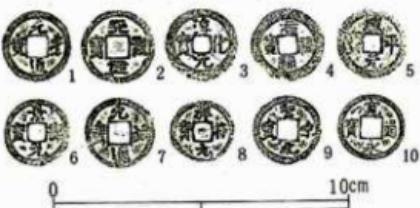
里徳利。底径6cm、現存高6.3cm。胴部に染付がみられる。17世紀に位置づけられる。3. 伊万里仏飯器。タコ唐草文染付。口径推定6.2cm、器高6.1cm、底径3.6cmを測る。18世紀代に位置づけられる。

られる。4. 九谷染付。猪口。推定口径5.6cm、器高2.6cm、底径2.1cmを測る。九谷の猪口製は新しく、近代に位置づけられる。5. 伊万里染付そば猪口底部。底径3.6cm、現存高1.3cm。見込み五弁花。18世紀後半に位置づけられる。

○古銭

寛永通宝を中心多く古銭が出土している。3枚まとめて出土したものも多く、墓壇に納められた六文銭と思われる。ここではグリッド出土の古銭の種類を示すこととする。

- | | |
|---------|------------|
| 1. 元豊通宝 | 2. 天聖元宝(篆) |
| 3. 淳化元宝 | 4. 元祐通宝(篆) |
| 5. 咸平元宝 | 6. 景德元宝 |
| 7. 元祐通宝 | 8. 祥符元宝 |
| 9. 熙寧元宝 | 10. 寛永通宝 |



第134図 グリッド出土古銭

第IV章 まとめ

1. 本遺跡出土の土師器・土師質土器について

本遺跡では、国分期以降の住居址31軒、掘立柱建物址1棟、土塙約400基、溝10本などが確認され、平安時代末期を中心とした多くの資料が得られているが、出土土師器・土師質土器からは、大きく四時期に分けられる。出土した皿、壺、鉢などについての各時期の概要を示すと以下となる。

笠木地蔵Ⅰ期…壺、皿、灰釉陶器壺が出土している。壺、皿の口縁は玉縁である。全体的に薄いつくりで、横ナデ後、外面下半～底面にかけてヘラ削りを施す。内面に暗文は全くみられない。壺の形態には、器体のカーブが下膨れ状のものと直線的なものの二種類がみられる。

笠木地蔵Ⅱ期…壺、皿、羽釜が出土している。壺、皿の口縁部は外反し、やや肥厚している。底部は糸切りであるが、器体部にも底部にもヘラ削りはみられない。壺、皿とも器体は直線的である。羽釜は、内外面ハケ調整が施される。本遺跡の資料中に灰釉陶器はみられない。

笠木地蔵Ⅲ期…皿、壺、台付皿、台付壺、鉢、釜が出土している。なお、ここで言う釜とは、丸底を呈し、口縁に長さ5cm、高さ1cm～2cm程度の小把手1対がついたものを指し、小把手のないものは鉢としている。

皿、壺、台付皿、台付壺は、いずれも横ナデ後、底部を糸切りしたもので、削り、磨きは全くみられない。このうち、壺には、整形時に外面に棱が付くものと付かないものの二種類が認められる。なお、Ⅲ期までの壺、皿類の胎土にみられた赤色粒子は、含むものと含まないものがある。

釜、鉢は、輪積み後の漬しが比較的丁寧に行われており、その後ナデ調整が施される。底部内面、口縁部内面などに指頭痕の残るものがあるが、ハケ調整、削りなどは行われていないようである。

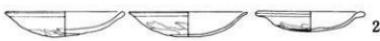
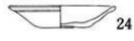
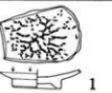
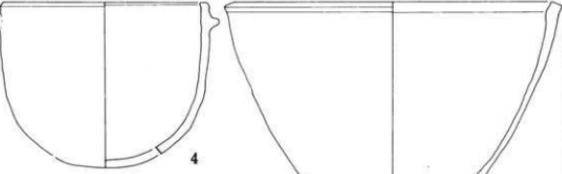
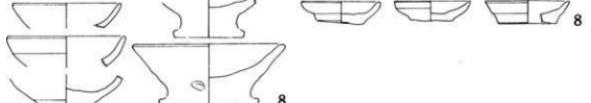
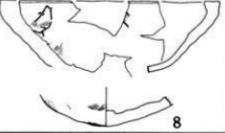
笠木地蔵Ⅳ期…壺、皿、鉢、内耳鍋が出土している。壺、皿は、Ⅲ期に比べ薄手のものが多く、また、整形も丁寧で焼成も良好である。鉢は、これとは逆に胎土に砂粒が多く、整形は丁寧であるものの焼成は不良である。内耳鍋は、壺、皿と同様に薄いつくりで、丁寧に仕上げられている。

以上が各時期の土器の概要である。本県内の土師器・土師質土器については、坂本美夫、末木健等によって大綱が示されており、本遺跡においても、また、既報告の北堀遺跡・東新居遺跡においてもそれを準拠とした組み立てがなされている。坂本等の編年に照らし合わせると、以下となる。

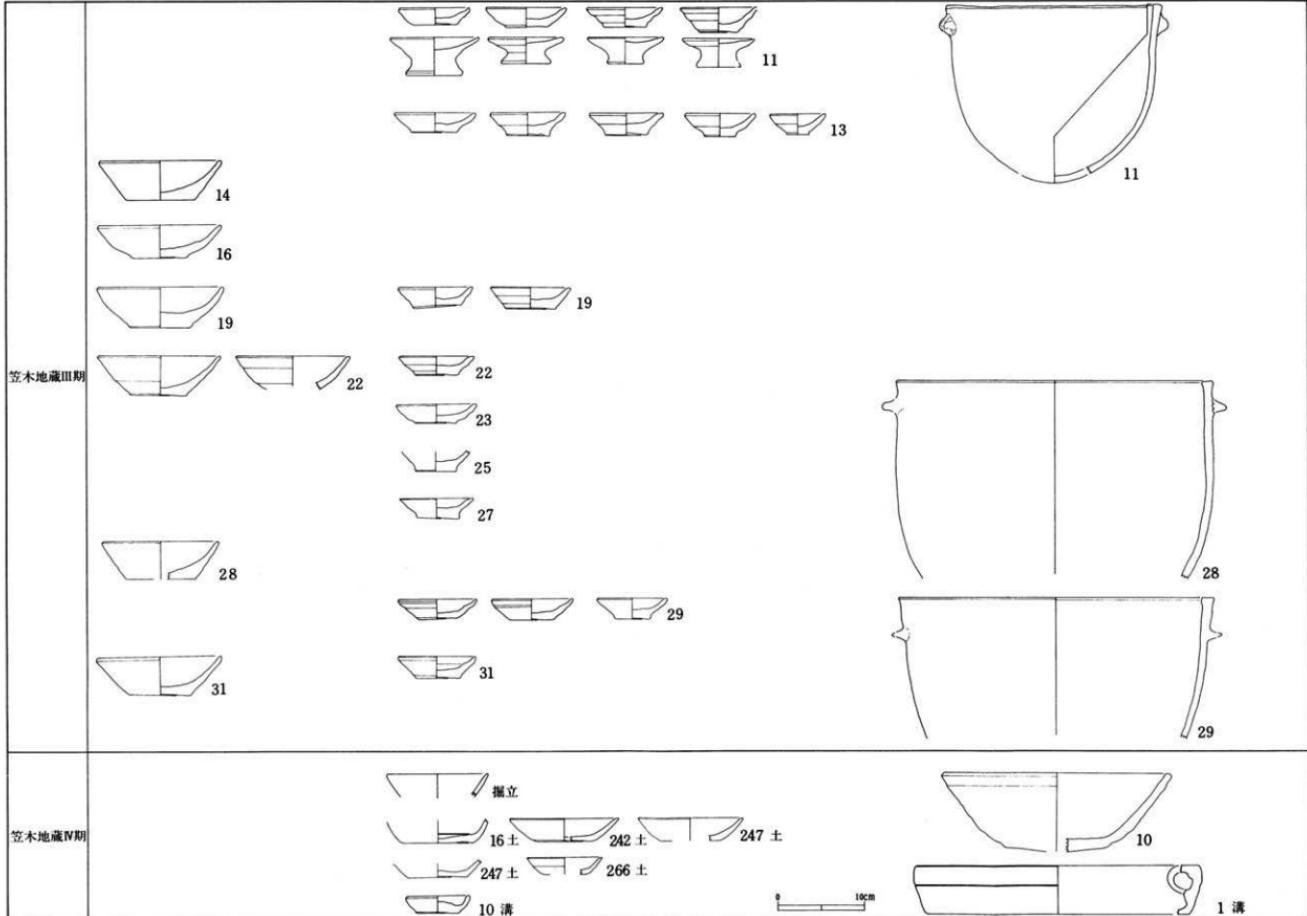
笠木地蔵Ⅰ期…Ⅲ期に相当し、10世紀後半に位置づけられる。

笠木地蔵Ⅱ期…Ⅳ～Ⅵ期に相当し、11世紀代に位置づけられる。

笠木地蔵Ⅲ期…Ⅶ期に相当し、12世紀前半に位置づけられる。

時期	器種	环・台付环	皿・小皿・台付皿	鉢・釜類
笠木地蔵I期				
				
笠木地蔵II期				
笠木地蔵III期				
				
				
				
				
				
				
				

第135図 土師器・土師質土器編年図 その1(数字は住居址を示す)



第136図 土師器・土師質土器編年図 その2(数字は住居址を示す)

笠本地蔵Ⅱ期…相当するものがなく、時期不明であるが、一部は13世紀代と考えられる。

ここで、笠本地蔵Ⅱ期について触れてみたい。該期の住居址は勝沼バイパス274地点で3軒、同338地点で1軒、同319地点で1軒、東新居遺跡で1軒、北堀遺跡で7軒が報告されているにすぎない。なお、この数値は、床面直上もしくはカマド内から該期の遺物を出土した住居址に限った数値である。このように、本遺跡も含めて、すべて一宮町内で確認されている。これに駅迎堂遺跡群、御坂町の姥塚・二の宮遺跡例が加わることになるが、これらは『和名抄』に記載された郷名のうち、山梨都能呂郷、林部郷、井上郷もしくは八代郡八代郷あたりに比定される地域で、『和名抄』成立以降も、該期まで集落が営まれていたことが窺える。

さて、本遺跡では、確実な該期の住居址が18軒確認されており、過去の発掘資料を上まわるものとなった。上記の報告書では、該期の資料をいずれも12世紀前半代に位置づけている。坂本等による土師器編年の大綱は今後大きな変更を必要としないと思われ、該期の資料の位置づけも、細分はまだ行われていないものの、灰釉陶器が伴わず、古常滑製品も伴出しないことにより、その空白期間への位置づけがなされているのであって、根拠として弱いものではないと考えられる。

本遺跡出土の該期の資料には、灰釉陶器も古常滑製品も伴出していない。隣接の北堀遺跡においては、常滑は出土しているものの、該期とは全く別の土壌からの出土で、伴出ではない。その点で、過去の編年の根拠によって、笠本地蔵Ⅱ期についても12世紀前半代としたいが、次の点から笠本地蔵Ⅱ期については12世紀前半と区切らず、12世紀代としておきたい。第一点として、古常滑製品の伴出がないことが12世紀前半に区切る根拠であることに関して、山梨県全体をみても常滑自体の出土量が周辺に比べて少なく、該期に全く伴出しないか特定し難い状況であることがあげられる。また、平安時代末期～鎌倉時代初期にかけての古常滑製品は宗教用品として用いられることが多く、民衆用でないことも、該期の堅穴住居から土器と伴出しにくい理由とすることも可能であろう。第二点として、前述したように、該期の住居址である1号住居址内で、白磁鉢の底部が伴出していることがあげられる。この白磁鉢は、台部の成形法などから12世紀後半以降とされている。ただ、現段階では該期の白磁雜器類の細分は行われておらず、大まかな時期区分であるため、笠本地蔵Ⅱ期の土師質土器と年代的に一致するか、あるいはズレが生じるのかが微妙であり、年代を決定するのは困難である。また、本資料については、床面直上ではあっても、壁に倒れかかるような状態での出土であり、伴出と判断してよいか迷うところである。

ともかく、この2点から、笠本地蔵Ⅱ期の資料について、12世紀の前半とは区切らず、12世紀代としておきたい。なお、これらの資料については、坯をみても前述したような二種類が存在し、今後細分が可能と思われる。そのため、編年図には状態の良い資料をできる限り入れることとし、住居址単位でカマド内、床面直上資料を載せることとした。

ところで、長野県茅野市高部遺跡では、土師質土器を出土する住居址どうしの切り合いが確認されており、平安時代後期Ⅱ期という位置づけのなされる住居址を同Ⅱ期の住居址が切っていると報告されている。その内容について触れてみると、平安時代後期Ⅱ期には灰釉陶器が少

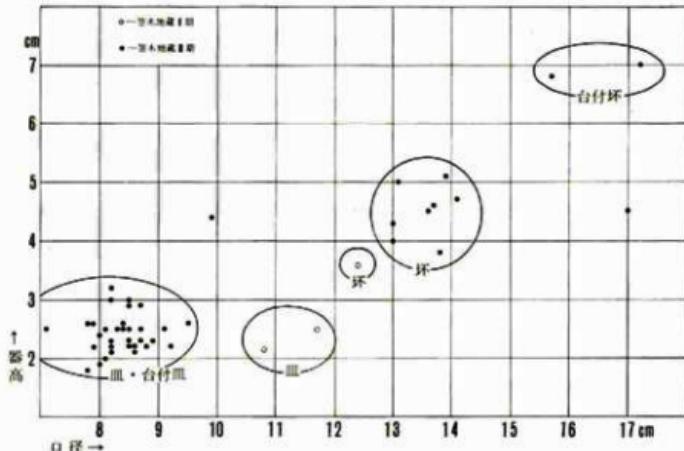
量併い、皿には口径10cmを超えるものと、8cm程度のものの2種類がみられる。同Ⅱ期は、灰釉陶器は全くみられず、皿は口径8cm程度のものだけになる。また、台付皿の底部に板状圧痕のみられるものが存在することなどを特徴としている。一方、その年代については、板状圧痕を中世的土師質土器皿の特徴を示す技法であるとの見解及び前述の住居址の切り合い関係から、平安時代後期Ⅳ期を平安時代最終末(12世紀末葉)に位置づけている。

笠木地蔵Ⅱ期には、口径10cmを超える皿は全くみられず、後述するように、すべて、8cm~9cmに納まるもので、高部遺跡の平安時代後期Ⅲ期に相当する。本遺跡資料中には、底部に糸切り痕とは別に、数条の傷様の圧痕をもつものがみられる(第42図4、第66図1・2、第120図4など)が、板状圧痕であるか特定できない。しかし、小皿、台付皿、壺という器種の組み合わせからは、笠木地蔵Ⅱ期と高部遺跡の平安時代後期Ⅲ期とは同一時期とみなして差し支えないと思われる。

また、鎌倉市藏屋敷遺跡では、多量のかわらけが出土しており、細分が行われている。その中で、中世Ⅰ期という分類がなされ、13世紀前半に位置づけられる一群がある。その構成は、底部が手捏ね整形のもの、底部が糸切りの碗の一部、同じく糸切りの皿の一部で、組み合わせは、口径の大小はあるものの、基本的にはこの三者から成るとしている。底部手捏ねのかわらけは、かわらけ編年の最古に位置づけられ、12世紀末~13世紀初頭とされており、これを判出しない、鶴ヶ岡八幡宮境内出土の円柱状高台を有するかわらけ(本遺跡の台付皿=筆者)には、後述する新山遺跡などの資料から平安時代土師質土器の系統という評価を与え、12世紀後半代という位置づけがなされている。さて、東京都新山遺跡の53号土塹出土土師質土器は、足高高台皿、同壺、及び蓋(台付皿と思われる=筆者)からなり、12世紀前半~中葉とされる。

笠木地蔵Ⅱ期の資料中には、底部手捏ね整形も足高高台皿・壺も存在しない。足高高台皿より新しく、底部手捏ね整形よりも先行するものとして、台付皿、台付壺の一群を位置づけるとするならば、本資料には、12世紀代のうち、むしろ中葉~後半代の年代を与えることも不可能ではないと考える。

第137図には、笠木地蔵Ⅰ期、Ⅱ期の皿、壺、台付皿、台付壺の口径と器高とを示した。皿及び壺についてみてみると、Ⅰ期の壺に比べⅡ期の壺は法量が大きくなっているが、これとは逆に皿はⅠ期に比べⅡ期が小型化している。Ⅱ期の皿は、口径で8cm~9cmに納まるものがほとんどである。Ⅰ期の皿には、すでにヘラ削りはみられないが、まだ薄手であり、また、それ以前の皿に比べてもそれほど極端な縮小化がみられるとは言えず、日常什器と考えてよいであろう。しかし、小型化したⅡ期の皿(小皿と呼ぶべきであろう)は最早日常什器とは考えられない。このような小皿の「盛るための容器」以外の用途としては、飲器、灯明皿などが想定されるが、前者においては素焼きであり、何らの漏水防止剤をも塗布した痕跡が認められることから液体と係わるとは考えにくいくこと、後者においては、口縁部にタール状付着物の認められるものが、多くの資料中唯一例だけしか存在せず、逆に数少ない資料である壺に三例認められることから、いずれもが否定される。該期の土器を出土している18軒のうち、実に12軒からこの種の小皿は出土しており、とくに1号、13号住居址からは6個体、2号、11号、29号住居址からは



第137図 笠本地藏Ⅱ期・Ⅲ期、皿・环類法量図

4個体も出土している。このように、一軒の住居内からの出土数が多く、また出土した住居址の割合が高いことからも、日常什器とは考えられなくても、具体的用途は不明ながら、なくてはならない存在であったと思われる。

ともかく、口径12cm～13cm程度の伝統的な皿は全くみられず、日常什器として引き継がれてきた环、皿のセットは笠本地藏Ⅱ期には崩れ、皿が欠落することとなる。

一方、笠本地藏Ⅲ期には、推定口径12.4cm(242号土塚)、同12cm(247号土塚)と、12cm程度の口径をもつ皿が再び出現すると考えられる。ただ、これらの資料は破片であり、口径については多少の誤差を考慮しなければならない。また、笠本地藏Ⅲ期という時期の年代的位置づけ、これらの資料をⅢ期までに含めることのできない根拠などが弱く、皿の再大型化については可能性に留めておきたい。Ⅲ期においた資料は、ほとんどが土塚、溝などの単独資料で、住居址の切り合いなど、確実な相対資料ではないことから共伴関係などを引き出すことは不可能である。これらをⅡ期においた根拠は、器肉が薄手であること、整形、胎土、焼成などが丁寧で質感がⅢ期のそれに比べて違うことなどによる。また、その年代的位置づけであるが、10号住居址覆土から出土した鉢(片口鉢か)は13世紀代に位置づけられるということである。^(注2) 内耳鍋は明らかに中世の所産である。これら以外についての年代的位置づけは困難であるが、笠本地藏Ⅲ期として、一応13世紀代以降としておきたい。

注1…… 両道跡とも現在整理中である。駿迎堂遺跡群では該期の住居址が確実なところで1軒、住居の形態、カマド位置などを考慮すれば5軒存在する可能性もある。二の宮、姥塚遺跡では確実に該期と判断できる住居址はないようであるが、土器は出土している。

注2…… 埼玉県立歴史資料館、浅野晴樹氏の御教示による。埼玉県内には、この種の鉢が多くみられるとのことである。

2. 住居址について

本遺跡で確認された住居址は、堅穴住居址31軒、掘立柱建物址1棟であるが、これらは出土土器から、10世紀末以降のものである。堅穴住居址については、この他に壁やカマドが削平され、床面の固く踏み締められた部分だけが確認されたものが数軒存在しており、さらに軒数が増えることは確実である。

調査区全体でみてみると、住居群は大きく東西に二分され、調査区中央部分には住居址はみられず、土塙も極くわずかである。ただし、東西の住居群に時間的な差や、出土遺物の違い、住居内施設、構造などの差は認められない。西側の集落は多くの土塙群を伴い、東側の集落にはそれが少ない。また東側集落は、中心部分に小河川が當時流れていたことが予想されるが、その河川を中心に営まれた集落と考えることもできる。なお、東西の住居址空白域の距離は70mを測る。

さて、前節での出土土器の細分に照らし合わせてみると、

笠本地藏Ⅰ期……2軒(21、26)

笠本地藏Ⅱ期……1軒(24)

笠本地藏Ⅲ期……18軒(1、2、4、5、6、8、11、13、14、16、19、22、23、25、27、28、29、31)

笠本地藏Ⅳ期……2軒?(10?、掘立柱建物址)

となり、笠本地藏Ⅲ期を中心とした集落であることが窺える。

それぞれの住居址については次表に示したとおりであるが、以下のようにまとめられる。

笠本地藏Ⅰ期…隅円方形を呈し、カマドは東壁に構築される。柱穴は存在しないか、もしくは
壁柱穴で、床面中央部に柱穴はみられない。

笠本地藏Ⅱ期…隅円方形を呈するが規模は小型化する。カマドはコーナーに構築される。柱
穴はみられず、住居内ピットもコーナーに存在する。

笠本地藏Ⅲ期…隅円方形を呈する。住居の規模は、Ⅰ期、Ⅱ期に比べ、遙かに大型のものか
ら同程度のものまで、バラエティーに富む。カマドは、南東、北東コーナー
に構築されるものがほとんどで、4本柱穴が多い。住居内ピットは、Ⅱ期同様、カマドの存在する辺のコーナーに1基設けられる。

笠本地藏Ⅳ期…掘立柱建物に変化する。なお、10号住居址については、この時期に含められる
か不明であり、また、カマドも炉も存在せず、住居以外を考えるべきであるかもしれない。

このような変遷がみられるが、遺物の出土のない7号、9号、12号、17号、18号、20号、30号住居址のうち、特殊な住居址である12号、20号住居址も含めた多くの住居址は、カマド位置
などからⅢ期に含まれるものと思われる。

ここで、特殊な住居址とした12号、20号住居址について触れてみたい。この2軒の住居址は、
カマドが存在せず、もちろん、それに変わるべき炉も存在しない。柱穴は壁沿いに存在し、床
面中央部には存在しない様子で、住居内空間を広くとるようにつくられている。床は全体的に
固く踏み締められており、壁は緩く立ち上がっており、その壁も一部に貼り付けられた部分が

住居址表

時 期	住居№	平面形	規 模(m)	カマド位置	柱穴	住居内ピット	その他
笠本地蔵Ⅰ期	21号住	隅円方形	推定 4.3×3.0	東壁南寄り			
	26号住	〃	4.0×3.0	東壁やや南寄り	壁9	西壁コーナー2	
笠本地蔵Ⅱ期	24号住	隅円長方形	3.2×2.7	南東コーナー		北東コーナー1	
笠本地蔵Ⅲ期	1号住	隅円長方形	4.1×3.6	南壁中央	4	カマド西側1	
	2号住	〃	6.6×5.6	南東コーナー	4?	不明	
	4号住	〃	5.6×4.1	北東コーナー	不明	南東コーナー1	
	5号住	〃	5.3×4.2	北壁東寄り	不明	不明	
	6号住	〃	4.9×4.2	北東コーナー	4?	不明	
	(7)号住	〃	4.9×4.6	南東コーナー	4?	不明	
	8号住	〃	5.6×4.6	南東コーナー	4	カマド脇1	
	(9)号住	〃	4.2×3.0			中央1	
	11号住	隅円方形	4.7×4.7	北東コーナー	不明	不明	
	(12)号住	梢円形	3.7×2.8		南壁4		
	13号住	隅円方形	5.4×5.2	南東コーナー	4	南西コーナー1	
	14号住	隅円長方形	4.1×3.6	北東コーナー		南東コーナー1	
	(15)号住	〃	?×2.8				
	16号住	〃	4.0×3.4	南東コーナー?			
	(17)号住	〃	4.8×3.9		4?	北東コーナー1	周溝アリ
	(18)号住	隅円方形	推定 4.3×4.3	東壁南寄り	不明	北東コーナー1	
	19号住	隅円長方形	4.2×3.7	北東コーナー		南東コーナー1	
	(20)号住	梢円形	4.3×3.2		壁9		
	22号住	隅円長方形	4.9×3.7	北東コーナー	不明	南東コーナー1	
	23号住	〃	4.0×3.5	南西コーナー	不明	北東コーナー1	
	25号住	〃	推定 5.7×4.7			南西コーナー1	
	27号住	〃	4.0×3.6	南西コーナー		南東コーナー1	
	28号住	〃	3.1×2.6	北東コーナー		南東コーナー1	
	29号住	〃	3.8×3.4	南東コーナー	不明	南西コーナー1	
	(30)号住	隅円方形	4.1×4.1	南東コーナー		南西コーナー1	
	31号住	〃	4.1×?				
笠本地蔵Ⅳ期	10号住	隅円長方形	3.9×3.0				
	掘立柱建物						

() 内 床直、カマド内からの出土遺物ナシ

確認され、かつ固く縛まっている。一般的な住居とは明らかに異なるものである。なお、これらの遺構からは、遺物はほとんど出土していない。また、その位置も、東西に分かれた集落に1軒づつ分かれていることから、笠木地蔵Ⅱ期の集落に伴う倉庫あるいは作業場のような存在ではなかったかと想像される。

Ⅲ期には、竪穴住居址はみられず、掘立柱建物へと変化するが、一宮町内のみならず、県内においても、Ⅳ期相当期の調査例はほとんどなく、掘立柱建物を住居とするのが一般的であるのか、あるいは、さらに竪穴住居址が引き継がれるのか明言できない。ただ、中世に位置づけられる長坂町小和田館跡D地区では、29基の竪穴が調査されており、カマドは存在しないものの、柱穴、カーボンなどが確認されている。覆土からは、土師質土器、常滑なども出土しており、竪穴住居址の可能性が強い。また、武川村宮間田遺跡でも同様な遺構が調査され、覆土から土師質土器が出土しているとのことである。とすれば、本遺跡の所在する地域においても、該期にまで竪穴住居が引き継がれることは充分考えられる。^(註3)そのため、掘立柱建物は一般的な住居とするより、家父長層など特殊階層の住居とみなす方が妥当であろう。

以上のように、本遺跡で確認された遺構、遺物のうち、とくに12世紀代と考えられるものについて若干の私見を述べてみた。『和名抄』記載の郷のうち、山梨郡林部郷が本遺跡や隣接する北堀遺跡の所在する地域に比定されるであろうことは、北堀遺跡の報告で述べたが、この周辺地域は、郷の集中する地帯であり、当時最も繁栄した地域と言える。このような地域において、本遺跡の調査により、少なくとも12世紀代までは、竪穴住居を一般的な住居形態としていたことが確認された。

しかし、前述したように、笠木地蔵Ⅱ期とした、土師質土器の小皿、壺類を主体とした時期の住居址の調査例はまだ少なく、また、これらの年代の決め手になる資料がほとんどないのが現状であり、今後、該期の年代的位置づけについては変更も予想される。さらに、集落に伴うと考えられる夥しい数の土塙群の意味、該期に多くみられる小皿の用途など、今後明らかにすべき問題点が多い。

注3……白州町教育委員会、平野修氏の御教示による。

同遺跡では、平安時代以降の住居址34軒を調査しているが、このうち19軒はカマド・炉などは検出されておらず、小和田館跡D地区の竪穴にちかい時期と思われるが、詳細は不明である。

参考文献

- 坂本美夫・末木健・堀内真 「甲斐地域」 『シンポジウム奈良・平安時代の諸問題』一神奈川考古14号 1983 神奈川考古同人会
- 坂本美夫 「土師質土器の考察」 『(伝)岩崎館跡発掘調査報告書』 1977 山梨県教育委員会
- 末木健 「平安時代以降の土師質土器の編年」 『信濃』28-9 1976 信濃史学会
- 山本寿々雄他 『勝沼バイパス道路建設に伴なう古代甲斐国の考古学調査』 1974 山梨県教育委員会
- 山本寿々雄他 『勝沼バイパス道路建設に伴なう古代甲斐国の考古学調査一統編一』 1975 山梨県教育委員会
- 田代孝 「平安時代末期の土器について」 『山梨県埋蔵文化財センター調査報告第4集 豆塚遺跡・東新居遺跡』 1984 山梨県教育委員会
- 長沢宏昌 「北畠遺跡出土の土師器について」 『山梨県埋蔵文化財センター調査報告第7集 北畠遺跡』 1985 山梨県教育委員会
- 坂本美夫 「甲斐の郡く評)郷制」 『研究紀要』1. 1983 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 戸貝正義・飯田文弥 『山梨県の歴史』 1973 山川出版社
- 山梨県考古学協会編 『山梨の遺跡』 1984 山梨日日新聞社
- 岡本範之 『小和田館跡発掘調査概報』 1985 長坂町教育委員会
- 鶴館幸雄 「高部遺跡出土の平安時代後期の土器様相」 『高部遺跡』 1983 茅野市教育委員会
- 服部実喜 「陶磁器・土器類の分類と年代的位置づけについて」 『蔵屋敷遺跡』 1984 鎌倉駅舎改築に伴なう遺跡調査会
- 戸武充則他 『新山遺跡』 1981 新山遺跡調査会・東久留米市教育委員会
- 赤羽一郎 『常滑焼』 考古学ライブラリー23 1984 ニューサイエンス社
- 沢田由治 『常滑・越前』陶磁大系7 1973 平凡社
- 『国内出土の肥前陶磁』 1984 佐賀県立九州陶磁文化館

図 版



笠木地藏遺跡全景



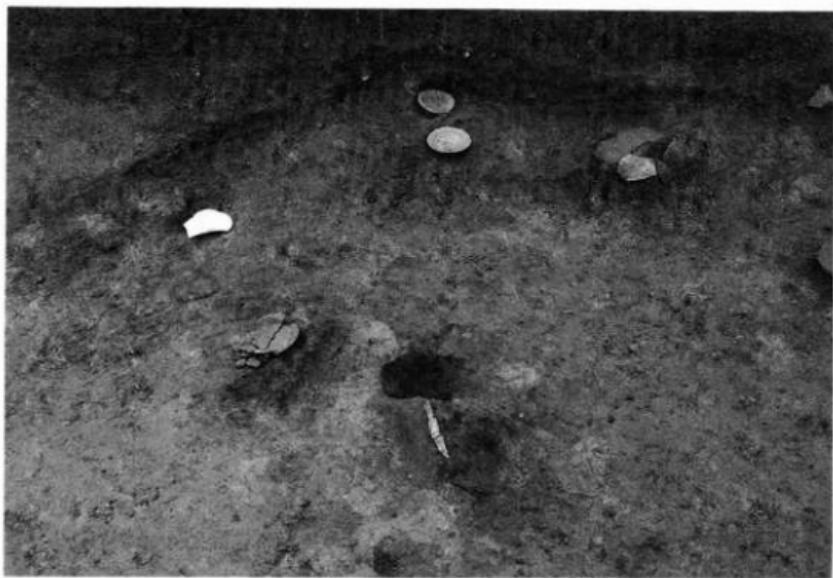
同上



調査風景



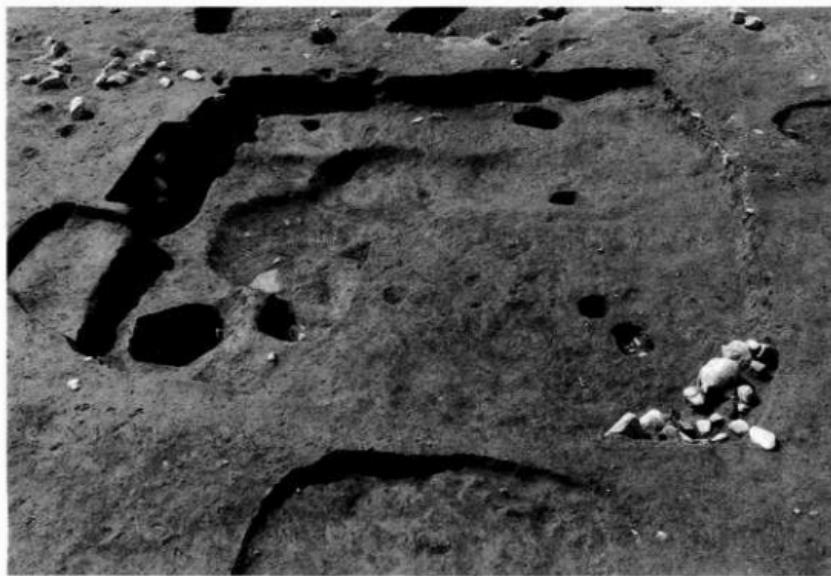
古墳



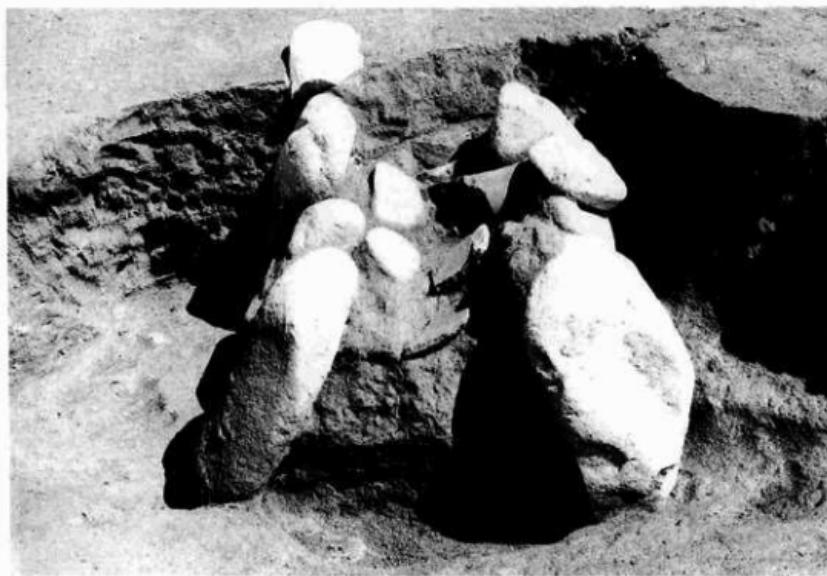
1号住居址遗物出土状態



2号・3号住居址



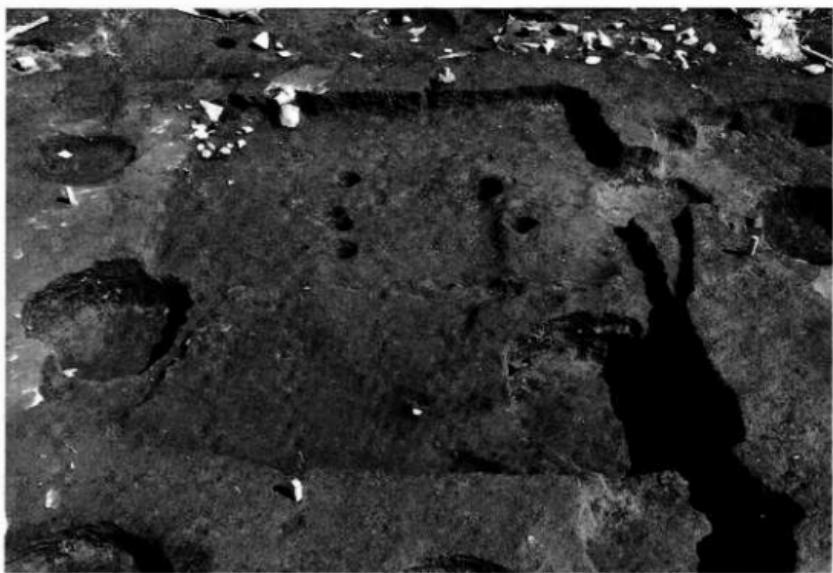
4号住居址



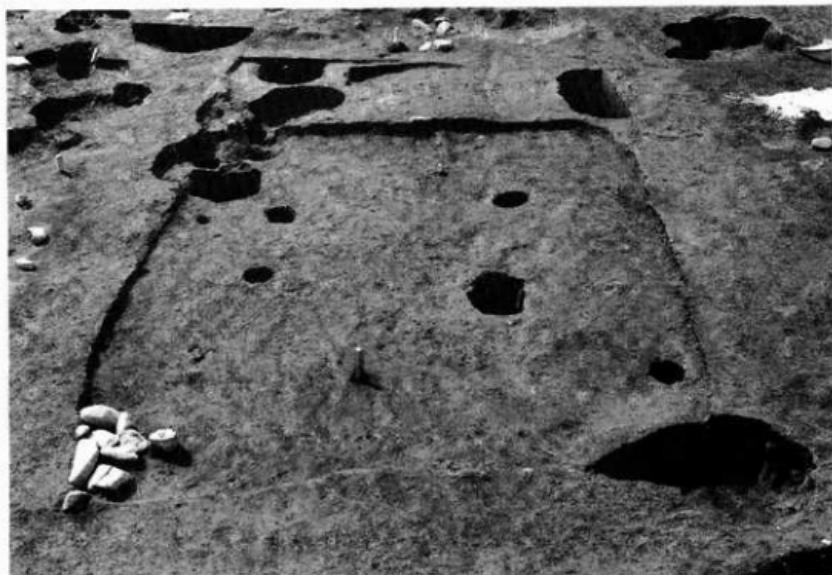
4号住居址カマド(正面)



4号住居址 カマド（側面）



5号住居址



6号住居址



8号住居址



8号住居址 カマド



9号住居址



10号住居址



11号住居址



11号住居址カマド付近遺物出土状態



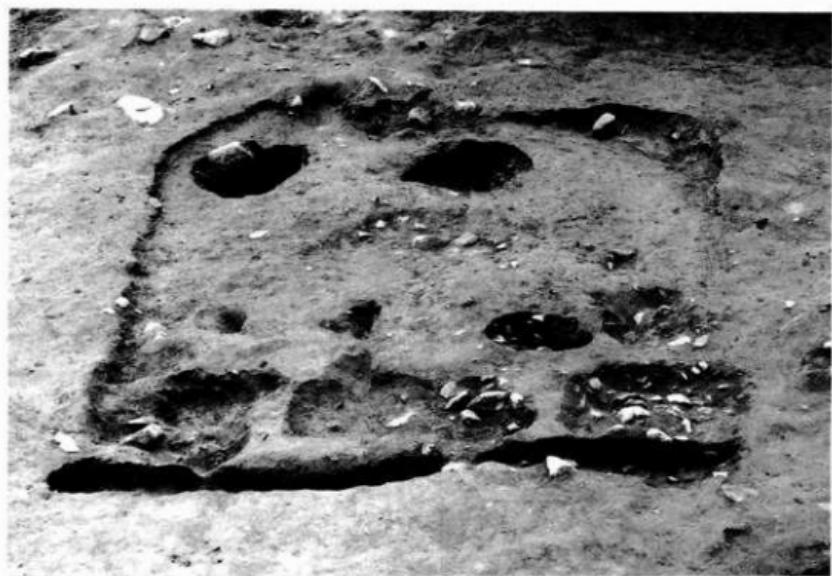
13号住居址



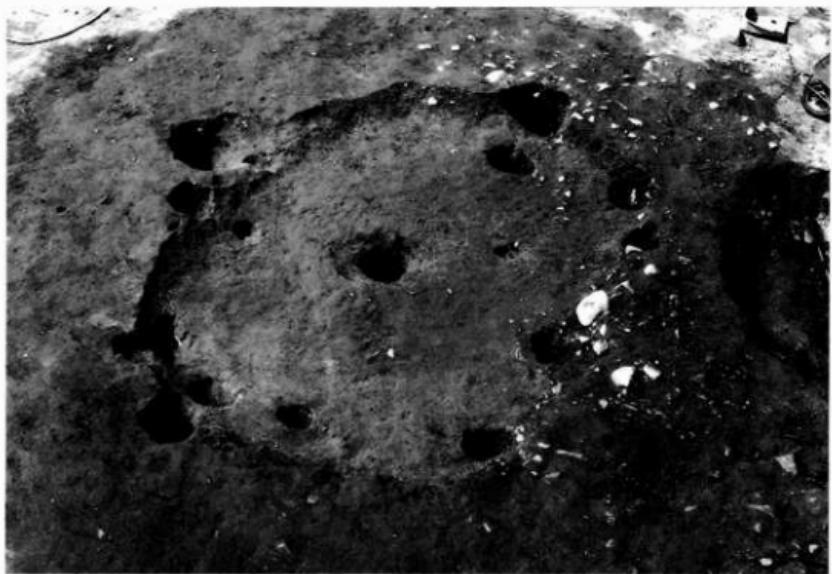
14号住居址



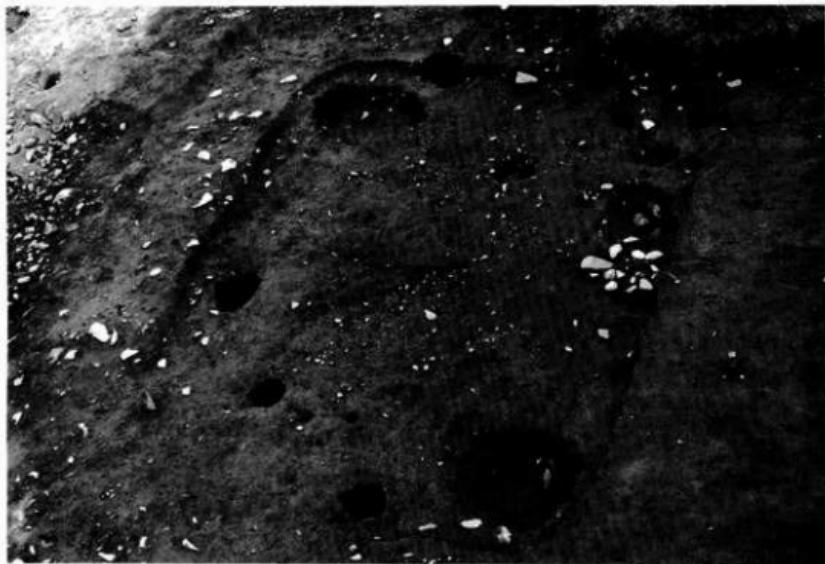
18号住居址



19号住居址



20号住居址



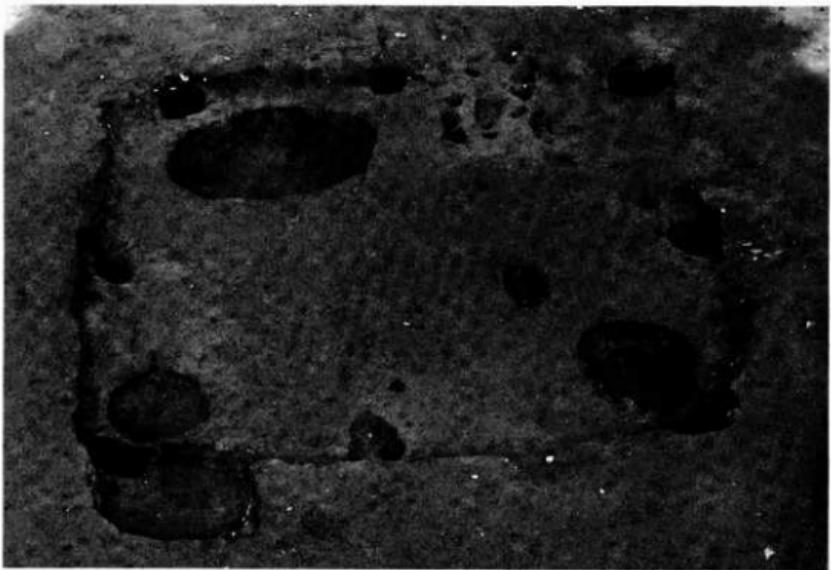
22号住居址



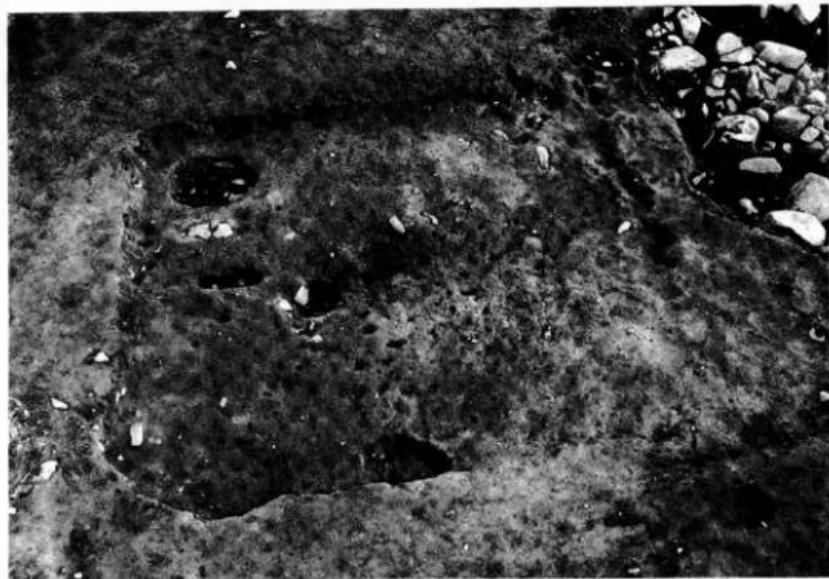
23号住居址



24号住居址



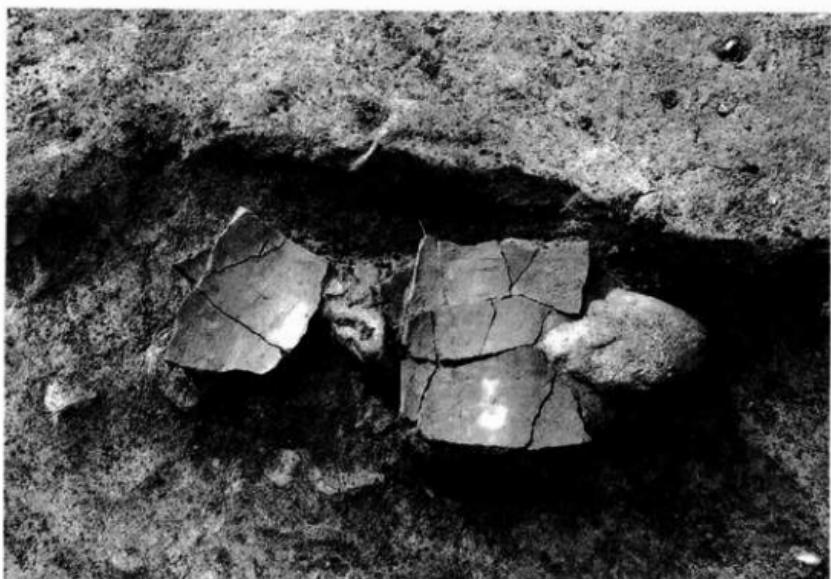
26号住居址



27号住居址



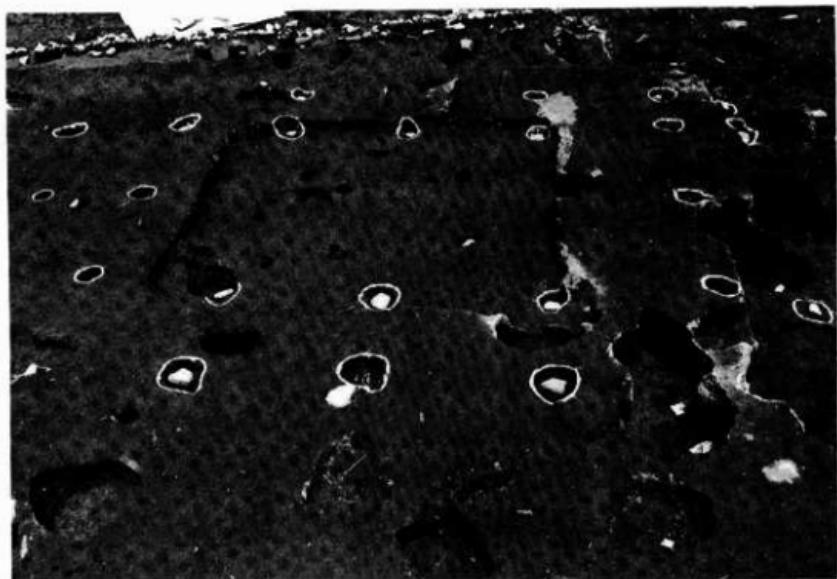
29号住居址



29号住居址遺物出土状態



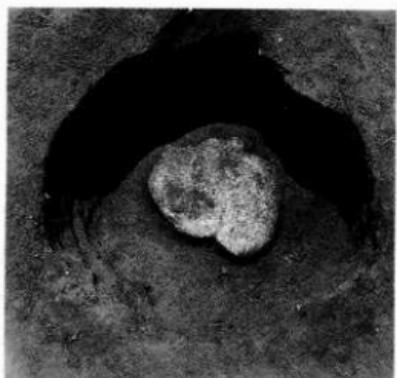
30号住居址



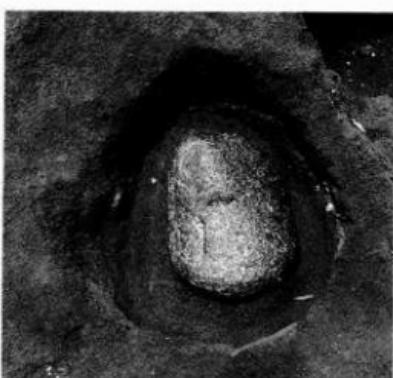
掘立柱建物址（南から）



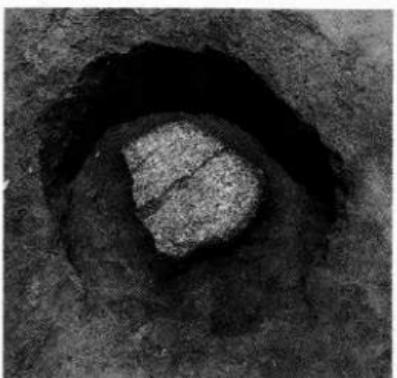
同 上（東から）



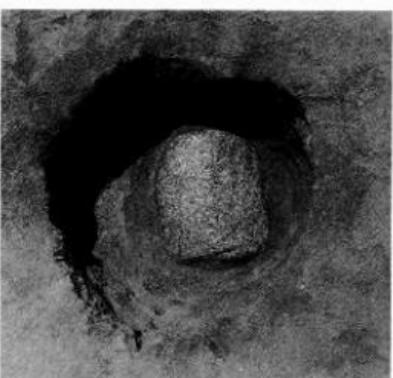
掘立柱建物柱穴 (D-D'×G-G')



同 (E-E'×H-H')



同 (E-E'×G-G')



同 (A-A'×I-I')



同 (B-B'×H-H'セクション)



同 (A-A'×I-I'セクション)



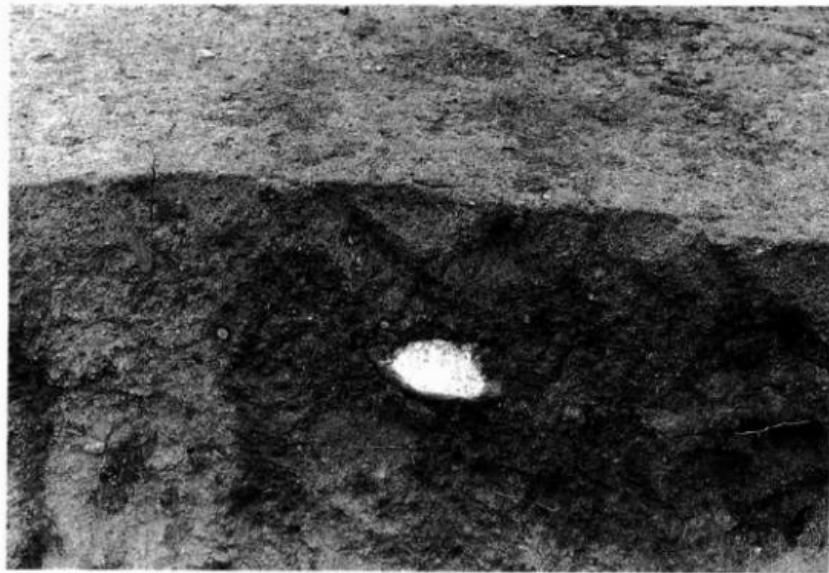
土 坡 群



土 坡 群



土 塹 群



124 号 土 塹 工 具 痕



1号溝・土塙群



川跡



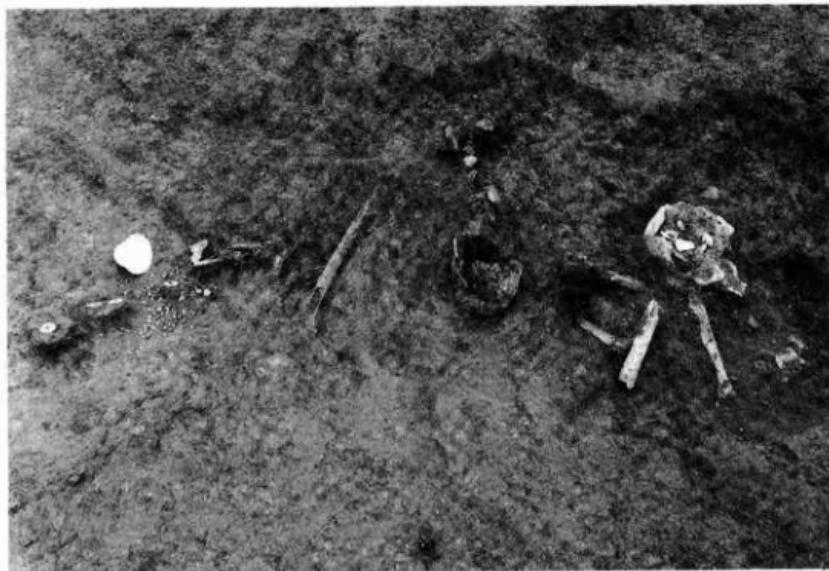
5号・6号溝



5号～8号溝



2号 沟



1号 墓域遗物出土状态



1号墓塚遺物出土状態



3号墓塚人骨



尖頭器（左57号土塁、右グリッド）



グリッド出土縄文土器



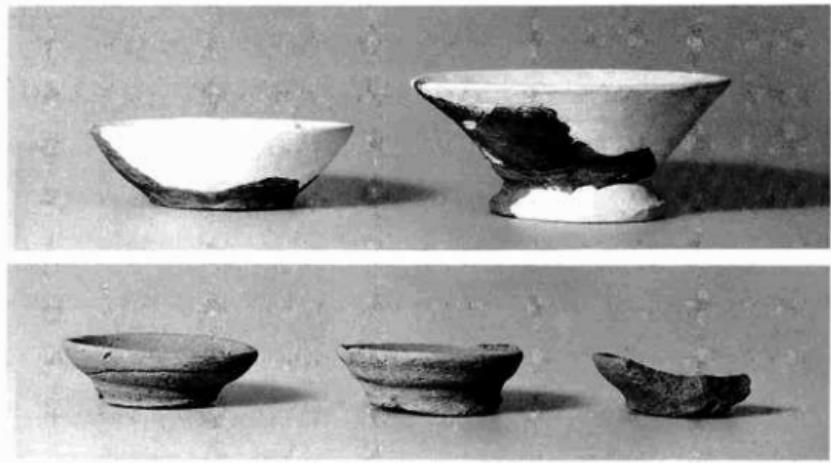
グリッド他出土石鏃



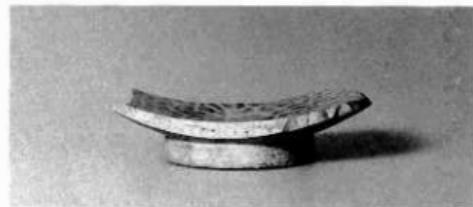
グリッド他出土土製品



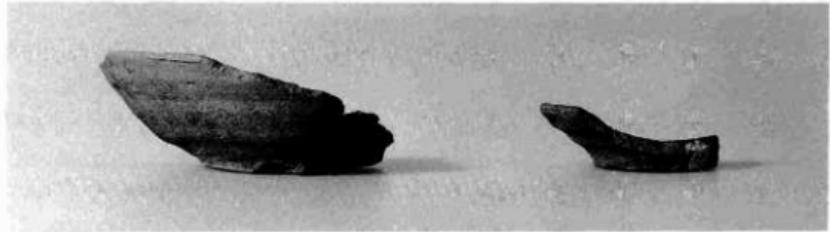
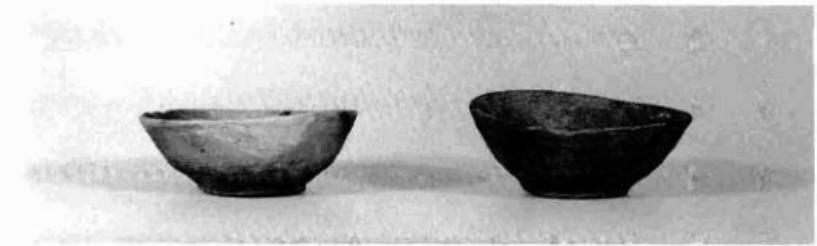
古墳出土金環



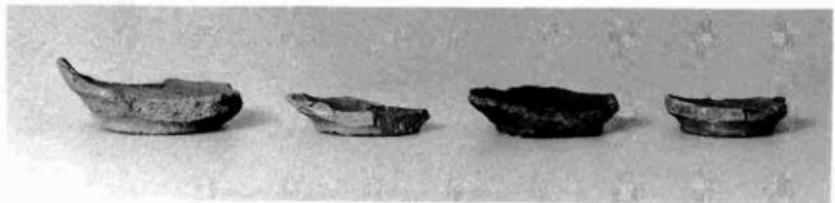
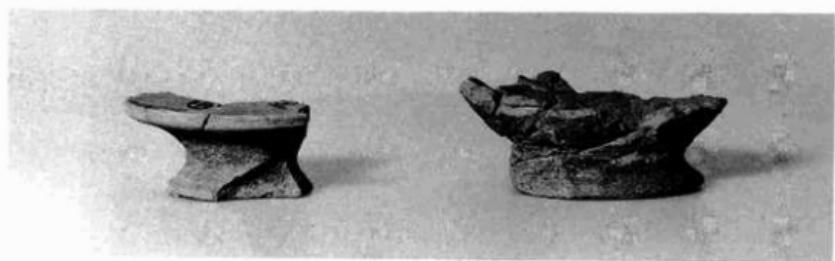
1号住居址出土土器



1号住居址出土土器・白磁



2号住居址出土土器



2号住居址出土土器·白磁



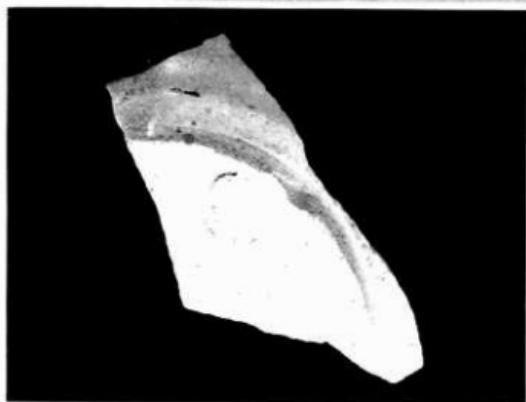
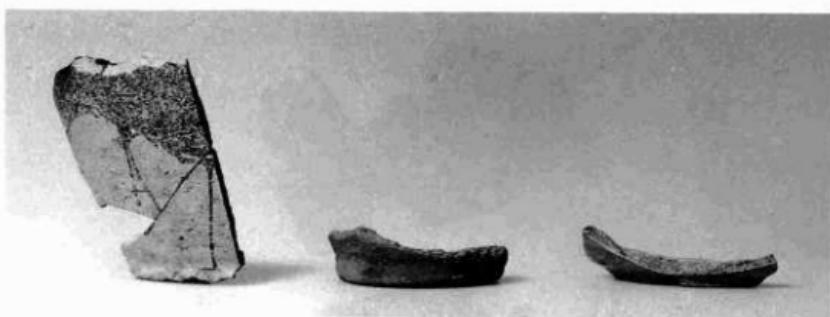
4号住居址出土土器



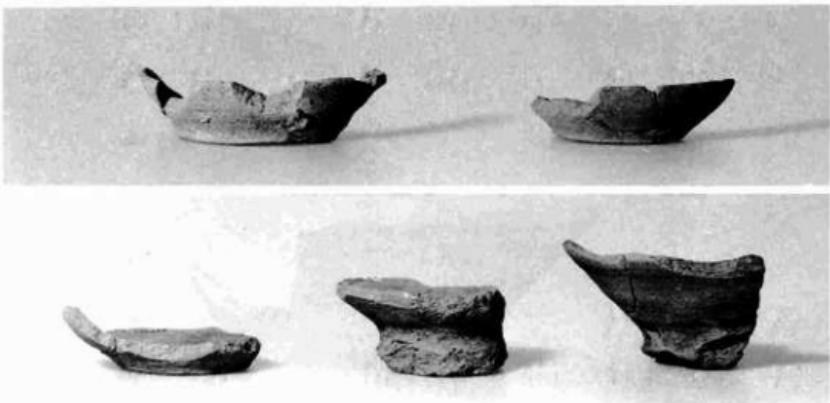
4号住居址出土土器



5号住居址出土土器



7号住居址出土土器·陶器



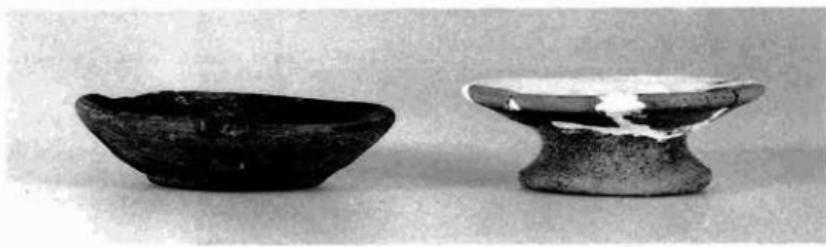
8号住居址出土土器



8號住居址出土土器



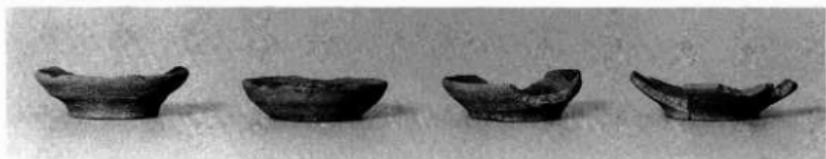
10號住居址出土土器



11号住居址出土土器



11号住居址出土土器



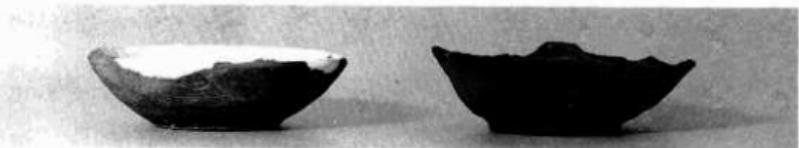
13号住居址出土土器



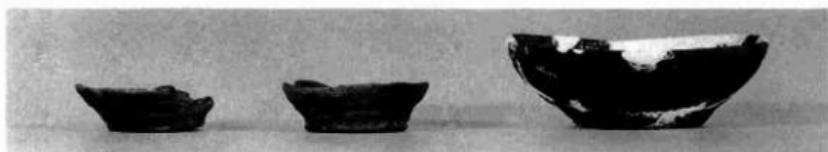
14号住居址出土土器



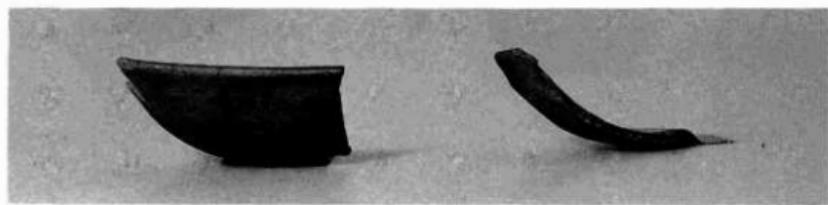
15号住居址出土土器



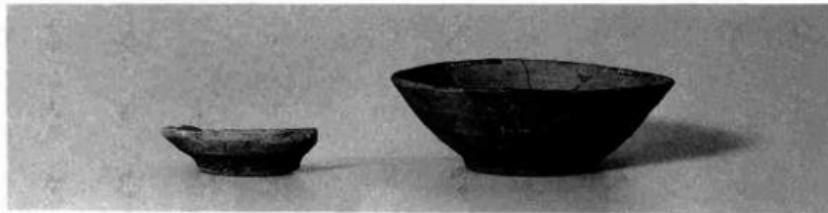
16号住居址出土土器



19号住居址出土土器·炭化物



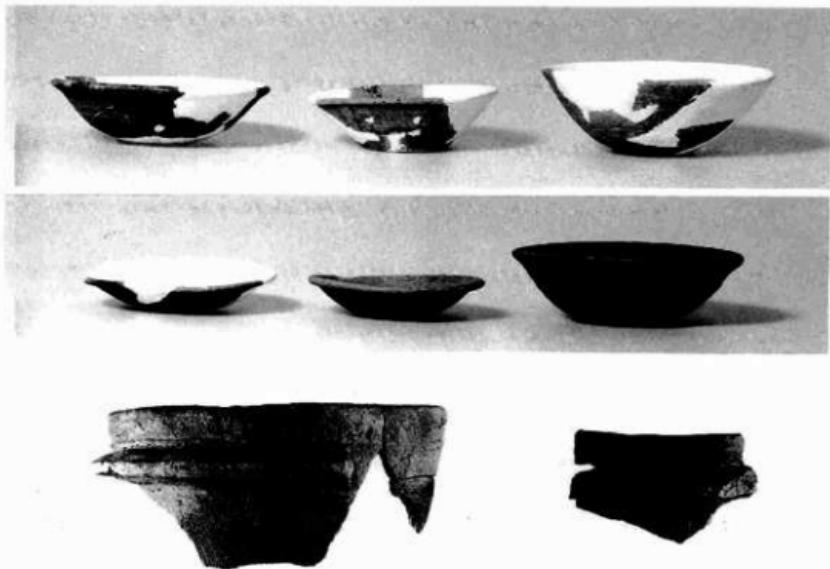
21号住居址出土土器



22号住居址出土土器



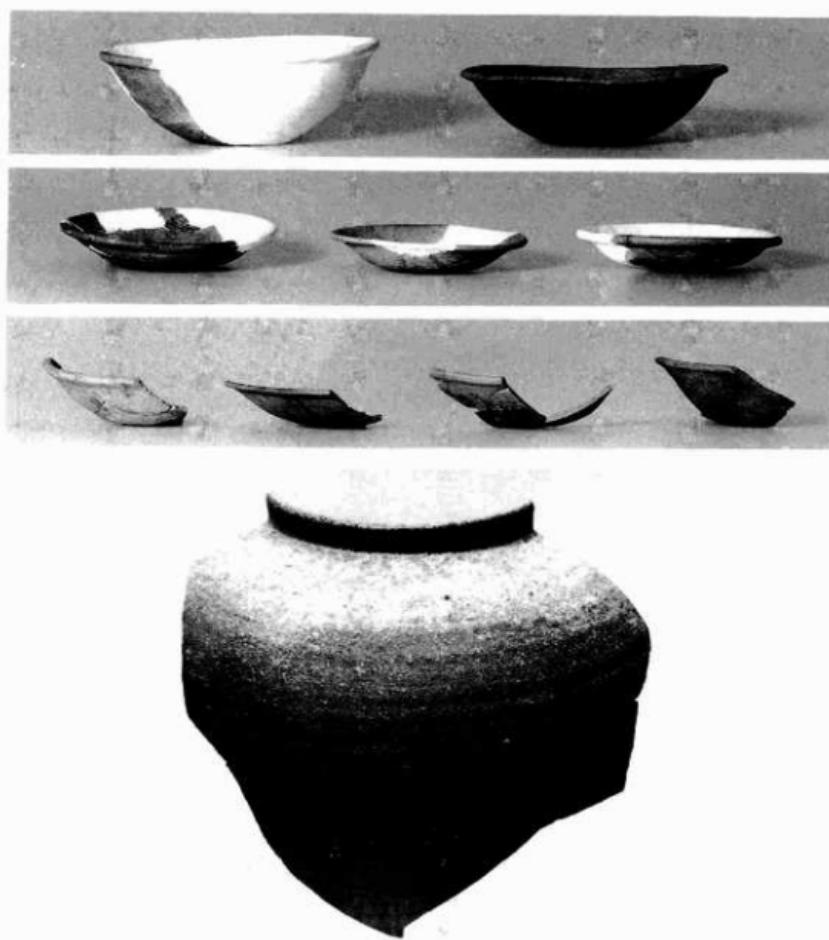
23号住居址出土土器



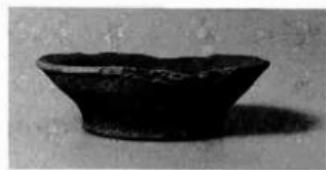
24号住居址出土土器



25号住居址出土土器·陶器



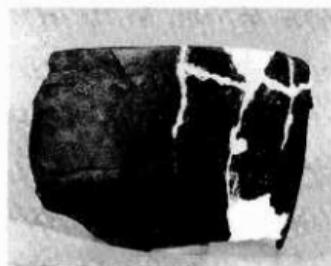
26號住居址出土土器



27號住居址出土土器



28号住居址出土土器



29号住居址出土土器



30号住居址出土土器



31号住居址出土土器



16号土坯



126号土坯



134号土坯



204号土坯



216号土坯



242号土坯



247号土坯



247号土坯



266号土坯

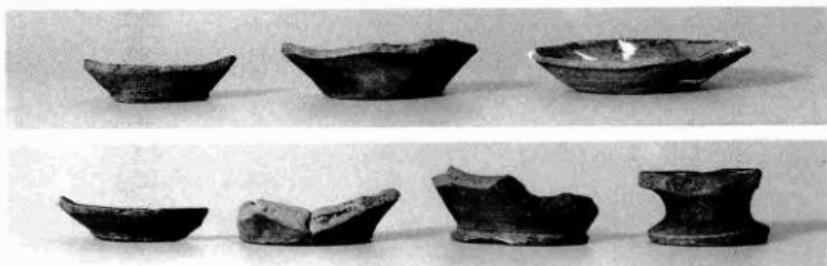


380号土坯



383号土坯

土坯内出土土器



川跡出土土器



溝出土土器



住居址出土石器（左から30・24、右から17・12号住居址、中央はグリッド）



29号住居址出土刀子



1号住居址出土刀子



15号住居址出土铁制品



21号住居址出土刀子



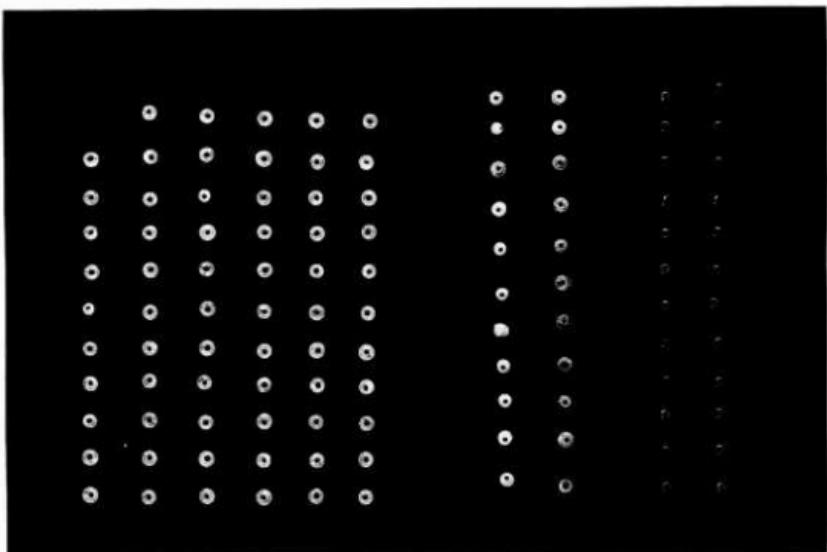
30号住居址出土铁制品



22号住居址出土铁制品



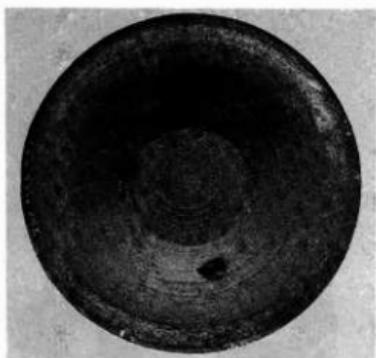
1号墓址出土陶器



1号墓塚出土ガラス玉



4号墓塚出土陶器



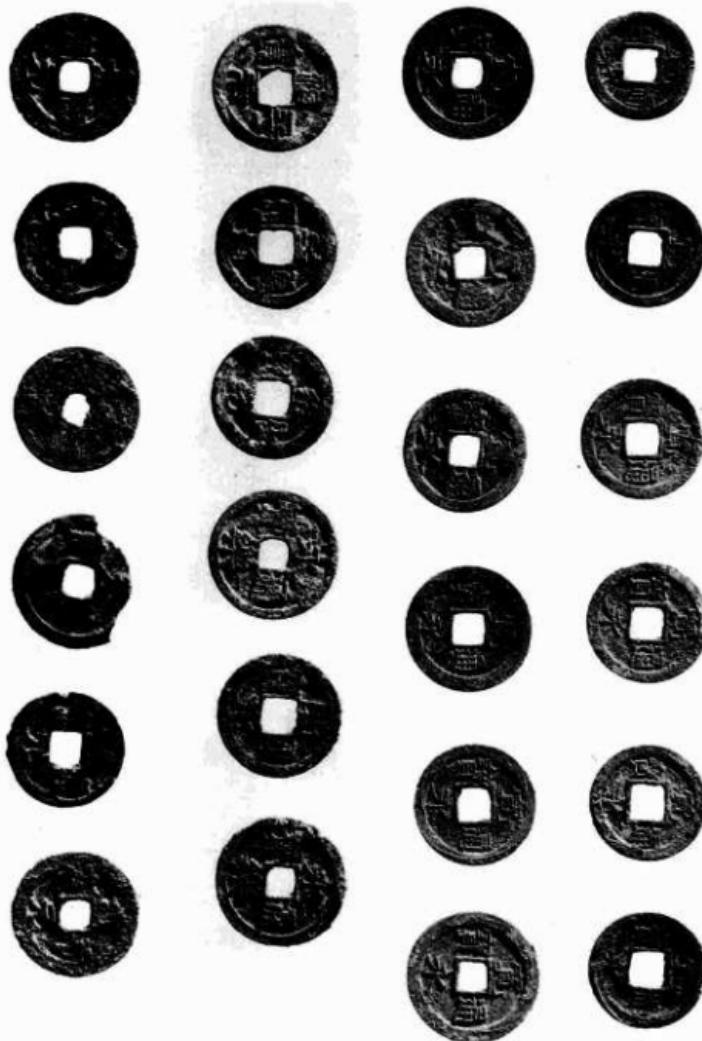
4号墓出土陶器（裏面）



4号墓出土土製品



墓出土 キセル

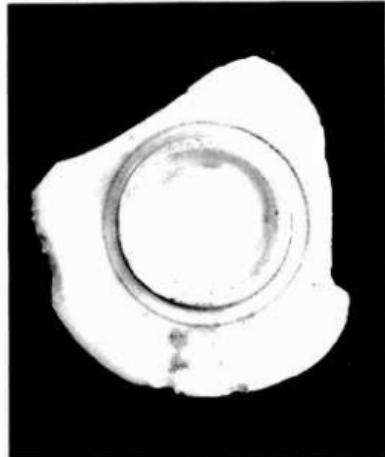
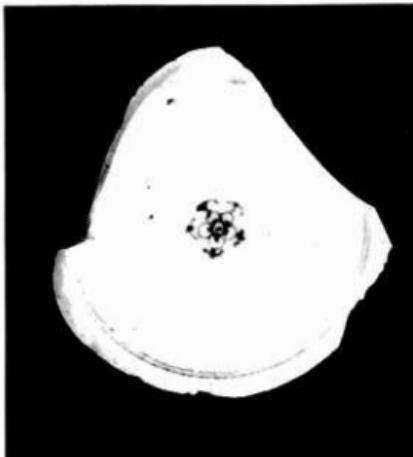


(五
四
二
八)

(英
國
市
印)

(英
國
市
印)

第
四
叶



グリッド出土陶器

昭和60年10月25日 印刷
昭和60年10月30日 発行

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第12集

笠木地蔵遺跡

山梨県中央自動車道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

発行所 山梨県教育委員会

日本道路公団

印刷所 韶峠南堂印刷所

